二十四輩順拝圖會
後篇
武藏
一

嗚嘑懋哉此擧　聖祖已寂五百餘年其東關北陸之靈躅赫々乎斯存唯其有之在人之目睫也披閲焉者雖身未動座足未踏地猶遍巡拜於彼自爲念報之助此擧實懋哉前篇已上木後篇將刻乞余一言因卒書冠其端

文化六星次己巳冬十月

浪速　寶明題

# 親鸞聖人御舊跡二十四輩順拜圖會後篇巻之五

## 目録

### 武蔵國之部



以上

二十四輩順拜圖會後編巻之壹

了貞撰

# 武蔵國

上野國厩橋より江戸日本橋迄　行程二十八里

○上野より西は下野下総常陸の方へ巡拜なす時は武蔵國を帰路に残せり今爰に記するは上州厩橋より武蔵國江府浅草報恩寺へ巡拜しまより東の方下総に到り後に江戸表に出て築地御坊善福寺等へ参詣なすの模様を記せり

## 浅草御坊

江戸浅草にあり通じて浅草御門跡と稱す

東本願寺御門跡御坊所なり本山より輪番加番の僧衆を来らしめ高貴の寺に令を伺ひ事を辨じ兼ては関東の門末を教示せしめ給ふ堂宇巍々として京師の本山に次り

○本堂二十五間に面え左に鼓樓右に鐘樓堂正面唐門惣

門の内坊舎三十六ヶ寺あり○御門主参府なりせ給ふ時ハ先当御坊ニ御着到ありて御登　城成し給ふ其
御格式最他ニ超勝せり
或ハ高家乃御館へ御巡参上野増上寺へ御佛詣ニハ前後の警固非常を禁しめ厳重之報恩講御引上御法事ニも本堂内陣の荘厳整粛ニして御門主出仕ありせ給ひ院家御連枝の僧侶内陣の左右ニ列座あり御堂衆列座の僧達ハ外陣ニ附座して諷経勤行し給ふ衆僧数百人結界の内ニ参勤ありて其行粧厳重なり府内近辺の道俗ハ勿論都て関八州の諸人参詣群集悉く大堂ニ溢れ廣庭に充満せり
其余高貴大家直参乃使者の出入門前に車馬を連ね

浅草東乃御坊表門

対面所
中门
茶所
寺中

浅草御坊

御法事之圖(ごほうじのづ)

浅草高龍山誓願寺
本堂
臺所
東光坊
七内町

太子堂
役所
手水
寺中
表門

献上乃音物さゝげゝり堂中に山を築がごとし

高龍山報恩寺　東派　浣家　日前にあり

謝徳院と稱ふ本堂十二間に面塔中十三坊寺子堂北の方にあり○開山ハ性信上人なり抑當院ハ高祖聖人上足乃御弟子二十四輩第一飯沼性信上人の造建也性信上人俗姓ハ大中臣常州鹿嶋郡乃人なり幼名ハ悪五郎と呼べり後与四郎と改む大力無双勇猛強勢にして心性狼戻也曽て孔法に不揚順讓の心なき荒者なりしが元久二年の春年十八歳ふして諸國武者修行と志し國〻を巡行せしがゆへさして紀州熊野權現に詣ふで ゝゝに其の人ゝさ都にまゝり遍東山吉水に来詣を其比法然上人吉水の禪坊に於て本願他力の妙要を説せらゝ遂

陀超世の悲願にハ十悪五逆の罪人も捨ずして救ひ給はんとの誓ひなれバ悪逆の身をも顧ずひとへに如来の悲願を信じまつり一念称名念佛をすれバ決定して彼國に往生せんこと疑ひあるべからずと尊くも教化ありせ給ふ聴聞の貴賤道俗門前に市をなし錐を立る地もなかりし中に即ち縁端に在て聴聞したるが宿習の善因今宵に顕れしや太師上人の教化ひしひしと胸に響きて殊に難有覚えけれバ感涙滂沱したるが上人の御前に出敬白して曰く我ハ東國常陸の者にて年来の不如意にして物の命を殺し人を悩し悪逆のミ業とし佛法聴聞ハ今日が始めなり我等ごとき罪深き我なりとも弥陀の大悲にて救ハせ給ふとの御教化殊更難有覚て

法然上人
吉水の菴にて
法を説給ふ

給へなれバ是輕くハ御弟子となしてかゝる悪人をも化導なし給ひけりしと其侶輩を伐て墳園乃信者となりにけり法然上人與に郎が實ある志を感じ給ひ扨世に殊勝なる若者なりとて善信坊渠を御坊乃弟子になし給ひ能く教化をなし給へかし老年乃源空が相随ふともいくばくの年か随身せん御坊ハいまだ年若しゆくすゑ弘法乃力にもなるべきものならんとのたまひて聖人の御弟子に賜りける（大師上人此與に郎をある祖聖人に附屬し給ふハ深き御志の有けるにや果して後年聖人第二の御弟子となり常随給仕して関東に赴り念佛弘通のたすけとなり給ふと云ん此時聖人御年三十に歳與に郎年十八歳也）高祖善信聖人與に郎に對し重て他力往生乃宗旨を示んずるに名乘し給ひ則法名を性信と号け給ひぬ是よりして性信坊聖人に常随して暫も御側を放れたてまつらず配所へ

鎮き給ふ時も坂東へ立越稲田に居を占め給ふに常に御
弟子に附添ひ申されけるが其以前建保二年聖人下総
国へ行て御化益ましましける時当国豊田の庄横曽根郷
中に大寺あり年久敷無住となり朽損の古院なりしを無
誰か修造を加ふるものもなく葎生ひふさなり狐狼の栖
となりぬ聖人は荒たる伽藍の尊殿を見得たまひ
性信を寺に住院させしめ十字名号を書してあたへ給ひ
是をおがむるとし教化なさしめ給へされば性信は寺を修
補し住院として専ら真宗を弘通せり 後年同国大みどり山に一宇を起立し龍宮寺是也
建保二年より星霜十九年を経て聖人御年六十歳
貞永元年 御帰洛ならせ給はんとて東国御発足の折
から性信坊も御供申 登りこしが既に相州箱根山

まて聖人関東の方を詠めやり給ひ御涙を浮へ仰けるハ昔久
遠関東にありて衆生を化益せしかど偏執邪見の族
も念仏を信じ今ハ他力往生の教法専ら壮ん之稀なれ
帰洛の後ハいかなる妨げありて安心を乱し門葉を迷し
ぬらんと是のミ悲しくおもハるなりといふに性信法師乃
昔より我に随身し化益を受る事既に三十年所なし
真宗念仏の旨趣に通ぜり親くハ我に代つて関東に留り
門葉乃徒に弥他力信心の旨を弘通せば我に随従給
仕しよりも百倍の功なるべしと呉々仰含られしかバ
性信とかう言なく涙にむせびてゐたるが性信如者を御
弟子と思召されしかバ重恩を命じ給ふより生前後世乃
本望まことそ侍へされど兼てより御別を申さんとの

其後天神教信上人と師弟を約し給へ

何分う恨しくいとゞ衣の袖を涙に押へてさめざめと歎
かれけるが師の命は其重き事泰山のごとし強て辞せんも
恐多し御名残をしくは侍へども仰に随ひ東国にとゞ
まり化益を施し候べしと御受申上ければ聖人殊さら
悦びたまひ性信東国に留りいりのうへが親鸞が自教
等為には哀ゝのほし関東の門葉一國に御坊に預けさむ
らへなりとて數々の什物御製作の御教なと附属あり
せ給ひしかバ性信謹で是を拝受し泪と倶に聖人に引別
東国へ趣りけり偖も性信坊は下総国横曽根に入り
専修念佛を弘通ありしが道俗帰依参集し門葉は市を
なし家に拘ひて性信佛閣を建立しいよいよ宗風を壮ん
にせんとて其地を求むるに幸なる哉飯沼とて廣きに

なかく四方の景色を勝ぬたりかく性信は江沼を埋むるに数十町其中に佛閣を営造し都の聖人へも其趣を伝よられしかば聖人甚御感悦ありて則寺号を報恩寺と下し給ふ性信は佛閣に於いて弘願真実の教法専念称名の行業を説弘め給ふに貴賤道俗参詣群集し渇仰信仰まさりけり聖人の此地に座して教導ありせたまふ真実なりし真宗の繁栄日にまし壮んなりと見えたり（寺記に曰建保二年下総国横曽根に造立し名る龍山報恩寺と号すと云云）○爰に奇異の事あるは貞永元年の夏性信上人は横曽根の古院に於て昼夜他力念佛を教化なしけるが道俗はどひ来りて聞法随喜せり然るに或夜衣冠うるはしき老翁一人諸人退散の後に来り性信上人に謁して云けるはわれは此沼の傍に在所の生理天秘

御手洗の
池に鯉魚を
漁る

今の師此地に来り弥陀の本願を説聞し給ふにより我ら
日夜諸人に交り来て師の教法を受給へる恩ひとへに
取拳之と歓びに絶ず自今は弟子となし給へ我に
御弟子と師と為ひゆへし我等霊を祠廟の裡に崇くし
て仮に貌を現じ来りぬれば今より已後は姿を現ぜずして
諸人に遂し我毎歳正月にば礼式として鯉魚二尾を献ん
ぞし是を以て師弟の印とせし仮令幾代を歴とも
変るのかなくうへしとて性信上人を拝し出給ふと見
えしが形は幻のごとく消て見へざりき性信坊奇異のお
もひを起して人にも語りし後日の音信を待たまひける
就る小甚翌天福元年正月十日の夜のあなりしが
生野天神の社人以下五六人同夜に不思議の霊夢をうけ

影向ありける其の夜ハ天神彼の翁に告て曰く横曽根性信上人ハ
済度利生の聖者なれバ予師弟の約を結べりされば
師を尊敬するの験に吉祥の嘉物として此社のあらんかぎり
今年を始め毎歳定例として鯉魚二献を性信上人へ送るべ
きぞ明日御手洗の池に網して鯉魚を手獲て横曽根へいとや
く献上すべし努々此のこと違ふべからずと告給ひぬ霊夢者
を影向し社人翁ハ六輩同夢を感じ各恐感の思ひをなし
聖人にも語り参せ神勅炳焉なれバ等閑にすべからずと
彼の御手洗の池中へ網を入しかバ夢想に違ハず忽ち其長二
尺の鯉二献を獲たり是ハ天神の示しに違ざりしと此鯉両頭を籠に入れ
社人翁各々相伴ひ性信上人の御坊へ持参し神勅霊夢
を委しく演舌しければ性信上人受させ給ひ備雑ある天神の

生野の社人
鑊恩寺ゟ
鯉魚を
献ル

鍚りのかみ尊先に此始諾を嘗めし事あり是偏に聖人の
御勧化普く濁世末代にまで行く利物偏増し給ふべき
誘ひして愚凡の我等何として神の師範とならるべき
なきふあうじとて人とも神慮の深くはしませば辞せんかもし
るかくに懇ありけれ共これより後御契約に随ひ師
弟の礼を受べきとて彼鯉魚を受納なくして人よりは鏡
餅と一重此鯉を入来りし扉に納め天神へ捧げ奉りて
遂り論させ給ひぬ是を礼譲の紀とし今既に星霜
を経る事六百年一とせも欠る事なく毎年正月御手流
の池網を入れば長二尺の鯉魚二献彼網にかゝらざる事
なし是正しく神の然らしめ給ふ所と思ふくも難有き即
此鯉を扉にの社人里人これを守護し今の報恩寺へ遂

獄ハ穀恩寺これを納め例のごとく鯉を入来りし扉へ唯
信上人の本像に具へされ鏡餅一重を入て帰し其外
生徒まてハ此鏡餅を天神の壇上に七日備へ其ハ後
細にきざミて氏子の者へ与へ侍るとぞ又穀恩寺ニハ
此鯉二尾とも上人の本像へ備へ並緩兇をとこまかにきり
て参詣の諸人に与ふる事例也
○穀恩寺百有余年以前多賀谷が妨難によりて江戸浅草へ引張
ま横着根飯沼の古院ハ圓光寺と号けて今に並弟子とあまり
性信上人の本像此横着根圓光寺にあがめ右天神の中ろより
鉄上の鯉と本像に備へしまより江府穀恩寺へ送りきたる之年
正月十六日此鯉魚を割て参詣にかつと鯉開きとも鯉割とも称し
て江戸中の門徒群集し争ふて割肉を受る凡六百年の今も此礼
式闕るすることなく叡ひうれ畏ハ霊世こぞりてこれを尊ふ
とむ

○生野の天神の社より鯉魚を性信上人に献じたる後かの社の前なる御手洗の池の辺りに松の樹あり此松の下へ毎朝暁天に粛しく衣冠したる翁来りて報恩寺の方に向ひ謹く礼拝して去ること附ふして数年を歴たり社人始めの程は心も付ざりしがいかしう見始めて怪しくと思ひ忍びやかに跡に付て帰る所を見るに彼翁天神の社壇を押開き入ぞと見へて失給ひぬ社人大に恐れて是まがふ方なき神慮の性信上人を拝し給ふなるべしとて此松に注連を結ひ廻し礼拝松と号けて伏拝とさ称し今に崇め尊となす

○伝説に曰く延宝六年の春天神の別当大生寺病死せし砌が其後住の僧強欲にして報恩寺へ鯉魚を遣ることを本寺と末寺との旧法に似より此儀止めらんとて吉例に背き闘諍の儀なりり

禮拜杉（らいはいすぎ）

されバ緘に彼僧の變病竹此ハ膝実のごとくなれバ汝に謀言をもつて
出く正気なし然に正月下旬某の名を門記なる若弟に筈
森右衛門天神の靈告を蒙りたりれ旧例のごとく青陽乃嘉式報
恩寺の上人に献進すべし天福の昔より一とせも怠りぬ我師ハ
鯉なる嘉物なるに當年始めて是を闕るハ我心に叶はねバ汝に別當なさば
狂気させんと給ひけやく鯉魚を献せずんバ汝等も撲殺なる
べかりけると怒り乃御夢にて告給ふと見たりく覺ハ覚えなり更人
大に驚き別當大生寺まで社人里人等談じ合せ早疾御
淡の池に網しけれバ約したるがごとく二尾の鯉魚をとりより其儘
例にまかせ報恩寺へ送り定例調ひなれバ別當乃病ひ忽ち
癒し諸人いよいよ天神乃靈異高祖聖人性信上人の高徳を
仰ぎて其已後献鯉の礼式を正しくして勤めけるなし

○性信上人貞永元年より下總國横曾根報恩寺に於ひて
眞宗念佛弘教し給ふに遠近乃道俗帰依集し聞法

随喜し他力往生の宗法あらはせん之就中其徳別に讃歎すべく
して種々の奇特多かりける建長二年の秋夢想の感あり
一人の化僧きたりて性信上人に告て曰く奥州信夫郡
出湯山に彼が蓮生の骨あり又根一株の松を植しこと
せりと性信夢覚めてしばらく我奥州と化導せんと
といふ志あり是必此因縁の引く所ならんと既に奥州に赴き云
湯山に入て廟所を求むるに果して一つの塚あり又根一株の
松あり性信是を穿ち掘られば白骨顕然たり夢想の
違はざるの事が因縁の地なるがゆゑし霊験むなしからずと
終に一宇を営み念仏門を弘通させんとて一寺を造立し
法得寺と号せしめ自ら専修念仏の弘通ありける 今は浄土宗の寺となれり
光徳寺と名つく性信建長文永の間に同ケ寺を造立せり所謂相州
かまくらの法得寺上総国藤原法得寺下総国飯河彼法徳寺今の法得寺なり
○寂に讃

性信上人
出湯山より
衆生の
骨を
拾ふ

智法丘尼といへる信心堅固の禅尼あり 性信上人の息女なりとぞ 高祖聖人の御弟子なりしが正元の比性信上人自像を造り是を謹智尼に附属し報恩寺の住侶を譲り其より十有余年をへて建治元乙亥年性信上人御年八十九歳七月十七日念仏三昧に住して大往生を遂し給ふ○報恩寺数百年相続し二千余石の領田ありしに多賀谷某といふ者此所領地を押領せんと横しま坊悪をなし彼小寺を此江府浅草へ引うつして霊跡と相続し横曽根の旧地を開光寺と号るなり委く前にいへり此所に今横曽根の古跡を報恩寺村と号く二千石の領地は多賀谷に奪れ今は武家の所領となれり

開光寺の記は後巻下総の部に出

宗祖親鸞聖人真像 報恩寺第一の霊像也本堂たりの檀上に安置なり 聖人六十三歳御自作の彩像にして是関東御記念の御影像と称

○性信上人ハ嘉禎元年の春上洛ありて祖聖人に謁しけるに東國に於いて宗法ひろまりしに門弟日々に増益し信心決定のともがら弥増に多きよし言上しけるが聖人聞しめされ是まで予が生涯のよろこび何事か是に如んと御喜悦かぎりなし其時性信数日滞留の後本國へ帰りなんと其催しに及びけるがさりとても再び聖人の御別を告まゐらせ遠く関の東に趣かんことのかなしさ今一度聖人を御供申関東へ御下向あらしめまゐらせんとさまざま歎かせ玉ひけれども此時聖人御老年にならせ玉ひ御経典の撰述ましましければかなひがたかりしが性信御坊関東にありて化導ありしゆへ親鸞は下向なくして何かせん猶よくすゝめていよいよ教化ありて弥ふかく決定せしむべしと性信今は詮方なく衣の袖を絞りさめざめと泣たまふ聖人窓に向ひ玉ひ別離若は悲歎のおもひ含兼定離なる娑婆の境界なれば形見を参らせんとて性信の為に自ら御寿像を刻ませられ是此親鸞と思へと関東北門に御来代の記念なりとて性信に授与したまふの寿像なり此寿像ハ七十又歳の御自作にて今に猶存り又珠数をおたまへ御眼巻いるしと云々

○霊宝不同 教行信証六巻 為祖聖人御制作御自筆 性信上人へ御附属

○九字名号 信心歓喜の名号といふ左右ハ為祖聖人性信上人の御新ある御真筆なり ○十字名号 為祖聖人の御筆 報恩寺開闢の御時名号を本なる

これ ○御繪傳二巻 傳文本山第三世覚如上人御筆 画ハ康楽寺第二代浄賀法眼筆 ○佛舎利 雷神毘沙門尊 又是をもつて又猶あり 法然上人より親鸞聖人へ御附属の佛舎利なり

を左に聖人自ら筆を染咒を書付後人が其後ハ秘て懐みさし其咒と曰 飛 阿陀伽鬼奢帝憲 修多光蘀陀摩掘

○三部経 弘法大師御真筆 ○九條御袈裟 ○善導大師御影 唐畫 ○法然上人御影 御自画 以上七品法然上人より親鸞聖人に御附属 ○二十[illegible]

龍返の宝剣

記一冊如信上人御筆 ○天神名号尊朝親王の御筆 ○六字名号法然上人御筆 ○六字名号蓮如上人御筆 ○六字名号後陽成院の御宸筆 ○六字名号弘法大師御筆 ○龍返寶劔此末流に記す ○又高祖聖人より性信上人へ御附属の什宝左のごとし

○高祖聖人笈 箱根にて御別れの附笈の中へ種々の宝物御染筆の書籍などを納めて性信上人へ授与し給ふ ○聖人御鐃鈸 ○御團扇 ○御刀 ゑぞに候とぞ 名作なり ○御巾着 此巾着ハ聖人御別れの附性信上人へ与へ給ひとぞ 二重蔓の金襴 中に一つ 蓮肉貝玉銭 記児あり和銅又珠貨銭至和なり ○聖人御真筆性信上人へ御附属乃御書二通 ○聖人御不拘所御茶へ ○松風御茶磨 聖人乃 御生害之 ○経余すべて一切経撰考在拝此附 将軍家より聖人へ御寄附の二函 ○御長刀 雀剣とらへ 名作なり

○龍返乃宝劔 長二尺六寸七分 寺説に曰高祖聖人より性信上人へ附属の宝刀也性信上人鹿島明神へ詣でんとて霞が浦三ツ又の渡りを船にて越給ふに俄に風波雲を起し雷電鳴とどろき船もすでに覆らんとす船中の諸人大きに恐れ啼叫ぶ限り

爰に性信上人おもへらく是我懐中の宝珮と龍神得まく欲するなるらんと即此宝珮を水中へ投じ給ふに忽雲晴風収りて船も難なく着岸せり然るに下向の船中に此三ッまでこと祈給ふに忽蛟龍形をあらはし頭上に彼宝珮を載て船端に来り性信上人に是を捧げゝる性信希代のおもひで給ひ龍返の宝珮と号け給ふとぞ

○或記に曰武者修行の士あり報恩寺の門前に居睡りし飯沼より悪龍形を来り彼者を呑んとす于時士の懐中より短剱飛出てこれを防ぐ悪龍怒て水中へ逃去りぬ性信門内よりこれを伺ひ見て此剱を不思議に貴み飯沼へ入て悪龍を誑出せり悪龍は此ところを逍遥ありて常州三又の水中に隠れ住む其後性信上人の息女浣智比

丘尼は網を懐にして彼三文を渉りけるに船既に覆らんとせ
しけるに尼の懐中より網をのがれ飛出て水底に飛入ぬ
然るにしばらく船去りたる尼悔うさふに再び此所にして龍蛇現じ
網を捧まつり尼に返しあたへ網の名となれりと云云　当院什宝龍蛇多あり　本山代々の真蹟古
年古佛多くして
其外あまた器物

○金龍山浅草寺は豊島郡浅草にあり本尊は正観世音坊舎に十一区又
重宝堪なり推古天皇の御宇当寺草創ありしが朱雀院天慶五年
平公雅といふ人武蔵国司となりし時当寺観世音の霊異を感じまつり
御願の余り七堂伽藍を造立し田園数多寄附せらるそれより
以来歴代　将軍家より修造の料役あり寺領等も附属し猶又
毎月十八日観世音の縁日なれば貴賤の群集をろ挑ひなし江都第
一の繁花本朝無双の霊場也
○浅草の東に明王院といへる寺あり此庭に姥ヶ池といへるあり往昔は此辺
人の住る家居もなく草深く茂りたる武蔵野の原なりける此野中の
一ツ家に老たる婆とまさ年頃なる女と只二人住けるが旅人の

悪しき嫗にて行暮たる旅人を止め石のまくらにて人を殺さしむ
よく寝入たる所を伺ひ其上へ大ひなる石を落しかけ打殺して旅用のもの
衣類をも剥とりける家に一人の旅人ありて此野原を行くれて宿る
かの家居のいかにもいぶせんとおもへど彼一ツ家の内へ入れば嬉しく
思ひ足をもやすめて歩行なるが一つくともるゝ笛の音の物哀なる
聞へけるを耳をそばだてけるにききければ此笛にて和歌を謡しける
「日は暮て野はれなれども宿かるな浅茅が原のひとつ家のうち
旅人不思議のおもひをなして此婆が家に立入て宿をかりぬ婆ま
待うけたる事なれば心よくもてなし彼石の枕をあたへて寝させり
旅人は笛の音の歌の心のいぶかしく急ぎ枕をもひかりて寝ら
ぬまゝに起出て見れば程なく伺ひよる小屋の彼婆来てさとはしか
と睨び廻てあまた取大石を旅人の枕のあたりへ落しければ旅人
魂を飛して大いに驚きそも足にまかせて走り出二里ばかり逃のびければ
今はよも此所までは追来らじとて一ツの堂のありける内へ入て暫
くまどろみける夢にその容顔けだかき天童一人顕れ給ひ我
はこれ汝が日頃法信ずる浅草寺の観世音菩薩なり汝の難を救んと笛
の音にて知らせしなりと示め給ひ見て夢は覚ぬ旅人奇異の思ひをなし
いよいよ信心肝に命じ観世音の御名を間なく唱へ終に危き難をま

淺草の一ツ家

ぬかれたる報しも彼老婆は積る悪業の己が身に報ひ来りて[illegible]
しく旅人と見るごとに押こみしく財宝衣類を奪ひとりけ
れどもしらじ舒明天皇の御宇三月十日とかや年の頃二八計り
の其かたち麗しき児一人唐織の衣を着るさまなる襟をつけ此
一ツ家に宿をかりむ波婆これを見て心の内によろこびに絶じ
年来いくたの旅人を止めぬれど布の衣麻の襟の外なる見も
しらぬかゝる錦を纏ひたるはじめていかなる稚児
の只一人波母が膝に来りなるやと思ひより強にりそめ己が娘と此
て孫住せしめけり此女年はまだ十五の春秋を経て今人是稀なる
る一ツ家にて生立ぬれど岩木ならぬ人間の身なりしかば此児の艶
なる貌優にやさしびたりさまのやさしきを見しより思ひそめのびく
かよふ路もなくて思ひの煙焼けるまゝに独り物思ひに沈を
なりけん
「さりとも人は心より思ひそめて淵のかるゝ事ひ語りなり
と添し歌の心なる哉小夜更る頃此女稚児が部屋へ忍びへとぞ
思ひに死なん我の君中へとぶふに志らせうばよしや命のをしからじ
岩せ旅人とゆり先世は此方もさとが袖ぬれつゝいなりまへうらじ稲妻
の光を待ちる身の契りそゞ石の枕とりつともよ志むじは夏を待ちるゝ

老婆ハかゝる身のうへもしらねど今ハ稚児もよく〳〵寝ねらん打
うろ〳〵と衣裳を剥んと側にたゞずみたれバ稚児の寝たる枕の
上へ情なくも押落し紙燭を見るにまよひたれバありし稚児ハ何地へ
行しやかげもみえバいとゞしき空腹ゆへひとりの娘ばかりにおきて
死居たるハ浅まし何とてかゝる所に卧居て此ありさまはあやしけれ
ぞや去にても稚児と遊せしこそ妄の孫女の魂を迷はせんとて家
の傀儡にさせしも只蜘蛛の巣蟋蟀の畫のことく人形の見へざれば
外の方へうけ出尾花かきまぜなどきを乱しあるそハや家にて稚児の居
らぬよしてて入家の内へ走り入て見れば娘が死骸を抱上げ無慙なりける
家の果や末期まで老が身の唯人のいのちをちゞめ奪ひ
得へし財宝は娘ひとりの料なるぞや今は中〳〵後を継べき
しるしをさへうしなひし浅ましやと夢の限り泣ける渡世て血のなみだ
に泣わたり噎きるが寝るともあらでまどろむ其夜の夢
露に宿りし稚児の姿も現れ出海悪行を積りし須弥ようも
なく罪業の深き事滄海も尚及ばじ女の悪業に死したるも如
来の方便にて浅草寺の観世音なりと告給ひ忽金色の菩薩
と化し西の方へとびさりたまふにおどろき夢さめ見れバさ
もえふとくもたえてありん母うらしかの不思議を同じ日に見し

とは忽ち一念発起して年来殺せし旅人乃死骸は家の傍なる
池水の底へ沈めけりしが娘が亡骸も又此池へ葬そのこゝろに庵をと
めて亡人の霊魂を祭り食を断ち二十日余り経て此池中へ身を投じ
水の底に入て終りけりされば後人婆が志を哀んで此池の側に
祠を建又一ツの寺院を造立し母子と旅人の亡魂を弔ひけるよし
と武蔵野の荒たる野寺とはいひ伝へぬ白河院の御製に

〽むさし野は霞が関やひとつ家の石の枕や野寺あるてふ

かくも詠じ給ひける古へものがたりにて今への様も知りけ
ならしまでね今の明王院は彼野寺乃跡なりとかや

○東叡山寛永寺園城院は上野に起立し人皇百九代後水尾院
の御宇寛永年中慈眼大師草創乃霊場なり天台宗にして寺中
乃坊舎三十一ヶ寺あるも

御廟を始め寺領一万石堂宇の荘厳珠玉をちりばめ天下無双
の霊境なり

○浅草今戸道より右へ行けば吉原の郭楼に至る其向の堤を日本
堤といひ大門口に衣紋坂あり此郭へかよふものゝ此大門口にて
我着る衣紋つくろひ髪をきらぞく遊君のもとへ通へるん
坂の名あり女のらえてうたへる世なりせば衣紋坂乃いふにゝ

えつらふ人はたゞしと吉田の兼好ぬしの定めと見へ侍べる

○隅田川は江府第一の大河なり一名浅草川ともいふ伊勢物語に

武蔵と下総の国との中にいと大なる川あり夫を隅田川といふ其河のほとりにむれゐて思ひやればかぎりなくとほくもきにけるかなとわびあへるに渡し守はや舟にのれ日も暮ぬといふにのりてわたらんとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なきにしもあらずさるをりしも白き鳥の嘴と脚と赤き鴫の大さなるが水のうへにあそびつゝ魚をくふ京にはみえぬ鳥なれば皆人見しらずわたし守に問ければ是なん都鳥といふを聞て

名にしおはゞいざこととはん都鳥我思ふ人はありやなしやと

とよめりければ舟こぞりてなきにけり

かくいへれば昔は武蔵下総の国境に流るゝ川也されば今此川にわたせる橋を両国橋といへるも境の川なればなり今は隅田川の東葛西郡も武蔵の地となりて上野国よりいづるながれ落る利根川をかぎりて武蔵下総の境とはなれり八かみてされ謠書せられしも隅田川とぞつてせられん全同来ん隅田川の岸のほとりに梅若の塚並の柳鏡の池木母寺あり

あり猿が迹のかたりを浅茅が原といへり梅若丸の事蹟未詳
謡曲あるひは戯場文の狂言綺語に作り出して其名高くかたり
傳ふるといへども其正しき説は拙ひさくい未審或人の曰梅若は
人皇六十二代村上天皇の御宇吉田少将維房朝臣といひし人の
公達なりけり少将維房和漢の群書うかゞひ深く通じ詩哥
管絃にまで妙なり妻女はいへども子なく其妾柳の局
が腹に一男子あり松若と名づく維房の妻若葉の前嫉妬深く
柳の方の寵せらるゝを猜みて其子松若が世嗣とならんことを
恨みいふに足じて失はむやと毒蛇心に謀計をたくむ折に
少将は帝の勅命によりて陸奥國の任にまかるとて下向せ
らるゝ其ほど近江なる野の里に宿りしが此所の長者花子と云
へるにちぎりをこめ一人の男子を出生せり是を梅若と呼
若葉の方心中にはいよいよ憎み猜むといへども更に色には
出さずして結ぶ花子梅若の母子を悪しと柳の局をとゞめ
松若が失ひ梅若に世を嗣せやらずと歎きけれども柳の
局を花子の方を中も知れまじうにて悪心の刃をとぐる若葉
の前此ありさまをきいて心彌びまして花子母子に悪計を
進め松若丸を失はんと郷區なれり柳の局かくては我子が

信夫の藤太
梅若丸を
擲

ざる嗟呼の者にかゝるが東国へくだりしとく霊国にの山深くて梅若
丸の迷ひ労も体ひ給ふに出あひゐるが天の涌と心に歎びへりしに
御少年竹園よりかゝく何ともく夜深きふけゐ中に也恥しゐる
ぞと詞をやゝらげ力強くれば若君も恥しく我父君の陸奥より
也恥しまんと親へと此事まで迷ひ出たりけれ乳母の涙
まで右に侍て給りれけりしと嘆く給へば哀を称心歎び奉るが我
我も陸奥へくだるもの奥しまいらせんといさなひてあゆ旦ま
の方へ急ぎゐる行て三月十五日といふに武蔵国隅田川なる
若くりくり梅若丸は嬉しうもゐね旅の長途の行労に
今は一足も歩行ものもならず草まくらに倒し脳ひ給ひなれば
き存者大きに怒りて己れの生はれさえうる玄甲斐ゐた身まて
ならば陸奥の遠き国へゆるべしくはあらねばゐなりそと都か
此所まで我にいてなく労とらけしぞや海が歩にとく我に問ひ
ゐ家に止らん此後の懲しめにまとわすとよく杖打けるに
まうくしと折るるは無慙ともなるらくゐんとうそうなき
梅若丸好りの涙を流しや母上と乳母の名としておね夜のまる
る我を杖にまく折ゐるこそ喜もしくにりとせしと腰かねき
給へと哀吉起ゐ問てわりれ在乏脇なりる玉重でお殺しても之ん

菟子乃方
隅田川に
吟ひ来る

よゝと再び杖追取て丁々とつゞけさまに二三十打ければ無間焦
熱黒縄の呵嘖もかくやと痛ましければ川を隔て里の人々あれはと
何者なるもせよ捕へなきものと見殺しにはしとて小舟にさを
さし漕渡りしが義吉見て若君が側に結ひをとき見んとし
て逃さりたり里人共ちに舟を漕よせ岸によりて梅若が
さまぐに労はりしもちやてきれてせんかたなく哀さに限り
なうされば深なげきに死骸を川岸の堤に一本の柳を志るしに植
給ひてねんごろに弔ひけるそも彼の花子は梅若丸に別れしより
悲しさのあまりの火焔を焦し今は心もそゞろに物ぐるはしく
都の方を吟ひ出浅草川狂ひたる隅田川の川岸につきて
てありしが一本の柳の下に里人集り僧を請じ念仏の回向
なしけるを此狂人乱れ心にも見咎めていかなる人の手向ぞや
我も東に拘りし子の行く末の事を問んとて寄にかくれ来れば里人
是しるもあはれなりける御弔ひや何とさかくと退居せし里人
の中に粟津吉郎首藤といふ若者物狂ひのありさまを見るに若や
死たる少年の所縁の人にはあらざるやと人窺藤吉が杖の下に命
を落し此所に葬りし始末り終りを物語ればこの物狂ひは是を聞
桐掛るなやの父の名は何といふぞやと首藤にてされが右衛門の其際に

父ハ吉田のかね我ハ梅若丸よろく縁にたよりなく如何うち入
物狂ひが影うつして其ハ梅若ハそれよ是ハ夢かや淺ましや中々夫
地に其ハ形を投すり彦乃かどうり泣ゝハ哀もありし次郎之学師の
僧花をさいちて汝たゞ人両眼を泣涙し涙乃血ましてけ水の草
ハ深うしも幽魂得脱の種とハ有べし歎きをとゞめ真実に念佛
回向せんこそ誠に母の恩なるべしと勧め給へバ此理に発起してみどりの
髪をきらひ初名の亀壽と号しを改て妙亀貞壽尼と号し隅田
の川岸淺芽原にかたちなる菴を結び口称三昧の行者となり
厭穢欣浄のおもひより外更に他なくかへりし武州妙亀尼世女の戸
を開き庵の外面なる池水に我影乃憔悴なる姿に心じ見てそろ
うろ世の動静の流て子く穢土の迷倒を離れ浄土の快楽を
受んかかぎりなき本尊なりと辞世の歌二首を短冊に書て
池の邊りの松が枝に結び終に此池へ身を沈め永く此世を去り
にけり其歌に

妻琴の調ともさゝへ此世なり迎の雲をまつ門の下法
淺芽生にたゞく白露のあさくも消るべきうハ人の世の中

里人其志しとかなしみて其所に塚を築き一箇の廟堂を営
立くたれを妙亀堂と呼び尼の姿を写せし池を鏡が池と

称乃とうや

天川山明福寺 浄土宗 浅草より三里 下蒲田にあり

当寺ハ高祖聖人御帰洛の砌頻に道俗の請しきりなる故
暫く此所にて御教化ありし芳跡也とぞ

○本堂本尊阿弥陀仏 ○親鸞上人御真像 御自作別堂に安置 ○聖徳皇御木像 聖人御自作之 別堂に安置

江戸を出て下総に趣る街道ハ千住草加越谷粕谷杉戸幸手栗橋と十六七里武蔵の地なり此所に武蔵と下総の境利根川の大流あり俗此川を坂東太郎とよぶ是より下総の中田にいたるこの二十町余順路は街道より東の方坂東太郎の川下に添て下総乃市川にいたり関宿乃城下に趣るなり委ハ下総の部に著し記す

○是より以下西光院善福寺等乃旧跡ハ順路の帰洛にて再び江府に入て参詣すべき寺院なれど国分乃例に随ひ此所に縁起を記し順路乃節にいたりては寺号と結構のみを記す初巻山州

明福寺（めうふくじ）

表門

山科及び東近江大津近松寺等の例のごとし

# 西光院

真言宗　武蔵国二郷半の内　本貫河戸村にあり

当寺の境内に別堂ありおむく堂と名く高祖聖人の真像を安置せり毎月廿八日毎に開帳し香花燈明を備へ念仏し諸宗ともに群集し殊に祈願を込る時は諸病を平癒し霊験寔に新なりとて諸人の信仰深かりし○傳曰当初当国の桜田といへる所に親鸞聖人の真弟西念坊一宇を建立給ひて聖人御自作の寿像并西念坊の本像を安置せり是を長明寺と号するに第三世西祐房の代建武の乱に寺を焼却せらるゝ時西祐の伯父西光院に住しける二遍の本像を西光院へ持来り寺邊の深田に埋隠せり年を越て世の中静謐に治りし時聖人の本像を埋置し田地のむくむくと

おむくの畫像

吉川宿
木うり村

西光院
さいくわうゐん
古川の流
西光院

鋤かきくるふに住侶心驚き其地を掘てみれバ二躰の木像
霊然と現じ出給ふ然に奇異の尊像地中よりいでく
と現れ出給ふなりけれバとて俗間へこれをおもむくの像と称し
奉る其後縁因長命寺第廿世了順房信州より来て此
二躯の像を乞求むといへども聖人の像ハ霊験なりとて
ほしくて諸人の信仰深きが故膽して是を返し与へバ
当寺にとゞめたてまつり西念坊の像のミを長命寺へ
移しけりとぞきこへし

○蛇塚の池といふハ四ツ谷といふ中埜村宝福寺といふ浄土宗の
寺内にあり江戸の市中に流るゝ水道の水上ハ此池より流れ出る
といへり池のめぐりハ楊柳繁茂して生ひて池のほとりの色ふかく
いかなる旱魃にも此池ハかわくことなしとぞや寛永の比草莽の
ま此池の辺りにて午睡せしに池の中に涌より水面へ其ハ長三
丈ばかりの蟒蛇あらハれ出此草刈童を呑んとす草刈波の音に驚きて

○當御堂の粧麗巍々として東国に冠たり京師本山より官僧を撰び当坊の輪番たらしめ関東の末流を提轄してことごとく門徒の輩をして宗法を守らしむ御門跡参府あらせ給ふ時は当坊に入らせられ御門下の僧徒は申すに及ばず江府の貴賤隣国近村の老少男女日々に群参し恐敬渇仰の感涙に袂を絞りぬ御門跡東叡山増上寺等の御仏参に出給ふ後乃行粧巍々として諸人目を驚し御通行の道筋は門徒の僧俗肩を摩袂をつらね跪拝礼の式実に殊勝し殆開山聖人御在世に減ずることなし諸侯方の供も車馬門前に群連して市をなせり且御坊の御修造なし給ふ其ありさまの厳なる言にも語なし

当山坊舎の内に長命寺といへるあり即ち高祖聖人御弟子了源法師の開基といふ

○三縁山増上寺は芝に在る浄土宗にして人皇百一代後小松院の御

築地(つきぢ)西乃(にし)御坊(ごばう)

其二
対面所
宝蔵
玄関
墓所門
中門

本堂
臺所
茶所

御門主御通行の図

其二

草創開基ハ西誉上人関東十八ケ寺檀林の惣本寺之承くも
御廟を鎮めあり諸侯大夫の参詣市のごとし七堂をならべて堂宇を構へ金銀
を鏤め荘厳ハ寺中坊舎三十余ケ寺所化の寮数百間天下無双の
霊場なり

## 亀子山善福寺

西流 浄家 江戸麻布にあり

亀子山善福寺ハ関東七霊場の随一にして聖人真弟子六
老僧の第六ハ了海碩徳の遺跡之本堂本尊阿弥陀如来
恵心僧都の御作之 開基堂了海上人の像を安置 坊舎十三區広庭に大なる銀杏樹
あり当院の境内広大なりしく殊さら繁花第一の地なりまた
ご豪家なる商数百軒甍を並べ連りて此辺をすべて当寺
の領地なりといへり○又当山の開祖了海上人といへる
其俗姓ハ元なりし鳥羽院の苗裔左大臣信実公の息男
なり信実公東海に放たれ民間に下りて武蔵の幽邃に

ありて年を経れども一子なきゆゑを憂て蔵王権現に祈誓
一七日の丹誠を抽どるに其妻室夢に白布を呑むと
看て即ち懐孕せり遂に延慶元年六月十八日
一男子を産り名けて松若と称せり七歳の時夢の告に
よりて実相寺範賢律師の許に至りて出家なさしむ
を教ふ範賢此児を教示修学せしめて名を了海と
喚べり此了海博識多才にして三密瑜伽の行法
に通達せり又叡山に登り静栄僧都を師として教圜
融の理を究め中道実相の観に明かなり其後故郷に
帰て父母の年齢ようやく衰へて了海に値ふを
よろこび家にとどまらしめんとしけれども了海
弘興の基趾をもとめんがために蔵王権現の社祠に

麻生(あざぶ)善福寺(ぜんぷくじ)
表門

本堂
墓所
太子堂
興基堂
茶所

了海碩徳蔵王権現乃感ありて善福ちを基立に

詣しくこれを祈るに不思議や天より白幡降下り木の梢に掛まり了海其ところに至り見るに一宇の古院あり 今の岩窟寺是なり 于時一人の老翁忽然と顕れ来告て曰く如何了海汝を待つ事久しく此精舎ハ弘法大師開闢なる所にして真言密乗の勝區之今幸に住持たる者なし爾此院に止り有縁の法を求めて末代弘度せよ必濁世済度の知識に値ふ事なからん夫れ是牟尼の変化蔵王菩薩なりとて立去給ひぬ了海大に悦び即此寺に住職し朝夕説法怠る事なかりけるが蔵王菩薩の御示し末代の要法を弘通すべき知識ハ何人にやあらんと思ひ暮ひ日を送りけるが爰に高祖聖人の教化都鄙に普く濁世末代の善知識なる事を聞て扨此聖人に謁

し弘法の模を試んと既に聖人に謁しまり即高祖聖人に向ひ三密加持ハ即止観の法とみて問難ものに聖人答へ給ふらり響の声に應ものごとし漸深理の説に及で曰く倫がいふ所は迷に高しと心蓮心月一念三千高きされあるなれども濁世末代の衆生これを行ものゝ絶て無戒無道の僧俗是を観ものの機みるの也し志ろふ今弥陀超世の本願他力念佛の真宗ハ末世相應の要法にして凡夫直入乃真教之是則釈迦出世の本懐弥陀弘願の密意なれバ汝よく思惟せよと厳に説せ給ひぬれバ了海忽ち一念発起し即聖人を釈しまりぬ重偈仰なし師弟と給して日夜聞法の益を蒙り信心既に納せしめ申しさゝきされバ了海身を終るまで此霊場（善福寺也）ふかく真宗を弘

法をうる身となし○佛光寺実録に曰了海上人ハ元應二年庚申正月廿八日八十二歳にて寂ス武蔵國阿佐布善福寺と号ス延應元年誕生二十ニ歳の時祖師圓寂云

○高祖滅後十六年弘安元年ニ十歳の時良真正寺に入第ニ世の寺務となり永仁元年親念誓海に寺務を譲武州麻布に下向此時に十八歳元應二年の春正月化縁の薪つきて廿八日即生後念の素懐を遂給ひけり以上大谷遺跡録に見えたり○了海自作の像を開基堂に安置ス毎年十一月三日に剃髪ニ此像を入湯として洗ひ再び本座に居へ弥陀經を讀誦し参詣の諸人に赤飯濁酒を与へ廣庭にて相撲をとらしむ是了海上人の遺言也と云○都て麻布七郷の町民ハ此了海堂を修補し此非のごとく信厥をなり当時末寺に縁日経馬有ど擁まつり

○享保の記ニは高祖聖人當國弘化の之ニ當寺ヲ

善福寺角力の図

入給ふ了海坊聖人に随侍して御弟子となり聖人に了海の杖を得て寝にとどまり弘法に帰せ給ひ御杖の本を地にさし給ひけるに逆に生じ枝葉四方に布茂て老木となり今に存在す（此杖銀杏の樹なり）了海永仁二甲午中冬上旬第六日寂せりと（建仁元年辛酉林鐘十六日出生ス）筆記せり遺跡録に是を正して享保記誤也しるく佛光寺の記録を以て證となせり私にいはく当院寺説のごとく開基堂の広庭に銀杏樹あり是聖人の挿し給ふ御杖の生じたるなり世に騒しく人こぞりて是を称讃す然るに享保記によるごとく聖人此院に入御し給へるは謾ち臆説とも云べかれども了海上人の年齢入寂の年暦佛光寺の記録と大に異なりいづれか是なるとせん後学これを糺せ　○什宝聖徳皇の御本像御自作

程が谷の驛あり此郷ハ武藏相模國の境なり鎌倉鶴が岡八幡宮へ
詣でぬる者も右の方にあり

○目黒の不動堂ハ荏原郡目黒村にある當寺不動の尊像ハ往昔
慈覺大師比叡山に詣んとてくだるべく東國を巡て此目黒村に宿り
給ひしに傳教大師の靈夢を蒙りみづから不動明王の尊像を彫
刻し此所に安置給ふ今も靈驗あらたなれバ諸人渇仰歸依する
ところなりし

## 名所

○調布の玉川ハ六玉川の一ツ又池上の水より流出六郷へ落る川なり
「玉川にさらす調布さらさらにむかしの人の戀しきやなぞ
所謂六ツの玉川ハ近江に萩の玉川武藏に調布 陸奥に千鳥 山城に
山吹 紀伊に高野の玉川 津國に卯の花の玉川なり

○武藏野ハかぎりなき廣き野にて荏原郡 豐嶋郡 多摩郡
新倉郡など凡て此一ツの武藏野之されバ古歌にもよみてしるく
廣き心をよめる
「むさし野ハ月の入べき峯もなし尾花が末にかかる白雲
「行末ハ空もひとつのむさし野に草の原より出る月かげ
かく廣き野なるまでありしが今ハむかしに引かへて

魏々たる都のありさまハたとへバ北辰乃其所に居て衆星宮に集るごとく吾妻綺羅紫の聚まるもいつらひ群集る秦の長安漢乃咸陽とくらへても江城乃繁花ハいかでか及ぶべきされバ武蔵野く原ハ名のミ残りて其所ハなし今世の人のむさし野と称する所ハ江城より西の方府中に近き傍の原を武蔵野といへども昔への武蔵野く広さハかり残りたるハそ古歌によめる萱もひとつ野といふむさしの名はあれど

○逃水ハむさしの国の名所なりむさし野の原に来てこれが遙のあなたに水乃流るゝありと見ゆ此流れを知てたどりゆけどもさき原うちつゞきけて流れが知れど此川名もともに尋ねて行て終に流れをとむる者なし此故に是を逃水とは呼なりけり信濃国伏屋の帚木と其さま相似たり

へ東路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過る哉

○みよしのゝ里 伊勢物語に 住ける所をなん入間の郡みよし野の里といひける

へみよしのゝたのむの鴈もひたぶるに君が方にぞよると鳴なる

○[illegible]代将軍に勧請ありし八幡宮ハ昔日御自彫し給へる像なり左臣入道道灌が守なる也寛永年中新たなる霊瑞ましくて長禄法印圓基とし此所へ御社建立ありし也左右の社壇にハ伊勢春日の御神を

を祠ひ奉る
○若宮八幡は葛西にあり文治五年の秋頼朝公奥州泰衡退治
の為進発し給ふ時此社前にて馬より下り朝敵退伐の祈
願をこめ給ふに果して泰衡等誅に伏し御帰陣の後造営な
し御社なり
○氷川大明神の社は足立郡大宮に在て武蔵国一ノ宮にして祭神は
素戔嗚尊なり日本武尊東夷征伐の御時勧請ありし御神は素戔嗚の
命出雲国氷の川上（氷の川上ハ簸の川上とも）にまし／＼て八岐の大蛇を斬天叢雲の宝剣
を得給ひし故に是を称して氷川大明神と崇め奉る
○鷲宮大明神は太田の庄にあり神社考に曰く建久四年武蔵国
太田の庄鷲宮の宝前に鮮血流る卜筮をして占はしむるに国家の
兵革の兆あるべき瑞なりとて依て右大将頼朝榛谷四郎重朝に命
し神馬を捧げ社壇を荘厳せしめらると云
○鈴の社は品川にあり此森に鈴石といへる長さ大なる石あり揺動せば
石中に鈴の音あり故に奇石と称べし
○矢口の渡は荏原郡にあり昔畠山道誓謀計されて新田義貞を
沈めたる川の渡しなり此川岸に義貞の墳墓并に新田大明
神の社あり

# 二十四輩順拝圖會後編巻之壹畢

○野中乃井ハ谷中三崎の邊りにあり寛永乃ころや吉原乃
郭内に柏木といへる遊女あり其連し男を先立てゝ情の念ふに
みづから尼となりゐる菴を結び三年計経るがつくづくと世を去
なり里人其心ざしを哀れミ所乃卒都婆に一首の歌を書て立より
是野中乃井の名ありとぞ
〽かひぞなき野中の水のあはれさハきえて流るゝ妹が袖

○高雄の紅葉と称するハ都に名高き高雄の寺より紅葉を植
すは倣ひて吉原角町の頃から京三浦四郎右衛門が女
郎なりし高尾と云へるハ名高き遊女あり手うつくしく能
詠て優にやさしき紅葉の心しが家まかりて紫村の正覚院といへる
寺に其骸を葬りたる高尾を知れる人くこれが為にめでゝ卒の一本の
紅葉を植しが枝葉栄へ秋の末つかたハ色こき紅の錦を織
出るに似て今も浮世乃人乃あはれしミを受ねるに遊君の
なりんかし

二十四輩順拜圖會
後篇
下總　常陸二

目録

○下総之部

法満寺　霞の浦
勝倉浦

○常陸之部

西木山光明寺
佛名山常福寺
帰命山如来寺
大蛇解脱
笠間光照寺

小島山三月寺
筑波山大御堂
大師派名号
馬櫛大師
板敷山

三月寺乃旧地
一山の奥院
遊歓の遺蹟
大覚寺正信房
稲田山西念寺

以上

# 親鸞聖人御舊蹟二十四輩巡拜圖會後編巻之二

河州専敬寺　了貞撰



## 下総國

古来総州ハ下総の國の名なり是信じがたし今按るに古語拾遺に天富命更に求沃壌分阿波斎部率往東土播殖麻穀好麻所生故謂之総國穀木所生故謂之結城郡云　天富命とハ麻績連祢阿波の斎部天日鷲命の孫にて神武帝の御時東國に麻と木綿と殖しめ給ひしに好麻のはゆる所を総の國といひ木綿のよき所を結城といふ総ハ麻といふ古語なり一國なりしを後に上下にわかる又穀とハ木綿の事なり結城郡ハ今も當國にあり

### 中戸山常敬寺　西派

下総國葛飾郡河邊の荘關宿
領野方深栖郷中戸村にあり

西光院と稱せり關東七箇寺の一にて高祖聖人の御孫唯善上人の遺跡なり

唯善上人ハ高祖の御息女彌女の御方法號覺信尼公の御息男にて聖人の御直孫なり

御影堂十間親鸞聖人御眞像ハ唯善上人の御作

或ハ當山第四世善榮の作とも云

阿彌陀堂の本尊ハ定朝の作なり

當山にかぎりて御影堂阿彌陀堂共に縁いまだ由緒あるよしにこそ

什寶にハ法然上人選擇相傳の御影を藏む

法然上人御自画讃あり
祖聖人御添書あり

當山の開基を尋ぬれバ往時延慶二年の春唯善上人相州より下

中戸山
常敬寺
鐘楼
門

本堂
阿弥陀堂
玄関
墓所

向し化益ありせ給ふに将軍惟康親王帰依し給ひ此地に七堂伽藍を建立して上人に寄附せらる花園天皇に於て中戸山西光院の勅号を賜ふ而より代々法燈を伝へて相續しなるに第十世了照の時に至て兵火の為に焼失し又天正年間豊臣秀吉公北條氏政を征し給ふ役なり此時故ありて当山と二箇寺に分ち一は越後國高田に移りて両寺ともに中戸山常敬寺と稱す

一谷山妙安寺　東派　同國猿島郡三村にあり

高祖聖人の御弟二十四輩第六一の谷成然御坊の遺跡也（成然坊の傳記当山開基の始末審に茲編上野國厩橋妙安寺の傳記に載を為に此に記さず三村厩橋の両妙安寺何れも本末の論あり）中古故ありて後轉といへども法燈を絶ざるのみ成然坊をはじめ当國一の谷といふ所に一宇を建後に聖人と相議て堂跡を変に従ふ故に聖人

手ぞうし植継へる松の樹とく近き比まで尚存せり是を守子の松と稱せり○靈宝ハ本尊阿弥陀佛の像行基の作（或ハ安阿弥の作ともいふ）同画像ハ恵心僧都の筆聖徳太子の像ハ雖有も宗祖同山聖人の御作なり其外蓮如上人御筆の六字名号實如證如両上人御筆の御文等あり

一之谷妙安寺　东派（三村と中戸との中間一のやとあり）

即成然房住居の地なり当寺ハ成然房最初建立の所寺内に成然御坊の墓あり（境内寺領として二石將軍家寄附せらる）

屈旋山阿弥陀寺　东派（同國同郡長洲にあり）

当寺ハ親鸞聖人の門弟安了房の遺跡なりいにしへハ三論宗にて屈旋龍山稱名院と号し慧鎮法師の草建八世相續し澄慧の時にいたりて天台となり第十代世安了の時貞應二年高祖聖人

一ノ谷妙安寺
市のや
墓所

一谷山妙安寺
一之谷妙安寺
三村妙安寺
拝堂

# 長洲阿弥陀寺

長洲といへるは方言にして大なる沢也津樹両岸に鬱々として漁舟遠近に浮ひ頗る眺望の佳景あり

国に曰吾邦水の渟溜してながれざる所をすべて沢

岩井町

本堂

極楽山西念寺
ごくらくさんさいねんじ
本堂
臺所
太子堂
木像
寺中

横曾根（よこそね）
圓光寺（ゑんくわうじ）
木像
本堂
山門

当寺へ入御しに聞法随喜して御弟子となり今に至りて真宗の仏閣とはなりたり○本尊画像は恵心の筆六字の名号は高祖聖人の御筆なり○本堂の背面樹林の中に聖人草庵の旧跡及び井あり

## 極楽山西念寺 東派

同国同郡稲田村にあり

聴衆院と称す本堂九間に面せる阿弥陀如来は運慶の作なる太子堂には湛慶作の聖徳太子の尊像を安置す。僧坊二区あり

宗祖聖人の御弟子二十四輩第七野田西念御坊の芳跡なり

当寺はそのかみ上宮太子北来幸し給へる旧跡なれば聖徳寺と号して天台宗の霊場なりしが高祖聖人当国弘化の時当院の寺務真證法師聖人に帰依し奉り御弟子となり終に浄土真宗の仏閣とはなりたり

遺跡録に云稲田の西念此に来りて化導し給ひしより真宗の仏閣となれり其後三世の寺務真証房元慶三年此寺を再建せり然に此寺の記録に云元慶三年聖徳寺大勧進真証稲寅門山へ出と云るせり洪鐘の銘にも元慶三年酉と記せり延宝年中寺号を西念寺と改むとなり○西念房の事第編信

州長命寺の下にて委しく記す信濃の長命寺ハ西流二十四輩第七の列也當寺ハ東流二十四輩第七ニ屬せり 什宝ハ聖人真筆の連座の御影を安置ス又西念房の本像を安ス 真筆の像なりとも云

横曽根聞光寺 東流 坊舎二區 同國岡田郡豊田庄横曽根報恩寺村にあり

開基ハ性信上人建保二年當山を建立す御影堂九間四面本尊阿弥陀佛ハ春日の作なり又列祖堂ニは阿弥陀佛の座像上宮太子の像性信上人の像證智の像を奉安せり抑當山ハ古へ高龍山報恩寺と号し性信上人教導の霊場なり即江戸淺草の報恩寺の舊地にして兼帯の寺なり 縁起ハ委しく江戸報恩寺の下に記せり 什宝ニは親鸞聖人御真蹟石刻六字名号上宮太子の古像ハ御自作なり又性信上人自作の真像あり 飯沼天神の社より例年鯉魚を供ずるハ即此像也 其外俵藥師の石像ハ弘法大師の作證智比丘自作の像等を安置ス 此山ハ古へより聞光寺これを領せり 境内の外に不動山といへる山あり毘首羯磨が作の不動尊を奉安せり

○吉郎兵衛が宅円光寺より願牛寺へ至る畷路絹川のほとり屋敷といふ所にあり聖人自ら作らせ給ふ木の弥陀の木像を伝来せり代々大房宗弘寺の門徒なりとぞ

○相馬の内裡跡は右屋敷より西北猿島郡岩井といふ所なりとぞ

○醜婦かさねが塚は絹川のほとり岡田郡羽生村にあり則此絹川といふ流にて夫与右衛門がために命を落せしと云

## 大生天神　真言宗　同郡飯沼にあり　別当大生寺

天満宮性信上人に帰依し給ふ事江戸浅草報恩寺の下りに委しく記せり　天満宮本地は十一面観世音菩薩　○祠の前に龍燈の松あり又天満宮出現し給ひ性信上人を拝し給ひし礼拝松は華表の前にあり殊更仏法の威力神徳の炳焉なる感ずべき事此飯沼の池なり報恩寺の下に記るごとく例年正月此池中に鯉魚を漁て性信上人の御像に供ふる事一年も闕ることなし然るに近き享保の頃とかや此池の北方に七口の江を掘て池水

花嶋
吉郎左衛
の宅
居宅

堺の
大寺
天神宮（てんじんぐう）

阿弥陀

を分ち落し耕作のたよりとなれば飯沼の水日毎月毎に干潟となりて今は僅なる細江の社の下に流るゝを御手洗水とは号せりされど尚も流れに網を打せば忽二尾の鯉魚を獲て年毎の供物今に絶ることなしとぞや誠に世は滄桑に及ぶといへども有難かりしためしなり

## 雁島之由来

むかし高祖聖人此所に幽栖としめ給ひ出俗を化益し給ひしおりしも秋の最中隈なき月を詠んとおもはくの御弟子と倶に小舟に棹さし飯沼の池水に浮び出給ひしに實に今宵一輪とてり清香いづこの處よりかゝると詠ぜし詩のさまもかくやなんといと興ふかく見へさせ給ふに聖人の御側に若性房乃扣望しゐ給ふ向ひて宣ふれこの明月に

池上に嘯くぞ四面の平湖月山に満とも謂つべし唯をしむらくは池中に小嶋のひとつあらバ殊に風色を増ぬべきにと仰らるゝに善性房まで承りてさこそさふらへといらへして其夜は帰りぬかくて十六夜の月もゆふべよりもいやましにうるはしく照りそふにぞいざや今宵も月見んとて再び池上に至りぬ然れバ不思議なるかな夜べまで漭沆たりし廣沼の中に忽一ツの小嶋の涌出て是なん蓬萊瀛洲の霊島ならんかしと御弟子の驚奇異の思ひ浅からざりける淺邊周防といへる者あり此嶋の涌出する彼風情てこれ聖人の高徳の天地の間に充るにこそと家に飼置たる雁のなる一雙を携へて聖人に捧げまつり霊島涌出の奇瑞をかえしぬ時に聖人かの一番ひ雁を涌出する嶋に放ち

雁渚之図

西域記にみえ
たる雁塔は渠が
徳を旌せらる
聖人の鴻業
宗流の海内に
ひろごれるは彼
漢王が一挙
千里とよろこ
翔きの跡に
至らん

ぎり給ひ且誓して曰く我報る宗法末世に盛んならん
には年毎の往来に此に来りといへし給んでこゝに安え給ふ
然や聖人の妙智人に及せば邪人と化し禽獣に及せば
其命に隨ふ六百余歳の春秋を経れども今に至て来り
雁も帰る雁も此浮嶋のうへに宿るなりけりれば一向なうり
雁の立去に隨ひ鴻も又水底に沈めり奇なりといふも愚之
昔往唐土盧山に住る僧に慧といふ大徳あり常に鶴を飼
て愛しけるに慧死して後其忌日毎には彼鶴泥来りて
羽を敷嘴を叩き終日塚の前に泣けるといへり高徳
のいさかしこそなれされども彼は一旦の恩を感して忌日を
弔ふといへども僅に鶴の一生のことなり是れ大悲功業の妙智より
なせる所なれば幾万秋の末にいたるとも更にいふべきにあらず

かゝれば佛智方便の洪大なる仰ぐべし尊ぶべし

或人雁嶋の説を疑ふて此地の古人に逢て問て云く雁嶋の浮沈するはさのみかはれる事にもあらず水深き所は沈みて見へず秋の頃水涸て浅き所より嶋の頭あらはれてまのあたり見ゆるなるべし是を雁嶋の浮沈といふぞかくある増減とる故なるべしと云に古人のいはく是にあらば此嶋全く論際より生し嶋にあらば旅に出てみるべきいはれなし秋の頃はじめて雁のわたる頃浮萍のごとく浮み出て見ゆるに既て十四五斗にひろがりぬ又凡そ十余年の嶋といふなる藁こそ元来古きだのござとば船を繋ぎて人の登る事の罰てなきものには雁の宿るだけのたえずありしかども浮草のあつまりし所は嶋すて雁の立し後は間とゞく消ゆる跡なくなるなりむかしは水とよるべくもへだてゝ近き頃はいとゞひきくなりて大方水面と一つの如くなりぬされども宿まる雁の浮しまありとはありしと語りぬ

## 太高山

飯沼のほとりにひとつある山なり石下
大房村舎捨村などいひけるなり

此山は大房村東弘寺の旧地にて高祖聖人の手づから植置

故に柳の老樹今に残れり依て東弘寺を高柳山と號す

大高山願牛寺　西派　同國倉持村にあり

當寺の縁起に曰く宗祖親鸞聖人建暦二年の春越後國より信濃に至り尚ゆきて関の東に化導し給ひしとく下総國に来り給ひ先づ當國岡田の郡主稲葉伊豫守勝重しと云へる者蓮位房の從弟にてありしが聖人を請じ来らせ懇にいたハりまゐらするが宿善の然らしむる所や一度聖人の教化を蒙り信心决得して御弟子となる是を一心房と名け給ふ此一心房専ら念佛弘通のため宗に一字を造立せんことを願ふ聖人其志を歓び給ひ遂に坊舎を營し給ふ又一の牛ありて此寺の造立をたすけ或ハ巨材を運び或ハ大石[illegible]ひ人力を助けけるが既に其用度調ふ頃聖人

彼牛の不在いふよし見給ふに傍なる沼に飛入て忽ち一株の枯木とぞ化しけりける（此枯木今尚ねせりうつれ舟のごとく長さ二間許りもあるといふ跡あり聖人雁鴻御叡覧の折からこれに名をつけ給ひしといふ近年大坂江の小路の住何某なる人去る堂を寄附しそれに押さむ石に㊎の印あり御舟石といへ）其さま尤なりし牛みまくの見へしかバ聖人奇異の思ひをなし給ひ寺院落成の日に及んて扨こそ願牛寺とは号け給ふかくて彼寺ハ一心房へ附属し給ひ常州稲田へ移り給ふ（旧跡猶はりし此地ハ仁治元年の比性信房の後新たに龍宮寺を造立ありしが中比退転に及びしに元文年中にありや一宇を再建して是を大る山称牛寺と号けるのへり未いづれの是なるかを不知）

高柳山东弘寺　東流　旧国大房村にあり

当寺ハ高祖聖人の御弟子二十四輩の第九飯沼善性御房の草創なり善性ハじめ周観と申せし折未聖人に値遇し給ひて当国に到御しける折から当国の大守是田氏即親治の請に應じ城中に遍留なるが高祖聖人の興法利生れ偏きを

大高山願牛寺

雁島

牛木

かんしま
枯木舟谷

霊牛沼に投る図
天にありては星
紀を統し
地にありては坤徳

を表せり
牛は霊なる
ものかくの
ごとし況や
吾邦にて
より渠が
力をかりて
伽藍を助け
かれの功その
霊跡を除くの
外尚多し清涼寺これ
華鬘をかけ関寺には
佛に比し天王寺にも
神の跡の類よく佛國に
かく人もなばなりしさもそ
西天にては舎人を安とするに
必ず牛壇を
築くとかや

をたて給ふ即常州稲田に詣で聖人に謁し聞法随喜して弟
となり竟に真宗の門に帰入し給ふ此によつて聖人法名を善
性と授け給ひ（善性御房の事委しくハ前篇 越後高田浄興寺の条下ニ出）亦かの太守親治なる者も
周観房を招請せし佛因によりて辱くも高祖聖人を倉
猪村なる山に屈請し奉り専修念佛の行者となりて
良信と法号賜はり善性房（初名周観）と倶に無二の御弟子と
なりにけり（時に貞應元年なり）此良信房が先祖を問ふに桓武天皇
十八世の孫にして代々豊田の城主三十三小屋の司にて
世に聞へたる武勇の武士なりきされば此時既に高祖聖人此
大高山において化導し給ひしより周観房善性上人御旧
跡の後に退隠せんとするを請て即一宇の佛場を建立し真宗
の東方に弘通するの意を以て東弘寺と号けらる實に貞永

元年高祖御帰洛ましませしより稲田山浄興寺を善性上人に寄与し給ふが故に善性上人ハまた此の東弘寺を以て良信房に附属せられしより良信房当寺の二世に住して善性御房の寿像を彫刻し敬恭崇信して専ら遺法を弘通ありしが竟に正慶二年七月廿五日法臘一百三歳にして当山に於ひて大往生を遂給へり其後年を経て寺を此地に移すといふ 宝永の記享保の記ともに善性房ハ豊田治親乃法名にして建保二年大高山ニ聖人を屈請して御弟子となり当所に随逃せりと記せしかども今遺跡録ニ従てこれをとらん

○霊宝ハ 弥陀仏の画像 聖人御筆 金泥十字名号 同御筆 聖徳太子真影 同御筆左右に随ひ六人を列ね御絵あり 六字名号 蓮如上人乃御筆 仏舎利 三粒 御珠数 聖人天台の時 善性上人寿像 二世良信の作 七難毛 長さ七尺あまり又名ふて寿毫 像ハましませし時の御不思議なりしを善性上人へ御譲り給ひし也 此の御不思議あり一度是を見れバ七難を消すといふ 天地闇乃時雨降し粉二粒あるこれハ信州戸隠山江州竹生嶋とも同じ

新堤山弘徳寺 東派 同国岡田郡豊田の庄新地村にあり

本堂
臺所

高柳山
東弘寺

新堤山（しんていさん）
弘徳寺（こうとくじ）
本堂

宗智院と号く高祖聖人の門侶二十四輩第五信楽御房の遺跡なり寺家二坊あり

信楽房の俗姓を尋るに平氏にして桓武天皇の後裔相馬為門の末孫相馬次郎師常（東鑑に曰元久二年十一月十五日相馬次郎師常卒年六十六令端坐合掌不動揺決定往生被其銘是念佛行者也稱之結縁緇素挙集拝之）の子相馬小次郎義清と云し武士なり高祖聖人面授口訣の真弟にて即此地に一宇を造立し法膳と号さるなるに覚如上人東国経回し給ふ砌しも信楽房未存在なりしかば上人即これにのらせ給ひ親しく法義を論談ありし給ふ其後第八世蓮如上人も又当坊に寄宿ならせ給ひしいとも著き霊場なり○什宝に阿弥陀如来画像（高祖聖人御真筆）御和讃（浄土高僧正像末）三帖（同御真筆御禮裏と名づく当寺中古堂上の時宝物多く焼失せしに此御和讃もとり火中にありしがふしぎなるかな少し紙損ぜずして紙のまゝ焼れ今なり周囲に焼痕あり）

新居山
稱名寺

御影堂

## 新居山稱名寺　西派　日國結城郡結城の城下にあり

當寺ハ関東七箇の大寺の随一にして六老僧乃其一之二十四輩第二聖人の御直弟真佛御房の開基草創の舊跡也　真佛御房の事跡ハ委しくハ下野國高田専修寺の条に出ス　○本堂本尊阿彌陀如来　御長三尺余春日乃作　太子堂　聖徳太子の御自作乃太子像御長二尺九寸余額ハ仁和寺覚助法親王の筆　僧舎に區あり○什宝にハ玉日宮御像　此寿像ハ高祖聖人常陸國笠間郡高柵といへる所にて眼前に彫刻し給ふ所也と云ぞ　抑玉日宮と申奉るハむかし六角精舎の本尊救世観音薩埵まて相望しまし我に末世女人成佛の結縁を示さき給ハんがため大慈大悲攝見攝進れ給巧を以て月輪入道兼實公の御息女玉日の御方と示現し給ひ假令に高祖聖人に随従し給ひしが聖人配流の御身ハ洛東幽邃の地に世を忍び抑望しゐるが聖人建暦の比勅免を蒙り給ひ越後より常陸に渡り稲田に住し給ふ

真佛御房の俗姓は結城七郎朝光が玉日の御方の便なる…にて御座さまを深く歎き上洛の砌これを見しまりて結城の東なる玉岡といへる所に新殿をしつらひ斎を儲きまゐらせしが聖人に御對面ましくてより宏弘の教誡をきこえ給ひけるに聖人には貞永の比帰洛し給ふといへども玉日の御方には尚も吾妻にとゞまり更に利生の光明をかゞやかし終に御歳六十にて建長六年九月廿五日彼玉岡に於ひて大往生を遂し給ふ靈告の文によせ法名を光明莊嚴院女身禪尼と号し殊に女人得脱の先達となり給へる事仰ぐもあまりある方なるべし其後下野國沖村といへる所に真佛御房の門徒にて女身堂を營み彼壽像を安置せしが或時夢の御告ありて結城の當坊へいらせしなりとぞ又其後寛永の比准如上人関東法下向

光信坊尼御母ハ恵信御房月輪禅定殿下の御女玉日と申せし貴女之聖人御入滅の折ふしハ越後にましくけり　弘長三年春の比この御娘の御方へ被霊夢の記をまいらせ給ひ御父を送り給ふ事をのせらり其のことハ一生之間継注巌の告命豈菩薩の妄語ならんやされバ御法名の異説と御入寂の年歴難諮せられしを除ては其の事ハ彼霊像を以て偽作妄語とまうハ年来其抜事の差門にて其根本をうしなへるといふ者ありしかりてこそ管見の浅慮を以て不可思議なる薩埵再来の霊像を撥とすべからんや

真佛上人像　高田専修寺に安置する所ハ肖像真佛といひ当山に安置しける御肖真佛とぞ縁起委く専修寺の条下に出

結城七郎源朝光の石塔あり其外霊寶因器之

高棠山法得寺　西流　下野国都賀郡佐河野村にあり往昔ハ坂東巡路なりとハ寺号移跡を此所に記とどもを縁起什宝等ハ国主けの例によりて本国当寺の条下に出と

野田院宗願寺　西流　下総国葛飾郡古河にあり

当院ハ高祖聖人御直弟野田西念御房の遺跡にして二十四輩第七番に属しけ昔西念房武州野田に於ひて一字を建立

古河御城
宗願寺
法得寺

古河御城

宗願寺

せしより鎌田の御房と申しなり当寺は慶長年中の
建立とぞ（西念御房の俗姓伝記等篇信州布野長命寺の条下に出せり西念御房の遺跡と云は信州布野長命寺西流下総辺田村西念寺東流江州八幡西念寺）
佛光寺末寺当寺を合せともに三ヶ寺也

○什宝高祖聖人八十五歳御木像（聖人御直作御附属の木像とぞ）

因に云日下浄円寺東流古河より磯部の間に水海村正覚寺東流も元祖聖人御由緒の地なりと云

磯部高山勝願寺　東流　日都磯部村にあり

順性院と号す関東七箇霊寺の其一なり高祖聖人上足の
門弟飯沼善性御房草建の旧跡なり（善性房の俗姓詳しくは日囲東弘寺の条下に出せり）
本堂九間四面本尊阿弥陀仏（聖徳太子御直作）坊舎三區あり
開基善性上人始め大高山東弘寺を草創ありし後又当寺を
造立ありて明性房に附属し（明性房は真佛上人の門弟也）自ら稲田浄真寺
へ移住ありしが浄光寺兵火のために回禄せしかば再び

当寺に引移り幾程なく信州長沼に堂宇を再建し後越後
高田に移住せり即歓喜山浄興寺これなり当寺の相承
ハ開山善性御房二世明性房三世順性房 順性房ハ順信御房の真弟にて鳥栖无量寺の寺務たりしが為栖を順慶にゆづり後越後に移りて佛閣再興し三世の寺務として当寺の中興たり 順性壮年の後越後なる国府浄泉寺の寺務たり
四世善忠五世如慶六ハ世教
順たがひなく相續せり○什宝聖人御自画たり
向の御影しるしあり其餘宝物これを畧と

坂東太郎川ハ利根川の別名にして坂東第一の大河なれバ太人と字して[illegible]
よべり水源ハ上野国沼田より出下野武蔵下総三国の諸流相合して
隅田川に至りて海に入

## 高柳山光了寺　東流　同郡中田にあり

当寺旧天台宗にて武州高柳の郷に在て高柳寺と号せしが
往昔建保の比高祖聖人御経回の砌当寺に入御あり爾時に
寺務真悦法師聖人の化益を蒙り聞法踊躍のあまり御弟

勝願寺
本堂
阿弥陀堂

舞妓静児
奏舞曲図

奏楽愛給ふなるべし

銚乃口
てうし くち
香取明神
銚子町
松岸

龍ノ口
東洋大海

なりとなりしに法名を改めて西願と呼給ふ此時よりして寺
号も光了寺と改む第五世感悦の時に至りて寺を栗橋
へ移し第六世悦信の代に又此地へ福住せしといふ○宝物上宮
太子尊像 なる祖聖人の御作御手に松衣と称せ給ふが故に松衣のちりばめる別堂に安置す其外諸名の像あり 静女舞衣 此衣ハ往昔後鳥羽院の
御時天下旱して久しく雨ふらざりし時百人の白拍子をめして舞をまはしめ給ひしに其中九十九人までも
次々と舞て奏しかども其験しもなかりしが最後に禅師が女静児白雲の歌をうたひ舞
衣の曲をとりしに昊天俄にはじまとみやたちまち暗雲覆ひ来りて甘雨を傾くなりしかば
帝叡感のあまり御衣を与へて自らかづけ賜ひしとかや其後静児ハ我夫の後を慕ひ東へ下りしが
終に此なる栗橋の辺にて身まかりしが其形見の御衣を携へしゆゑ今当寺に是を伝へたる
甚古きを尊びて此代となりし昔なりし母その日月を立てに縫ひ七四星綾綱のごとく龍及び
雲ある御衣を縫ふ此静児の此地に来りし事書物ふかくみえざれども既に静帰と書てあるがやとさある村
此辺りに近く又むさびし御しるへるあまりて尋 委しくは
○御堂宝満寺 西流 桃李の漆にあり巡拝ハ常州鹿嶋の前大船津より船を行方
へまはし ○本堂十三間に西本尊阿弥陀如来 御首ハ弘法大師の作なりて御
体ハ祖聖人の御作なり 堂宇ともべて巍々たる荘厳なり
○香取大明神 祭る所の御神ハ斎主命又ハ経津主命とも号す常
州鹿嶋明神と同じく霊跡ましくて其葦原の中津国をと鎮めたまひし
当国香取郡揖取の地にありこれよりて和名をも大舟の揖取の海なる

よつて当社を常州鹿嶋より船路にて宝満寺へ往返の時巡路なり

○当国の東にあたりて小松といへる所あり其あたりの海浜をさして鹿島の浦といふ続後撰集に道潤の歌に

かしまの浦なみの波のおりつけにみえしかくれし人の恋しきやなそ

○まの入江を勝鹿に近し巣鷺の歌に継橋をよみあはせり

勝鹿や真間のまくれ継橋ふまれどまかるまかをとゝる

○かつまたの池といふまた乃堤など当国の歌名所なれども跡なくして其所もさだかならざる新撰集肥後の歌に

池もなく堤崩れてかつまたのしもふきまされるのいさりん

其外未乾山隅田川なと武蔵国にたつる名所も同名異所なれ先既に武蔵の方へ入の口に勝鹿とれど都で人の疑ひを生ずるをもて是を略せり

○当国の名産。葛西苔 浅草苔なり 御浅草。紬 結城紬なり。白鳥 当国中山より出る ○三度栗

# 常陸国

古来風土記の流布じ雖し。然まゝ知らひさゝちといへ義之名義は俗にひさりのひたちといへどへ国あつて常陸なる心なり知らいうちみちと書るとされば此国東方の極つてあれば名乃新らる所といへの名と陸奥は此に出張る国なれども是のおくといへもて云るべし又云此国東の極りなれば名を地の道に形するといふを以て日立といふとや

## 西本山光明寺 東流 常陸国真壁郡下妻にあり

高月院と号く高祖聖人直弟関東六老僧の内明空御房乃開

本堂
天子堂
鐘楼
門

西来山光明寺
小鴻山三月寺

基して聖人法筵を設け給ひし所にて霊場なり○本堂九間に面
本尊阿弥陀如来 安阿弥の作 開基堂 明空法師の像を安置 坊舎二区あり
抑明空房の俗姓を尋るに桓武天皇の後裔三浦平太郎為継 奥州武衡家衡征伐のとき大に勲功ある の息三浦庄司義継の嫡男同大介義明 治承四年八月廿七日卒ス世に不謂長寺 の人なり の子同次郎義澄 正治二年正月廿三日卒ス時年七十四 の男平六兵衛尉義村 従五位下駿河守に任じ度々武功あり嘉禎元年正月十日卒ス十男あり嫡子若狭守従五位下駿河次郎泰村二男小太郎兵衛尉朝村三男三浦三郎光村四男又太郎左衛門尉氏村五男四郎左衛門尉家村六男五郎左衛門尉資村七男六郎左衛門尉長村八男七郎左衛門尉重村九男八郎左衛門尉胤村十男平六義継等也 其九男駿河八郎左衛門尉胤村なり延暦年中兄弟将軍家に昵近して其家大に繁栄し殊に時めきたるが宝治元年其の比嫡男若狭守泰村謀叛によりて一族終に滅亡せり此時胤村も奥州に在るがこれは此を聞より世の様の心憂く一門罪障消滅のため出家してありけるを小山判官長村が為に搦捕られしが 東鑑に曰宝治元年六月廿日駿河八郎左衛門尉胤村

## 小嶋三月寺 東流 光明寺境内にあり

當院は往昔建保二年仲春の比宗祖聖人小嶋郡司武弘が請に應じ此地に下向し給ひ濟度利生の基趾を開き禪房を設けて轉法輪所となし給ひ同五年正月まで本願念佛を弘め給ひし靈地なり然るに聖人常陸の御直弟釋蓮位蓮位が俗姓は源三位入道頼政の末孫兵庫頭宗重とて當國に居住しけるが建保七年一門右馬頭頼茂謀叛を企て宗重同意ありとの旨法然へ訴へありしかば縛に召捕れ既に刑罰に行はせらるゝの所聖人是をふかく憐み思しめし渠が命を乞請給ひしに深く謝して寛助と號し遂に御弟子となし剃髪せさせ給ひ法名を蓮位と賜ひしより聖人に常随給仕おこたらず純一無二の從者たりとなん○或説に蓮位房は源三位頼政の子息伊豆守仲綱が子にして一門誅戮の砌聖人助命を請ひて御弟子となし給へりとも云先にもいへる考ふるに此附聖人御年四十七才なり京都にはじめて當國に御下向ありし年曽て此人福ば蓮位御房御入門の一事は兼久元年よりかゝの一宗の僧侶やゝもすれば聖人左遷の供奉越後御經回の御供を西佛蓮位といふと誤りけれども推ら其説を審にするものなし建保七年御入門の後或は洛へ上り給ふるやのちの識者これを正さば甚幸ならん師命によりて此三月寺に住し純ら教導ありけるが其後蓮位上洛の砌小嶋丹後入道善下に附屬ありしより法信房善下れ子孫世々相續して寺

勢ありしに中古衰弊に及び遂に光明寺の境内に移れりと云

三月寺舊地 光明寺より三丁彭城村へ行所ざまにあり

往昔聖人三月寺を建立ありし旧地なり方三十間許の面に古堤を築き中に聖人手つから植玉ひし楼二本あり 各三囲餘の大樹なりしとの地景観の旧跡なるを以て今に三月寺の旧なり

佛名山常福寺 东派 同國新治郡大曾根村にあり

玉川院と号し聖人の上足二十四輩第十八八田入信房 然れ飯田と唯心とふの遺跡なり○本堂御本尊安阿弥の作

八田入信御房と申は旧当国那珂郡久慈の西八田郷の領主にて八田五郎知朝と号し累世武勇の家にして殊に知朝当時にあひて其誉を隠さし然るに知朝宿因の深厚なるまや聊菩提の為に志し朝夕幸なるかな高祖聖人猶原

佛名山
常福寺
本堂
墓所

大門の郷御經回ましませしかば忠に趣向ふて拜謁をし渇
仰の思ひ深くして即出離の要路を問まりしに聖人
殊に専修念佛の奥秘を懇懃に授与し給ひしかば
紀朝立所に聞法隨喜して師資の約をなしなりぞ聖
人即入信と法名を号け給ふかくて入信房ちかのが屋
敷を廢毀し忽ち一宇の佛閣となし八田淨福寺とぞ
号しなり其後聖人御上洛の砌入信房御伴をと慕ひ
登ましが諸るく尾州日比の里蓮善寺に於ひて聖人に値遇
事り恰も嬰るの母をしたふがごとく歎き限りなかりしに
卒に病純く終に彼寺に於ひて往生を遂られし時に嘉禎元年乙未
三月廿八日かば蓮善寺の寺務入信房の厚信を立て生前に聖人
に謁せし奇特を感嘆し即其木像を彫刻し永く寺中

筑波山（つくばさん）

男体山
西谷

西行上人与
女伴権現以
鄙曲答話

西上人の山中にて
まう女を咎めし
拾遺集に
忠見が歌
とて
あつまうく
舩もよ
かね
此為り
いふぞう
何ま
の
ゐまのめ

秉燭翁以行歌
答日本武尊

權現既に守護ましますゆへ下山ありてまさしく此来儀を学び

山の中程に細流あり橋を渡せり来迎橋といふ是即今合の所なりといふ又登山の本路へ入る事二丁ばかり傍に聖人御腰かけし浅巌をびへり上に松柏の茂りし所あり坂し此所より登る又男体山の谷あり聖人籠らせ給ひける岩洞あり又女体山をも此と名聖人權現と問答ありし岩屈あり又すべて山上洞窟多くいづれも末社の神をまつれり

權現の御願望によりて筆を深く給ふ所として其外什物聖人權現に謁し給ひし始めたびに膳を通じ給ふ二首の御歌ゑるあり 二首ともに聖人御筆

〇物茂卿が曰ことばは元王の斎場たる筑波山に松とよし合しも常盤の縁によりてひたちを常陸と書も此山によりてなりひたちれかしり日高見の訛合せるなりひたちとれかとの反切きき訛してちよみかくしていへる説は東海岸に逆流して此山の林麓に及びしかば元来高山なれば是をとふでる給も堤防に似たりよりて山を筑波と号くとかり抑當山の祭る所の御神二体西の峯に鎮坐し給ふを伊弉諾尊とし男体權現と称へ東の峯に鎮坐し給ふを伊弉冊尊とし女体權現と称へ奉る謹で考へるに天地開闢し時彼二体の御神天祖の詔を奉じ高天原より磤馭洲にあまくだ

矛合鉄ひろて州國及び山海草木を産給ひしに其始め東方震位に向ひて此山を生し給ふ故に初は長男山とも申せしなりかくて二神桐議し給ふやう大八洲の國既に定まりたりいかんぞ此國に主帝なからんやとて初め日の神月の神蛭子の神素盞嗚尊この四の御神を生給ふ日の御神は稲村が峯月の御神は安坐常の峯蛭子の御神は多原木の峯素盞嗚尊は源の峯に鎮坐ましく父母の二神と常に麓の巫女之原に遊びたまふ今此麓の六社これなり此をもて祭礼もいにしへは冬至と夏至との両日山上山下陰陽交代の式祀なりしかど中古延宣よりして正月朔日十一月朔日の両日に定まりしといふ麓なる第一の華表に天地開闢筑波神社とかける金字の額をかくぐ誠に日本最初の霊山にして殊に和光同塵の御要玄跡なれば誰か結縁を仰がざらん

古今　筑波ねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし

○当山の南岳に月輪掌菓洞といふ岩窟あり是ところハち徃昔開山徳一大士初て登山し霊窟を探り巡らまし時天童のをしへにより神代巻縁と云全部六帖の神書を感得ありしとこのいふ此書ハ即当一山の奇石宝物や珍木霊草の類を具にしるせる書なりとぞ当山今に蓄をとせんト筮家ゟこれを以て重宝せり

○霊窟とつへるハ其源麓深く通じて時々潮水を涌出すこれむかし

娑竭龍王西天修多羅院にある所の三十三天及び諸佛を請付
する霊鐘一口を当山に未明神へ献ぜんとて出現せし所之龍王は後
勅請して今の辨財天女これなり霊鐘は龍神乃献ぜしゆへすや
是を撞時は海水漲まて民人の愁あれバ今は山の麓聖天と
祭ところ地に埋蔵をとつふ上件の縁起はさしてく社家の縁へとぞ

○当山連歌の権輿とうふるに日本紀に景行天皇四十年乃冬
日本武尊東夷を征し夜比須とまく〳〵平げ日高見の国
より帰り給ふ路常陸国を経て甲斐国にいたり酒折宮にて休
らひ給ひしに燭をとりて御食を進る者あり附に尊むかたうことし
て侍臣に問て賞く 珥比麼利菟玖波塢須擬氏伊玖夜加祢都留
と侍臣あへて答るものなし燭をとるもの乃これについて續て
云く 加加奈江天夜撥波古古乃夜比尓波登袁加塢とこれをとるは
ち後世連歌のよつてくおこる所なり

○当山に西行庵しといふ所あり古人の説に往昔西行上人登山の折ふし
女体権現少女と化現し岩上に立給ひしを上人あやしみて
「磯遠く海辺に遠き山中にまよふめいかるてそふしぎえたり
と吟じられば少女とりあへず
「つくばねは波つてふとつふうれバまうるありともふしかるまじ

とゞまり給ふに上人したがひて其木より下山ありしかバようつき
名づくとぞ
○みなの川ハ男体山女体山の二の山より流出二流相合して一ツと
なる水上を桜川といひ末をみなの川といへり権現の宮居の辺
まで桜樹多しよりて号くと陽成院の御製に
後撰　つくばねの峯より落るみなの川恋ぞつもりてふちとなりぬる
百人一首応永抄に此御歌の注にみなの川の末ハ桜川へ落るといへり
つくばねよりくる砂の下をくゞりて河となるといへば一滴ヅヽ流て末ハ河と
なるといへるなり云々　右の説ともに大に齟齬せり年代のたがひによりて地名
沿革せるにや　さくら川　貫之の歌に
後撰　常よりも春べになれば桜川花の浪こそまなくよすらめ

帰命山如来寺　東派　同国同郡柿岡にあり
無量寿院と号す僧坊二区
当院ハ宗祖聖人御造立の寺なり開山にして二十四輩第四南荘
乗然御房の遺跡なり乗然房ハもと武人にして俗姓ハ藤

柿岡
如来寺

臺所
本堂
天子堂

原鎌子内大臣の後裔尾張守親綱といふ幼より武術を超錬し力あくまで強く万夫不当の驍勇なり然るに当国の善業によりけるや含は鹿島の神官斤岡尾張権守信親（鹿島大明神聖人を渇仰のあまり御衣の御影絵ましく法衣を擦り信濃を隠し給ふ）明神の託宣ありしより深く聖人に帰依し専ら念仏の行者となりしかば親綱もこれに聖人の化導を蒙り忽ち安心獲得して遂に門侶に加はりけり（于時貞應元年壬午）其の後六年を歴て安貞元年聖人当国信田郡霞浦の海中より光明出現の弥陀の木像を感得し給ひ即其地信田の浮島といふ所に于て一宇を建立し如来寺と号して勧化教導なし給ひけるが後彼寺を乗然房に附属し給ふよつて以来乗然房如来寺を相続し専ら弘法化益にしまいつしか坊羅のすゑに此浮島南荘の旧地廃退に及び

を後に今の柿岡に移して再興すと云云 ○什寶たる木像
春日の作 手幡名号 法然上人御筆 六字名号 高祖の御真筆大師流の名号と云ふ傳に云
聖人の筆道を後京極良経公より傳授
し給ふ扨當國御化導の折から笠間の郡徳蔵村馬弘大師といへる即五筆和尚の
旧跡にしてまします其遺墨あまた不残せる故以て聖人これを見給ひて其
筆法を学びてこれを模擬し給へしと云誠に吾道の御名号とは筆勢甚だ體勢恰も怒猊
の岩を抉き渇驥の泉に躍るが如し其絶妙なる事凡慮の及ぶ所にあらず是を以て思ふに今御聖
人の御真蹟ととなふるもの京極流大師
流の二樣あることを知らざるべからず

因に云彼徳蔵村馬槽大師といへるは往昔弘仁の頃弘法大師當國を経歴
ありしに長者徳蔵なる者の家に旅宿とし此地に数日を送り給ふ其比に
長者が深窓にとざし姫ありて二八の春深く秘して花のかんばせ
風に乱るる柳の髪のいくたをやかなる生さちに長者夫婦が秘蔵して
掌中の珠と愛るおろかならず更に他事なかりしに娘なる
病にそみ醫藤さまざまなりしかども露其しるしなくやうやう次第に面瘦
ていと物うげにて消えさまなれば夫婦は大に是を嘆きにつひに万金の
たからを投出しても物の数かは彼一人にはかへがたしとひきる其法を需る
又中にも三折の功を積る巫醫これを診察して思ふに此病は是
外感の病にあらず心中に深く思ひ労することありて終に肺労せし者

色即是空空即是色とはこれこの謂ひなるべし

戸倉姫懸想
大師偈ニ答因

かれバ忍ど甚そへ一命のみを叶へんより外の薬石の験ハなしとあかり
夫婦ハいよ〳〵あきれまどひ即侍婢の者をして私よこれをうら
問しむるにさらにてずる思ひる死なん身の死るハ同じどもおすがたへん
と思ふ折からハ姫ハ悩しき中よりもおもも私気に勤と上げ何とう
つゝと侍らんいつぞやより我家にゐらせ給ふ御僧とそこかいまくし
より思ひの心ちに志門をしかへも事きさふ勿体るやかりにも佛体と
得給ふ御出家に懸想し参らせることさよと幾度思ひかへせ
どもまよひの雲の消せねば今ハ恋ゆへ死なん命せめてハそのさま
姿あるとみるまぞ侍婢よれに労りて軈て夫婦にかくと告しかバ
あくまで恋ぬるとは云るがゆへ窮愛のあまりにいふもして此事を叶へ
得させんまのとて大師を請して長者夫婦のそのあまゝ姫が死をそ
たとひ給へと打歎きけるにに大師ハいと便なききりに柳がしめ即側
よ寄る楠の槽に自ら御姿をうつさせ給ひこれを授け給ひしが
不思議やところ姫此御姿を見るより煩悩の雲霧晴まうり
真如実相の観念ふかく直に長なる黒髪をおろしげまう切拂ひ
正菩尼と号し終に菩提の為にひしかバ長者夫婦もともに
みのりに引されて数多のたからを抛布引山といへる高山を切開
せ一字の伽藍を建立しこれを布引山金剛光院徳蔵寺と号しと

るや其後永延の比常陸豊田郡のさむらひありしが彼大師の御影を布引の瀧に入せ給ひ忽ちも換じ給はざりしは誠に燈籠の奇特いちじるしきよりして火除の大師とれやなり

○小野御牧は今はなくなりて當國信田郡小野村に入るは其旧地なりとぞ

## 大學堂

同國同郡大塔村の東北板敷山のふもと経来の傍にあり

聖人當國稲田にまします時せし比府中より稲田に帰らせたまふ道板敷山の本をよぎて大塔村のあたりより吾國山の峯を通らせ給ひしに思ひもよらぬ彼山の林藪なる深淵より其長三丈餘りの大蛇逆巻浪を押わけて聖人の方にむかひ延くとして進み出しは身の毛もよだちて恐ろしし、されども聖人少しも動じ給はず徐に歩み寄給ひ汝今生なる何のゆゑや抑言心を去て吾国を求めんと欲るや否又は億劫の悪業をかさねて解脱を得る意なきやと宣ひける

大学堂

正業寺

天盖木

大蛇逢ニ解脱
弥陀名号の
利釼には大蛇も
即得往生

また蛇怨をうたれ両眼より涙を濺ぎひとへに渇仰の
けしき見へたれば聖人かさねて云く汝佛法にあひぬるを
悲まずゞみせよ諸悪業も改悔懺悔の功徳によりて忽ち
得脱疑ひなし さもあらば今宵のうち汝を輪回の坊舎に
訪ひ来りなば蛇身解脱の法を授くべしとて終に聖人
寺へかへらせ給ふに其夜丑の刻女の形して外面に来る
ものあり聖人やがてそれと悟らせ給ひ即扉を開ひて召入給ふに女
は涙ながらに聖人の前に額きて妾は元来当国猿子村何某なる
者の妻にて候ひしが生つき慳貪ふかくしてよく君のまへうらくみて僧尼に
対しれがいましきとのミ思ひ後世の苦患は露ばかりもしらで唯生前の
愛欲にまよひ夫の愛妾を悪み瞋恚のほむらに胸をこがしつゝ
止時なく終に狂乱して死しけるが多年の悪業一時に報

ひ今かく蛇形の苦みをうけ常に水中にすみがたり身に三熱にこがされ鱗甲外に螢しといへども百千の蟲虫其内にみちて肌を嚙むこと針をもて刺よりもなほかなし何卒願くハ聖人化益の利生をもて此大苦悩を救ひ給へとなく〳〵懺悔を述しかバ聖人奇特の思ひをなし給ひ即一封の血脈を授けて云く昔娑竭の龍女は如来の法を信受して即身即佛の果をうけ又摩竭の大魚は佛の御名を信じ奉り悪心を翻へして善園を得たりし此一封は即如来万徳の名号及び汝が法名漆光と号すなりされバ本師法皇の弥陀尊は煩悩悪業の衆生をあはれミて救はせ給へむ汝努々疑ふ事なく一向一心に深く信じて其を参らせよ決定往生せんものなりされバ報謝の称名唯南无阿弥

陀佛と唱へたまひしとの給ふ聲に教化をうけ給ひしかバ女ハこまく忝

頂戴き嬉しげに聖人を伏拝みて何国ともなく失せにけり其後幾程

もなく彼淵の大蛇死して水上に浮ひしと沙汰しけれバ聖人

即ちかしこにいたりて見給ふに猶かの一封を口にいだきたり此

に於て聖人里人を語ひ給ひ彼屍を土中に埋み塚を築

三日三夜法筵を設けて念佛し給ひけるがかくて安より諸

方の参詣市を成してたふとひまゐるほどに聖人ハ時こそ来れと

思しめし大蛇を縁として無信邪見の者を教化し給ふ有

眼前因果の理を悟らせ弥陀大悲の深恩なる事を忽に信じ

利益を蒙る者数をしらずとかや去程に今宵満三夜とい

に至りて不思議なるかな荘厳端麗なる天女来降し聖

人を礼拝し我ハこれ彼淵の大蛇なり辱くも尊師の御化

等によりてこそやうやく蛇身をまぬがれ天女の果を得たり順次には淨土に往生せんも何の疑ひかあるべきされば此大恩を謝せんためとてさらに來りてまみえ參らせり廣大恩徳無比躬歡喜とゑらふと称して聖人を再拝しやがて白雲に乘じて立さりぬとかや〈以上正明傳〉即彼塚といふは太増村の小高き大塚是なり〈中古鎌倉の大覚禅師ひさしく爰に隠遁ありと云〉堂のかたはらに聖人植置給ひたる天蓋本といへる大樹あり〈楠の木のまくこと〉○什宝六字名号〈聖人真筆にてかの大蛇に授与したまふ〉

本かたりの

板敷山〈大覚寺より八丁筑波の山の尾なり絶頂に富士權現を祭れり登り口に石燈籠あり二如上人御腰かけ石といふ〉

當山は往昔高祖聖人〈何ゝ御年四十九〉常陸國稲田御房にましまして柿岡の通路なりと云等御教化ありし折から往返し給ふ所の熟路也〈此所より山に籠さむかしてい外に捕まり〉其頃當國那珂郡東塔尾といふ所に後の優婆塞が遊行

板敷山

百八田

播磨公辨圓といへる修驗者あり（此は聖護院の御内にありしが智徳兼備の人なりしが修行末賢ふこれと請して熊野の先達と爲せり後には其茲の僧都と号す）國中山伏の司にして末流十二坊を提轄せり

これによりて諸人の尊敬大方ならず圓智徳兼備の人にて専ら修驗者の再來とぞ申たり就中辨圓（時に建久三年の比とかや）聖人の徳行廣大にして遍く給ふ所の親鸞を論ぜば其化益を蒙らざる者なくさるから活如來のごとく尊とさるゝを嫉きことに思ひいでや我行徳を以て是を拂んと我慢の臂をかゝげて窃に此山に登て呪咀の法を修し（今に山上に石の五輪塔魔壇場の跡のこれり）けるがいかなる事にや祟が修せる所の法是まで一度も驗なきゆゑ何かざる小聖人の御身に聊障なく壯健まで遠近の道者別なく教化の爲に奔走なし給ふを見て辨圓いよ〳〵害心をのり此は聖人は板敷山を往返なし給ふを究竟の幸

とし眷属数多かうひつき刀槍弓箭を携へ窟の坂に彼不の谷間に伏かくれて聖人の来り給ふを伺ひゐることそ恐ろしけれ（山の根のひがしの麓の沢といふ所に百八田といへる田地あり辨圓のかくれゐし眷属ども此所にかくれて相図と給ひし所とぞ又右の方に山上へ通ふ細路あり親鸞道といふ是即ち聖人の往返し給ひし道といふ）かくて聖人は神佛擁護の御身なれば恰も隠形の術をも行ひ給ふがごとく此山の往返日々に發なりしといへども辨圓が徒輩て遮迎むる者一人もなし窟に扣ひゐたりし辨圓殆ど奇異の思ひをなし信じ切たる我行法も今更疑はしければ所詮聖人の香刹に行むかひ面のあたり対話して其智をも試さむやと思ひ遂に稲田の禅室に訪ひ来りしが聖人左右なく出合給ふ辨圓ゐる款をはたし奉り害心忽ち消滅し後悔の心頻りにして即ちおのれさまに日来の胸懐より聖人を害し奉らんとせし

辨圓伏衆
従窺聖人

ちかひ遂にまのあたり聖人露驚き給ふ氣色とも見へしかば御ふ
辨図いよいよ聖人の高徳忍辱慈悲にましませるを嘆伏
し我慢心の甚しきを恥忽兜巾篠掛をかなぐりすて
聖人を三拜し我既に多年修行の功徳をもて四海の表に
至んずるを思ふの慢心より忽ち嫉妬の魔障と生じ未来永
劫悪趣に墮せんとせしにせめていかにし若因の拠あらずや
聖人大徳の海容なるけく慈悲を拜しまつる事實に優
曇曼陀羅華の三千年に値ることをもて懸念一時に
散じ法徳の高きを仰ぎ奉れば今まで修せし胎令金部
瑜伽三密の功力も何かせん願くは聖人膝下を許し給ひ
一語片言の示教にも預らば長く門徒に陪侍せんと信心
無二の懺悔のありさま聖人奇特に思し召し石も剃除して宣ふ

ゆゑ夫我真宗の法なるやたとひ極重罪人なりとも弥陀
成仏の本願なれば我身のあやまちを深く歎き一向にた
のみ給ふ人とやさん人ハ誰か往生を遂ざらん而来ハ報恩謝
徳の称名怠るすべからずとて即座にまかせて弟子
となし法名を明位房覚信と名付給ひけり干時行年三十二歳二十
四輩第十九番に記当ル
依りしより以来聖人に常随給仕し師の高祖剃りて柔
順慈悲の姿となり怒に張る弓の弦ハいつしか西に入さの
月と詠むるこそめでたけれ其後ハ国松原にかひて一宇を建
立し上宮寺と号し弘法化益ありしに聖人御帰洛の
後ハ猶原に隠居して信心堅固に称名怠るなく勤まし
ましが終に建長三年十月十三日六十八歳を一期とし目出
度往生を遂られけり誠や当山ハ逆心なれども真性得悟の

善縁を結びたるの霊場なり御傳抄にも順逆の二縁ありて又
なりといへども是偏に高祖聖人威神霊勝の洪徳表顕
ある所なりといへり

稲田山西念寺 東派 同国茨城郡稲田郷にあり

東御門跡の御懸所にて稲養院と号し往昔高祖聖人二十
九歳の御時六角堂救世菩薩の霊告を蒙り給ひし其
後冥合ありせ給ふ所の勝地にして十餘年の間御居住まし
し真法利生ありし芳蹤也○本堂本尊阿弥陀佛 恵心僧都の作
僧舎三區あり当院は建保五年の春高祖聖人 于時御年四十五歳 当
国小島郷より此地に移りて閑静の地に一宇を建立まし
ましし幽栖をトし給ひて遂蓬蒿を埋ミ桃李言はねども
貴賤道俗御跡を尋ね給ひ緇素老弱法味に引されつゝ門の

まふりは示せられまく撰集と成し聖人と帰依し玉ふ蹤なる
ぞ恰も世尊在世のごとし爰に於て聖人ふかく感じ給ふ
尚ら仏法弘通の本懐既に成就し衆生利益の宿念忽
に満足れ先其ま全く当初救世菩薩の告命今に於て符合
せりとて大に歓喜せ給ひ即精舎を命して歓喜踊躍山
浄興寺と称し給ふ其後聖人（干時御年六十歳）御弟子善性御房
に附属し御帰洛有りせ給ひしかば善性御房即当院
を受継し給ふ事数年なりしに惜いかな兵火のために霊場
悉く灰燼となりける程に夫よりして総州磯部信夫沼
篤へ次第に移轉し今既に越の後州高田に安在すと云（今城後高）
田御坊は聖人御真筆にて稲田御坊と
善性上人へ譲り給ふ二十一ヶ条の掟書と云物あり
かくて浄興寺他邦に移轉せしかば笠間
善性は当国の住人源家の子孫稲田九郎頼重とて前に述べし武略の達人なり後に当国
慶養房
其時を得て聖人に謁し奉り新圓頓一乗の要法を受しより又偏に撰…する撰玉

稲田山（いなださん）西念寺（さいねんじ）
笠間（かさま）光照寺（くわうせうじ）
御影堂
太子堂
笠間御城
光照寺

寺中
山門

うちまちに六根通を得て運識の璽の光明を発し直に剃髪染衣の姿と成り聖人第二の御弟子となりしかば俗名を其まま頼重房慶西とぞ法号を賜ひたり聖人御帰洛の後ま笠間にありて深く弘法の子孫深く光を輝き即稲田の霊跡と再教化をなしたりけり興しこれを西念寺と称じて聖人十餘ヶ年安住教化ましませし布金の芳跡を伝持せる寺院は宗祖の大法と謂つべし

上來は大谷遺跡録を任て筆記せり然るに享保の記には稲田御坊は聖人御帰洛の後教念房に譲り与へ給へるなり又享保の記及び諸縁人口に伝ふる所は聖人稲田の寓住は十ヶ年の間なりといへる又遺跡録には十二ヶ年の御滝留なりと記せり姑らく異説をあげて後来の識者を待のみ

○什宝　鹿島大明神御寄附の御戸帳　高祖聖人御真筆十字名号 光をはなち

鹿島大明神聖人へて御対坐の御契約

聖人御直作の聖徳太子の木像 以上三品伝記鹿島明神の条下に出されれば此に略を

鹿島井 右堂の東の広庭にあり当年聖人当院に御滝留の砌り境内の井水何とて濁りて大に悪へさせ給ひしかば即鹿島明神七ツ井の内一ツを寄附し給ひける其の霊水なり甚冷の御挑ひとく冷かなり毎年六月十二日には井水かまれて鹿島へかへるといへり奉くは明神の御記を慕給ひしよ

御杖松 聖人松の木の杖を自らさし置給ひしに其霊根芽を生し枝葉繁茂して遂に巨木となりて端いろに近年枯れぞまつりに遺株を接せりさりに若生へと称じ松の木あり先年一如上人東国御下向のとぎり極要給ひところや

三度栗　寺より三丁許南桜川のひがしにある栗の林これなり聖人越後にましまし　し時上野が家にしばらく逗留し給ふとき又笠間の庶民小栗二百ばかり聖人に献せしに其内に又顆枝選び給ひしが三度栗の種となりて是聖人の尊に栗子を嚼み給ふゆへなりと順信房が筆記にみえたり

稲田姫宮　今稲橋と號て大道より西の方にあり素盞烏尊の妃稲田姫をまつれるよし毎年九月十八日祭禮あり

朝姫の墓　又稲田姫の墓ともいふ宮よりいひてゐより東へ入農家のうしろにある說に云く是即玉日の宮跡の御墓なりとて彼姫の侍女遅田お稲是貞女なるを あはれみ此地に住して御墓を守りけるをとかく毎年九月十八日稲田姫の宮と同じく玉日の宮の御祭ありしかれども一所にこれを祀るとや朝姫玉日の宮の御事其説まちまちなりといへども既に下総國信楽孫右寺の条下に詳しく論ずれば略す

笠間光照寺　東派　同郡笠間の城下にあり

當院は高祖の直弟頼重房教養法師 信州西念寺の条に見ゆ の開基にして専ら弘法教導ありし芳跡なり中古止事なき御方より高祖聖人の御影及び六角堂救世菩薩聖人に告命し給ふ所の御影と自ら畫せ給ひ當院に奉納ありしによりて今これを安置すと云



二十四輩巡拝圖會後編巻之二終

二十四輩順拜圖會
後篇
常陸
三

親鸞聖人御舊蹟二十四輩順拜圖會後篇巻之三

目録

○常陸之部

久米願入寺
畠谷山光念寺
王跡山青蓮寺
西行の和歌
玉川山常弘寺
明法坊の墓
信願山寿命寺
額光山善徳寺
毘沙幢山照願寺
金沢願入寺

以上

河州尊教寺 了貞 撰

## 常陸國

國号考第二巻にあるを

### 外森山唯信寺　东流

常州茨木郡宍戸の庄山の尾の郷太田町にあり

二十四輩第二十二番宗祖聖人の門弟戸守唯信法師の開基之始唯信房当國那珂郡戸守に於て一宇を営構し尊敬化ありしが後師命により河内國に移住して化益せり河州讃良郡中野村常慶寺是其舊跡として法嗣今に相續せりと云これによりて戸守の旧趾退廃せしが中比由縁ありて今の宍戸太田町に移ひて再建し初めは寺号を浄安寺と云しとや戸守御房の法席を傳持すと云

### 法喜山歡佛寺　东流

同國同郡河和田村にあり

当寺は聖人の御弟子唯圓大徳の開基也旧唯圓房と申すは小野宮の為阿闍梨禅念房の息男にして大納言弘雅阿闍梨唯善大徳は

外森山（ぐゐしんさん）
唯信寺（ゆゐしんじ）

に異母の舎弟也高祖聖人御帰洛の後仁治元年十九歳にして聖人の御弟子となりしが〔干時聖人六十八歳〕法名を唯円とぞ賜りたり性稟穎悟にしてよく真宗の蘊奥を極め頗る諸弟に勝れしかば大部平太郎これを招請せしに師命にて固く辞さるゝを得ざれば終に当国に下向し此地に弘法の梵宇を草建し是を泉慶寺と号し専ら勧化ありしに文永十一年〔干時五十三歳〕上洛のおりから有縁に依て和州吉野郡下市秋野川の辺に一宇を営み〔今の下市立興寺これなり〕暫く彼地に教導し更に関東にかへりておはせしが正応元年再上洛し覚如上人に面謁しまへり同二年二月六日終に下市立興寺に於て寂を示し〔干時六十八歳なり大谷遺跡録によりて記を〕其後星霜数経て元禄二年の比同山合当院の寺号を改め報佛寺と称しとかや〔宝永享保の当住持は大部平太郎の弟平治郎之孫に宝永の比まで平治郎の弟平次郎といへる若者なく其後裔今に大和国にありといへる遺跡録とまで大に相違せり平窃に考るに唯圓房平太郎の招請に応じ常州に下向ありて後平太郎と共に親しくいひかさらひ法を受てあらひれおやまつて平太郎が弟となしたるへきか尚後来乃識者これをさらば甚幸〕

唯圓房の御事世に伝ふる所を聞に彼平太郎が舎弟平治郎といふ者あり
性質勇猛剛愎にして神佛を信ぜず只己がちからをのみたのめる妻女何
某なる者はこれに引かへ明善後世のことのみおもひ歎きて此ごろ聖人唯圓を
御化益ましましければ人これを聞て法筵に詣でふかく御教化を信じ参ら
せ誠に二心なき信女なりしかば聖人奇特に思しめされ御真筆の名号を授
けたまひしに平治郎の兄んなるを憚り密に櫛笥の底に秘蔵して信を怠ら
ざりしが平治郎かくとはしらで妻女の物まうで心にくし我に忍びて夜中何
の用にあらん是必ず外に通へる密夫のあるにこそと一途に思ひつめ不詮
議にもそれをそらさんとある夜ひそかに宵より出ゆきして村はづれの木陰に
妻女の来るを待すまひけるこそ怨しけれ妻女は又今宵しも平治郎
他行なれば私に聖人の御坊へ参詣し御勧化を聴聞し何心なく帰
りけるを平治郎まちて見るより詞もかけず後より抜打に切付しが肩先より
乳の下まで切さげられ血に染みて一刀のもとに息たえけり
平治郎は志をとげたりと独り悦び其儘宿所へ帰りけるがいかなる
事にか妻は蘇りて其ようしきさせるいろもなく立出て平治郎の
面をつくづくまもり今宵は何とておそく帰らせ給ふぞと見へさ
せ給へといふに平治郎は大に仰天し何さま怪異の事ならんと抑ひ
即ありしすがたをつぶさに物語れば妻もとより不審き奇異の

平次郎妻を害して善因を結ぶ図

娑婆電光の
間は何と
愁ひ何を
煩悩即菩提
菩提の種なるをや
老るも若きも
嘆べからざる
ものハ
安心の
ひとつ
なり

中川

廣林山眞佛寺

法喜山轂佛寺

なひをはしるがさるまでも日来念じまゐらする御仏とけの我を救ハせ給ふなれ
りやしく鵜櫛笥の名号を見出し見てあれバ不思議なるかな名号の
横さまにきれするなぞ妻も信心弥増にそぞろ涙をながしあさましき我
らぞれの身より給ふの勿体なやと称名せらるゝはふし
おがめるさしもの平治郎もかくまのゆくり奇特を見て霊
験に発しつて忽ち改悔の心を生じ妻女とともに聖人の御坊に
至り給ひの御弟子となりけるとぞ今其名号を称しまつり和泉下市
村立真寺第一の宝物にして諸人の志る所なり

霊宝には聖人御真筆の光明本及び唯円自作の木像等あり

## 廣林山真佛寺　西派　同国同郡太郡郷横曽根村にあり

受法院と号し高祖聖人の真弟真佛房の遺跡なり　下総結城称名寺の開祖とは同名異人なり混ずべからず　本尊阿弥陀如来　ある祖聖人御真作　其外真佛上人自作の像を安置し

真佛房俗称ハ平太郎とて当国太部郷の庶民なり聖人の御門

徒となりてより専信無二の行者なり勅聖人当国御勧化の
間は其身既に真宗の紹継として佛意にかなひ師命に随信してあり
しかれども未俗形を改めず此をもつて紹隆佐竹刑部左衛門尉の
子息と熊野権現に詣しけるが権現の霊験を蒙り世に念佛
行者の鑑とはなりけり 平太郎熊野詣の事順信房筆記に仁治元年とあり尚委くは御伝鈔に譲りてこれを略す又亀山院平太郎が法徳とめでさせ給ひけるとぞ真佛上人の勅号をたまはりしといふ
後に入道し真佛房と号し弘長元年六
月十八日ニ八十五歳にして終に大往生を遂られしより以来
子孫僧形にて平太郎真佛と称し相続してありけるを良如上
人東国御下向の折から真佛寺の号を揚られしとかや

徳池山信願寺 西派 同国同郡水戸城下向井町にあり
蓮生院と号す二十四輩第二十三番鳥谷唯信法師の芳跡なり
本尊阿弥陀如来 弘法大師の御作にして銅造の御佛なり

徳池山(とくちさん)信願寺(しんぐわんじ)

本堂

鐘楼

山門

唯信房俗姓ハ当国保内の住人畑谷治郎信勝といへり高祖鹿島御化導の附御教化を蒙り直に門に入て竟に尊信生二の御弟子となりぬるとなん○霊宝高祖真跡の御消息即唯信房へ下さるゝ所なり 其外代々上人の御真筆等あり

法王山善重寺 東派院家 同国水戸上町坂戸にあり

遍照山とも号せり二十四輩第十二番高祖上足の御弟子釈善念房の開基也○本尊阿弥陀仏 運慶の作又ハ春日の作ともいへり 坊舎三區あり

当寺の略記に曰く開山善念房の俗姓ハ平氏にして桓武天皇の苗裔三浦大助義明の末岡崎四郎義実の孫与市左衛門実忠の三男三浦三郎義重といへり父実忠和田義盛に同心し建保元年酉五月三日鎌倉に於て和田三浦の一党

坂戸（さかと）善童寺（ぜんてうじ）
羅漢堂

花岳寺
太子堂
山門

義重切ふして聖人を負て摂川を渡る圖

謀叛の御討死せし時に義重漸十三歳なりしが同年八月十三日鹿島明神に志願のため詣で給ひ帰るさ櫟川にさしかゝせしにいと殊勝げなる老僧のまうりなやめるさまなりしが義重此を見られ直に彼僧を負て川を越給ふに豈はからんや是則高祖聖人にてまし〳〵けりかくてこれ終に菩提の善縁となりて屡御勧化を蒙り聞法随喜のあまり御弟子の列にぞ加はりたる家に聖人彼櫟川のほとりに一宇を建立し善重寺と号し専ら弘法し給ひしが後々の善念房に御附属ありしより善念法脉に随ひ教導持ちたるうち終に弘安八年十月十三日八十五歳にして入寂せりといふ

宝永の記享保の記及び大谷遺跡録并に善念房の俗姓は三浦の一門長尾義重とく万夫不當の勇士なりしが宿縁浅からず聖人櫟川の法筵に投ひて御教化を蒙り終に御弟子となりしかば法名を善念と賜ひたる祖上足の門徒なり其後当國笠間に住ひて一宇を造立し教導専らなりしが中古東門部に移住し其の十三世を経て天正十[illegible]年の兵乱に堂院を失ひいまだ再興せず其旧跡を存して後の識者をまつのみ

## 霊宝聖徳太子十六歳の尊像

右此尊像ハ太子の御自作にして彩色ハ聖人手づから施し給ふ所なり往古ハ門國太山村慈観寺に安置せしを寛文十一年亥正月世んごとなき御方より当山へ寄附し給ふところ抑此尊像ハ霊験あらたなるゆへあまねく世人の尊ミ称して中にも夜陰に至りて光る数に續經し給ふゆへ今に於ひて向ふ者あり又元和元年九月十六日三人の夜盗当山を襲ひしに忽ち利生ありて何くのごとく発心を遂たり又慶應三年正月十五日隣家より失火して当院の本堂既焼亡に及んとせし時に霊像出現し給ひ皆時に猛火を消滅し玉ひしとぞ其餘奇瑞妙験枚挙にとゞまらずいと妙なれバ誠に不思議の尊像なり

○桜川の水源ハ当國茨城郡吾國山の麓より流れ出て筑波郡明神の桜の森を西にながれ末ハ亀城の南郭亀橋の下へ落合終に霞が浦へ流入柳この桜川といふハ後朱雀院の御宇長暦年中の比筑紫日向の國に桜子といへる美少年ありしが此児ゆゑありて人商人の手にかゝり引放れ筑波郡明神の社僧神宮寺に預りてありけるを其母なるものかくとはしらで尋ねて子の行衛を慕ひつゝ女心のはかなさに終に狂乱し何國ともなくさまよひめぐり当地にいたりけるが誘せの…の

狂人の
こゝろは往
風の花を
さそふが
ごとし風
定まれバ
花も収て
静之櫻児が
むかし謠ハ
よく其心
を得たる
狂女落花に
酔て櫻児を
得る図

堂岸花爛漫として藍水に浮べるさまを見て此水中にこそ我子はあへ
けしめりと流るゝ櫻花をむすびあげ涙つゝみも此物狂しきさまなりける
を里人等あやしみけれどもかくしてこれを宥め其よしを問へば志か
くと云ふ實に如ひし里人等も哀みあへりされば彼物狂女を伴ひ
神宮寺にいたり住僧にかく難じしに頓て櫻子を出し逢せしかば
まづふかきさる我子にてありければあまりの悦しさに狂氣は忽ち本に復し
絶て久しき母子の對面ともいふも淺からぬ事なれば喜びあへる理りなり
住僧これより慈悲深き人なれば直さま櫻子に暇をとらせ母子伴ひて
筑紫へこそは帰されけりこれよりして此川の名をはながれしなりとかや

長嶋喜八　東流　日國日郡与沢村にあり

先祖は平田与八郎とて代々當村の農民なりしが或時妻女難
産にて甚危急なりしかば巫醫方を盡せども殘る方なしと云ふ
夫は其體を見て決に死期せまり來て苦悩いはん方なく悶呼
が程てもこの上は外の見る目も物かは只しくせめて絶の際をか
助んと貴僧高僧を求めるに頼りなりといへども元來當世

其人なにがしく況や邊鄙の片田舎なればこれをいへんともせざる故か彼産婦はますます苦しみに堪かね種々の悪相をあらはし空を掴み地をうち七顛八倒して終に眼を見ひらき歯をかみて息絶し其ありさまこそ人愛相を失ひ恐ざるものはなかりりかくてあるべきならねば形のごとく葬送を営み村の傍に亡骸を葬りて一族ども皆々宿所へ帰りけるがされば生前の善根のなく縁縄一念の迷心によりて穢土の羈縁にきざなふや其夜より彼塚に陰のごとく姿を顕し啼叫ものありて其聲を聞ものは心魂を冷し恐怖与八郎が妻女こそ迷魂となりて人をとがむらんとて夜に入ば誰一人戸外へ出る者もなくこぞりて嗟嘆しければ与八郎これを深く悲み種々に佛事作善をなして亡婦の菩提を弔ふといへどもなほ幽魂啼泣の

長嶋喜八郎が宅
佛殿

行路難
とも
いふべし

与八郎が妻
死して幽冤

御経塚に経石を拾ふ図
経塚の
桜樹ハ
年毎に
花の

これや
聖人
の法
徳
の
末代
至りても
なるべし

の叡山にしては迚も止るまじきぞ是非もなし實に此頃高祖
聖人當國廉嶋へ御化導のため往返しましますこの与沢村を
通らせ給ひけるが与八郎兼て聖人の大徳を聞及びしゆゑかれむ
やがて聖人の御袖にとりつき事共よしを懺悔し大慈大悲
をたれ給へと懇に願ひける聖人始終を聞しめしいと不便がくお
ぼしめされかゝるものをこそ済度せずんば我多年の功徳も無乃
泡となりぬ如来の悲願もむなしかるべしと直に葬所に至り給ひ
多くの小石を集めさせ三部妙経を一石にあるひは二字三字づゝ
書写し彼塚に納め念比に念仏なし給ひ其まゝ廉嶋へこそ
赴き給ふ然るに与八郎其夜夢に金色荘厳の菩薩枕上
に現じて　我はこれ汝が亡妻なり愛執の妄念に引され惑溺
の迷路にくるしみたるを權者の利益を蒙り忽ち苦域を免れ

て天堂に往生をとぐる事を得たりこれひとへに大悲聖人の厚恩
にて報じても報じ盡されど謝をとも謝しがたき所なり
残害をなして殊に現じて苦患ゆるとぞ見へく處さらぬ与八
郎奇異のおもひをなし直さま葬所に到りて何かに更に幽魂
の形もなく人は啼哭の聲も聞へざれば始めて聖人微妙の利生
を感じ信心肝膽に銘じ隨喜の涙せきあへばよく康濟へ
臨で聖人に謁し奉り廣大無邊の恩德を謝しありし
ことども具に物がたりし此よりは何卒夫妻の周よりかく降臨
ま宛は茅舎に入御なりせ給ひ大悲の教化をたれ給へと涙と
共に願ひけるに聖人与八郎が誠心なるを感じ給ひ即ち
是を許容ありしかば与八郎天に仰ぎ地に伏て大に歓び
手のまひ足のふむ所もしらず馳帰り聖人入來の設をなして

待ける程に於て高祖御入ありて其夜は与八郎が家に宿し
給ひ終夜御勧化ありしかば与八郎は具に他力本願の名号
を受得し聞法踊躍に入て実に難有き信心無二の優婆
塞となりにけるかくてさまぐに聖人を饗応けるが聖
人も渠が信心浅からざるを御喜悦のあまり携へ給ふ所の
三ぶくの御画讃を与八郎に授与し給ひ翌朝別れを告
て出立給へば与八郎御跡の慕しく赤飯をもりして是を持参
し送り奉り中根が原といふ所にて聖人にもとめ参らせ献
に取急ぎしまし箸を忘れしかばいかゞはせんと傍を見るに葦
一むら生ける即これを切てよく清めまゐらせけるが聖
人渠が心づくしなるをめで給ひ心よくこれをきこしめし彼箸
を地にさし給ひてけり我真宗遐代に盛んならば此箸に根

芽をまれ出しと祝し宣ひしに不思議なるかな彼箸次第に芽を出し今に茂りまれとかや　株一葉にて末両條にまかれ箸を別折たるがごとし聖人是を御箸の芽と云

かくて与八郎ハ終に聖人に別れ奉り自つくづくと思ひ云妻の悪念ハ却て是菩提の種となり我らごときの浅ましき輪まで雖而御教化を蒙り弥陀の本願に遇ふ事何の歓びか是に如んさいへしが此喜ハ子孫につたへて忘るべからずとて即名を喜八と改め報恩の称名怠るときなく田園に念佛はじめるとかや　今にまかし喜八をもて通称とどうるハこのゆゑんとぞ

○彼三幅對の御画讃ハ中尊阿弥陀如来三方正面にして光明の中に十二光佛立しくて其のつく光明遍照あり　尼菩薩大師　にありて三尊仏を出し諸人利の図なり上のまし紙敷に若我成佛十方衆生の讃文を　右　聖徳太子橘の林殿にて勝鬘經御講讃の図なり隆に婦子阿佐太子恵慈法師日羅上人余都て七躰　右此三幅ハ聖人御自畫御自讃なりしく世に雖有ぬ二間に方に別堂を建ら安置し且喜八が奇特によりて國守より除田を賜ひ毎年會式の法事を怠るとなし

末族に在家の身として六百年の星霜を歴て今に家名相續し代々不退轉の信心厚く聖人の御遺物を相傳ふる事末族に同じ其家運ともに盛なりし

○御經塚は喜八が宅より二丁程南にあり即与八郎が妻の墳なり是女人成佛の墳なりとぞ

○中根が原又赤根が原ともいふ村より十丁ばかり登方にあり石の傍に十間四方程が間は一面に葦茂りて一莖ごとに二本づつ生ぜり御葬の芦といふ事跡は前に見えたり

# 鹿島大神宮

常陸國鹿島郡に鎮座ましますと延喜式神名帳に名神大月次新嘗

當社祭る所の御神一座武甕槌尊本地は觀音薩埵にて既に和光の跡を垂給ひ神代のむかし經津主神とともに豊葦原の中津國を治め給ふ爾より以來帥の靈の神劔を以て凶害を拂ひ魔障を伏し我日本を鎮護ましませしより萬民其恩のいたらざるを神風を仰がざるものなし然るに不運の星霜を經て嘉禄二年十月中

向高祖親鸞聖人法臈五十八歳の御時当国稲田の御坊より当社へ参
詣ましくるに内證冷然たる神慮より聖人を深く帰依し給ひ即ち
數千歳のむかしにかへりて衣冠いとうるはしき翁と現じ日々夜々に稲
田の禅室にあゆみを運びて聖人の御教化を聴聞なし給ひしに始の程
は門徒の僧侶も何心なく思ひゐせしが目を経るに随ひ衆人是を怪
しみかく老若貴賎打まじりて群集する中に一際目立て本蘭地の直
衣に烏帽子をかけたる老人にて其凡人とは見え給はいか様奇特の人にぞおはす
らん下向の砌は跡して尋ねばやと度々これを伺ひしかど門外へ出給ふや
いなや忽御姿を見失ひ留て帰り給ふ事を知る者なかれば弥是を疑ひ聖人
にかくと告なりしに聖人はとくより彼翁の神通と知ろしめされたれども未ださ
と門侶へは語り給はざる事もあるべしなど宣ひて打ゑみ給ひけるに或時彼翁
聖人に謁し給ひ願くは我に利刀を授け給ひ法名を賜りて御門下に列

鹿嶋(かしま)の神社(じんじや)
本社
別当

信親神告に依て錦帳を献じ

給ひしは廣大の恩徳なりけん渇仰浅からざりしかば聖人御気色最快然
として其まゝ免をゆるし給ひ法名を信海と書して与へ給へば翁は一家繁栄満足
の歓びに堪えねば聖人に九拝し下向なしけるが其翌日則剃髪の儀相を備へて
来詣し厚く知恩報徳の礼をのべられしかば聖人も値遇の浅からざるを
愛めで給ひ自ら十字の名号を御染筆あり其脇へ信海房と御對座の
御影とを添へて加へ給ひ後の世のためにとて御坊にこそいとゞ免し給ふ
今稲田西念寺に傳来する所の什物これなり為極
孤峯繁雲寺にある所の遺座の御影も此時の御筆也と云
然るに始め聖人稲田に於ひて御教化
の砌境内の井水何とも濁りありて常にこれを苦しみ給ひしにこの日
信海御房がしかりし所は我も又宿願開発の歓びに我居所に七ツ井こそ
清冷の水あり其内一井を聖人に寄附しまいらせんと誓ひ給ひしに不
思議や其夜忽ち御坊の前庭に清泉涌出せり　今稲田御坊に廉清加井といふ井あり即是なり
聖人曾てまのあたり尊像を自彫刻なし給ひ御坊に安置せられしに信海

房戸帳を捧献ありて聖人の恩徳に報じ給ふ（今稲田御坊の宝物に然る戸帳初是）是此御神は
扶桑鎮護の霊神なれば聖人の徳輝を見て和光の方便を仰ぎ給ふが
故なるべし扨も其後寛喜元年吉神宮の神官尾張権守信親（俗傳梅田の図如来）
寺の衆に託宣して曰く我此は稲田に住る親鸞聖人こそ達徳の知識
を帰依し直に御弟子となり法名をさへ授り不顧瑞光のうさとしさる
戸帳一掛及び清冷の井水を寄附せり依てやうに我壇上の錦帳を
おして稲田の御坊へ献ずべし若是を謐せんとならば七ツ井の其一ツは既に
先達て涸渇し彼地に清泉涌出せり努て疑ふなかれと御夢覚るに
目覚させ給ふに信親大に驚き即時に神殿にいたりてこれを伺ふに御
戸帳の内に厳然として法名釋信海と書る切紙あり其上井水の一ツ
若明信親殆ど奇異の思ひをなしかかれ霊験あるうへは何の疑ひかあるべし
と未だ渇しませざるに忽ち聖人へとなる信し直に横御宝の錦帳と稲田の御

坊へ参じ逐一にありし事どもを物語りし同じく御弟子と成りしかば
法名を順信と号し鳥栖無量寿寺の寺務とぞ成りけり（上来は西念寺無量寿寺二ヶの外諸像を含擬して記し）

○廣徳寺は真言宗にて当社別所御読経所なり当寺に聖人御真筆
太神の霊像あり赤童子の御影よりも御裏書も御同筆なり又太神の
神号を聖人の書せる像あり此二神王の御影と称して色々とかへらる神宮信親が
不動よりも少しく太神聖人御対座の御畫像の石なりといふ聖人御真筆の信
海房の霊像は此餘西念寺無量寿寺森岡の寺柳寺等にもあり

○七ツ井前に流れ当地より本の名は○宮下○かの○志ゐ○さや○さや○ふるとし○此上は無之
本社より寅卯の方二三丁傍にあり

○要石本社より辰巳の方二三丁傍にあり 相傳へ当社大神の御掛石にて此石の
くつ腐るぎりは日の本を守らんと宣ふとかや

○当社年中御神事をくべて七十五度とかや中より常陸帯の御神事は別当
神宮寺の所務なり○俵投掛て云常陸鹿島の明神の祭りの日女のけさ
うへの男の名をさも布の帯に書つけて神前に置なりとぞ又男のも
名書かはその帯を神主かへるなり女さもこその男かしれやうそ志るしくなること
云そのへ帯をひそかに結びあはせ此を帯まてよめる歌

東路のミちのはてなるひたち帯のかごとばかりもあはんとぞ思ふ

○世に旅だちをするにかしまだちといふ事ハ当社の神ハ秋津洲に根元の御神なれバ八百万の神にも先当社にお詣り路ひらく後諸国へハうつり給ふとや此神の御歌とて

宮居する所々の神もきゝかしまだちせしひとをまもる

とありこれよりしてかくハ云伝へたり

○高間が原ハ山をひの東の方にあり又大和にも同名あり

○とべく此うしろを鹿島の浦といふ又うしろみうしハ鹿島より一里餘を隔てあり良玉集によみ人しらず

鹿島なれバかしまの浦にたち出て浪のをるをやあまといふらん

## 御堂宝満寺　西流内陣　下総国銚子の湊にあり

宝満寺ハ鹿島明神より息栖明神へ出それよりひたち原といふ所をすぎとべて行程八里にして銚子浦にいたる香取明神へハ宝満寺より又八里ほど此間隊路ハ大かた砂礫にて甚難所なりこれによりて鹿島大船津より船とやとふて行べし宝満寺及び香取明神の事委しくハ下総国の部に委く出たり

## 筒井極楽寺　真言宗　常州鹿島郡筒井村にあり

当寺は徃昔宗祖聖人御化益の地なりといふ○什物聖人御真蹟の光明本并阿弥陀如来の画像 光明の中に六字名号及び御法名をそのせられたり 其外聖人の御木像 これは来迎井浄明の像といふ ○珠数房の梅 寺中にあり聖人手自ら植ゑ給ふといふ

○息栖明神 麻績より二里当社は聖人曽て二百ケ日の間来錫ありし給ひし御旧跡にて息栖より十八丁筒井村にある人家に彼息栖に西にあたりて浄土宗の一院あり徃昔も祖此地にて御勧化ましましませし阿弥陀仏を供じ給ひしとて小松を植ゑ置き給ひしが真宗世に盛んなるに随ひ次第にはびこりて今にては又六丁四方の林となれり枝ごとも本立は何れも三尺又だありたしじめうんさ浄御時の倒にて也しもるく立のびざることぞふしぎなれ何れも皆二葉三葉に心を生じ見るのなるの義斗也しさるにより門くは宗中一宗の法華にほとえて此松の心を用ゆといふ又此松林中に一基の経塚といふものあり聖人書写し給ふ所の経を埋むところなりといふ

○巡路は此所より又麻績へ戻るがよし

光明山無量寿寺 西流内陣 同国同郡 鳥栖にあり

とりのす
鳥栖
むりやうじゆじ
無量寿寺
本堂

刑部が亡妻成仏して衆人の夢に入図

二十四輩第三番聖人の嫡弟鹿嶋順信法師 俗姓鹿嶋明神の裔なり

桐纏の芳趾にして曾て高祖三ケ年の間寄寓なし給ふ所

の霊場なり○本堂阿弥陀如来の尊像は聖人の御自作之御

長二尺三寸

当寺の濫觴を尋るに往昔大同年中の開闢にして無量寿

寺と号し法相の宗風なる梵刹なりしが其後幾百回の

星霜を経て下根の僧侶次第に持律の教綱を紛ひ希に

く寺院も稍朽傾に及びけるに文治の頃当国の刺史村田刑部

といへる士志願のことあり遺構によりて再び営築し仏心宗

の道場となせり然るに刑部が妻女難産のおりしに大に悩絶し

死しくなりし程に即当寺に葬りけるが豈はからんや五障

の罪業深くして纏綿顛倒の一念忽ち億劫の迷鬼と現じ

夜なく帰り叫ぶ聲きりなり村民これを見る者大に恐をな
無量寺にこそ産女にて化生ありとつたへぬ誰一人
詣る人もなく後には住僧日宿までも恐をなしてまどひ逃
さりたれば終に荒廃の寺院となれり村田刑部是
を大に悲しみ追福作善をきまじくなりしかども更に止む
ことなく案じ煩ひたる折しも 建久二年の秋 宗祖聖人当国稲
田の御坊より鹿島へ社参し給ふ事数多にて諸人その徳
行を仰ぎ随ふ化益を蒙る者おほかりしによりて相共に村田
にもとめ聖人を屈請し何卒済度の化益をもつて幽魂
を一時に救じ給はゞ一境の悦び廣大無辺の恩徳ならん
と祈願きたるに聖人弘法に御暇なしといへども十方世界
攝取不捨の御誓に彼一人洩んやいと便なくおぼしめし

即玉趾をめぐらされ高くの小石に三部の金梵二万三八字
六百余字を悉くうつし書写し給ひ彼塚に埋蔵し
報謝の称名いと懇に唱へ給ひしかば権者の奇特著明
く其夜よりして冥鬼の苦愁寂として止になりしのみな
らん刑部をはじめ村民等彼妻女の生前の姿其まゝう
一片の紫雲に駕し西方に飛さりぬこゝに一同に是を夢見なる
ぞ各不思議のおもひをなし中にも刑部は宛然たる霊験に
信心肝に銘じ随喜の涙をながしつゝありけるが幸当時無
住ければ何とぞ聖人を彼寺にとゞめ奉り御教化をも聴受
せんと村民等ともに小聖人の御袖にとりすがり侘ぬる小聖
人つく〲おぼしめさう有縁の衆生は化を施し安く且康濃へ
の往返やゝ程を久しければ我将く此宇院に寓すべしと即旧名

富田
無量寿寺
青柳村
墓所
太子堂
本堂

又寿の字を加へ無量寿寺と号し竟に三ケ年の間当院に御勧化ましましけるとなん 当寺三年の御寄寓ハ稲田御滝留十ケ年の内なりとぞ 此時の御歌に

弥陀たのむこゝろをおこせよ人のかゝる姿を見るに付ても

其後康治順信房へ御附属ありてより順信順性順慶次第に当寺を相続し給へり 太谷遺跡録には順信房ハ信親が一子殊に次郎信広父の命によりて聖人の御弟子となれり 順信房性光といひしハ是なり聖人彼をして西海を化しめ給ふ今の摂州島下郡溝咋能佛性寺ハ其遺跡也と云ふ猶詳して後案を待つ

○宝物 康治大明神法体の木像 聖人御作 釈信海御法名 康治明神の法名是聖人御筆 連坐御影 聖人明神對座の御真筆 御経塚 村田刑部が亡妻の塚也又女人成佛の塚とも

上に図とする石ハ聖人手ずから書写の御経石なり 摂州大坂上福嶋明浄寺の住釈恵教の小生為て御旧跡巡拝せられし折から彼経塚に於て拾ひ得しとてこれを施せらる

## 光明山無量寿寺 東派 同国同郡富田村にあり

當寺は鳥栖無量寿寺よりの分寺にして二十四輩第三番順信房の開基なり 順信房の俗は鹿島明神 及びある栖の宰下にあり ○什物 高祖聖人御眞筆の光明本并 [illegible]の名号 眼は信海房の筆なり 親鸞と畫讃へ

巌船山願入寺 東流 同國宮田巌船にあり

當院は高祖親鸞聖人の御孫如信大和尚の遺跡にして當國第一の大佛場なり代々御連枝御住職ありて寺格最称る

○本堂十五間四面本尊阿弥陀佛 春日の作 [illegible] 並さ 當時國君の御他の如信上人の本像を安置し坊舎六ヶ寺あり

傳ていふ如信上人曾て奥州大綱の東山に居を占給ひしに 先御祖入寺の濫觴す 御勧化に随ひ若郡國を傾け徳行を仰ぐ輩遠近の隔なし實に彼禪室をさる事三十里 坂東より六丁 一里をなて 一要に何へ何て金澤といへる所は素若といへるものあり就中本願の有

巌船
願入寺
岩井町
中川渡し

其二
いそのはま

如信上人
往生を
遂る乃図

信受し知恩報徳の思ひ浅からざれば終に正安元年己亥の窮冬廿日あまりの頃信上人を己が草菴に屈請し昼夜聞法の化益を蒙り且ハ朝夕の給仕をぞなしけるに豈はからんや上人翌年の正月二日より御心地例ならざれば打伏給ひ偏に世の囂塵を拋却し長時の称名専らなりしが忽ち異香室中に薫じ音楽窓外に聞ゆる事二日二夜人の二根を穿ちて間断なしかくて上人同じ日正知正念にして称名の声とともに大往生を遂し給ふ御年六十二歳此に於ひて第一回第三回の御法事を京師にて執行ひ第十三回ハ正和元年に行ハせ給ふ又其翌年應長元年辛亥年冬の頃覚如上人御舊跡をたづねませ給ふの志ありしかば終に関山幾重の雪を凌ぎ江湖万里の氷をふみつつ遠くかの金澤の草庵に玉趾を寄らせ諸方の

門徒を催し寂前とともに追福の佛事を営み給ひそ造りして
に大綱の基趾に詣給ひ即遺教の後のために一座の梵筵
を設け給ふ徴に懇懃鄭重なりしとかや　以上最須敬重絵に載る所なり
中古彼大綱の民屋は同国白川郡竹貫と云る所へうつりしかば
大綱は即荒蕪の地となりて今は古宿と唱へ里俗又は信上人の
遺趾顕入寺は上人金澤へ移き給ふ後代々相續ありしに第
八世如慶師の時国中争乱の事ありて堂舎悉く兵火の為に
焼亡せしかば是非なく大綱を退き当国へ移りしが同十二世如正
師の時又は同国久慈郡久米村へ移りて後又十五世如高師の
の時におよんで延宝元年の比
当国の太守水戸君霊場の則にて衰微に及んぬるを傷み思しめし
喜捨の大功徳を施し給ひ即久米村より今の宮田村にうつし

寺院佛閣に至るまで聽しゆるし玉ひて再興あらせ給ひ京師より
御違背恵明院如晴僧正を請じて御住職となし給ひ寺領
三百石外に每年黄金二百両香華の資として御寄附あら
せ給ひしかば信上人の御法徳日の再び中するがごとく更に
本國に曜きたるは誠にありがたき次第なり 以上遂蹟録をもつて記と

○霊寶には 宗祖聖人御自作離形の御影 聖人御添状 孫女如云へとあり
二十八輩牒 釋定如御筆之是は御本廟第三世覚如上人稲田御坊へ御下向のおり かゝる祖の御門弟二十八輩正流相承の人々を連署し給ひし記せ
奥に正應元壬申年正月 又日野釋寂如とあり

○如信上人の御廟は今高林内の金澤にありこれに
國君より坊舎を営築し給ひ飯田二十石を寄せ給ふとや

○当國の名産浮亀は此道の海中にて獲し諸庭に用ひたるにきたる
ありとなん

衆宝山浄光寺 西派 同國那珂郡田中鞍山にあり

当山は二十四輩第二十一番吉田唯佛房の開基抑唯佛房當國茨城郡吉田枝川に一宇を造立ありて吉田御坊と申しが中古当境に移せり然るに開基告夢により更に佛閣を山上へ引うつすと遺跡は即山の麓にあり山下の惣門は飛騨内匠が造作せる所なりといふ　世に飛騨内匠をもて一人の名と心得られたるは誤りなり飛騨は国の名にして其土人内匠に妙なるが故にこれを賞していふなり尚万歳は大和をもて称し舞姫は河内の名を賞す此の類なり　○本堂十間四面本尊阿弥陀如来　恵心僧都の作佐竹義重の室これを安置すといふ　宗祖聖人の真影　御自作にして自照鸞鏡無垢の御影といふ　僧舎四區あり　○什宝御絵傳四巻　日本三部の其一なり伝覚如上人詞浄賀法眼之

開基唯佛房系図　以上三品共修復は国君よりの御寄附なりとぞ

猶原山上宮寺　西派　同国那珂郡本米崎にあり

高祖聖人上足の御弟子二十四輩第十九番猶原明法房の

衆宝山（しゆほうさん）
浄光寺（じやうくわうじ）
本堂
墓所

寺中

猶原山
上宮寺
本堂
阿弥陀堂
客所
楼門
茶所
鐘楼

小壺山
阿弥陀寺
墓所

本堂

開基なり［明法房の俗体の時板東山の寺中に出て當院に／於て遂に遷化ありしを後來今の地に移せり］○本堂十間四面本尊阿弥陀如来［聖人の御自作］僧坊二區あり○宝物　聖人御染筆十字名号［上に大経の文下に善導の釋文／左右一枚記誌文を写し給ふ］明法房の像［自作六十二歳の容貌なり］其外略之

小壺山阿弥陀寺　東流［同國同郡／額田にあり］

二十四輩第十四の班當る祖の神足那珂の定信法師の開基なり○本堂八間四面本尊阿弥陀佛［慈覚大師の御作］寺宝［二區］

定信房［俗姓いまだ詳ならず］これ弱年のむかし三井寺に入て聖道の難行を修学し圓頓一乘の理に深く兼て三密瑜伽の法を行ふ事一山其右に出る者なく衆俗其智徳に心服し係る程に定信自思ふらく我修得の妙法をもて衆機を化益するならバ誰か我道に背く者あらんやと即志を発し関東さし

てありしが宿習の因縁忽ちに発起し当国に於て聖人に邂逅しけるに於て聖道高上の法を説出し聖人を請じけんに聖人これを耳にも入給はず唯本願一実絶待不二の要門を立て末世愚癡無智の衆生には他念をまじへず一向一心に弥陀を信じまゐらせば次の生には仏果を得んこと疑ひなしと易往易行の法を示さんこそ一切経を説んよりも勝即得往生の名は唯他力の御法が外なかるべしと権者微妙の要文を授け給ひしかば定信膽に法我の角をおき随喜渇仰の思ひ深くして終に聖人の御門徒につらなり信心無二の御弟子となりけり

什宝　聖徳太子十二歳の尊像 聖人の御自作　法然上人の御親筆 六字十字の名号 共に聖人の御筆　小壺の仏舎利 定信房宝剣の地は那珂郡大山なり後数代を経て粟村の称号更に又今の新田へ移れり然るに彼粟村より当寺へ至りしとぞ祐堂の基址を経営し地を穿ちたるに地中より輝々としてあやしきものありてあやしくてこれをきりて給ひてあやしくいよいよ奇異の思ひをなし甚者に見させけるに霊芽なるものぶかいと珍敷なる水精の瓶に仏舎利ありて光明耀燿と照ましければ仏智感応の奇特なりと皆一同に称じて是をあげ終に山号を小壺山と改め永く当院の霊宝とせり

# 大門山枕石寺 東派 同国久慈郡佐竹の庄上川合村にあり

弐ハ龍上山大門院とも号す二十四輩第十五釈道圓坊の遺跡なり○本尊阿弥陀佛 伝教大師の御作

道圓法師ハ何江州蒲生郡日野の産にして俗姓ハ日野左近将監豊秀が後胤日野左衛門尉頼秋といへる士なり当時不遇にして世をあぢきなく思ふ心より自と人の交りも疎く終に流浪して当国久慈郡大門(大門とは凡三里斗が間の惣名也)といふ地に遁塞してありけるが比ハ建保二年の秋聖人当国御教化のおりふし一日此大門を経廻し給ふに思ひの外に日暮て前路程遠くれバ即左衛門が家に立寄宿りを需め給ひしに左衛門性質もとたけき男にて御覧のごとく我が住所ハ貧家なれバいかでか旅人を宿をかすべきとて帰り給へと悪想

門
寺中
川合村

大門山（だいもんさん）枕石寺（ちんせきじ）

久慈川

日野輝秋霊告によつて聖人に帰服する図

かくやうなりければ外に求むべき家居もなかりければ聖人強てこれを免せ給ひしかば虎渓門外の外に暖遁しこれらごく赤足法師かなさらにはさらねまでに先我棒を受べしと喚合杖を引立て既にこれを打んとす聖人此形勢を見給ふより矢庭に外面に出給ひしが月日はやとく暮て行先とても見へまうねば途方にくれて立せ給ひ茅が軒端に露をふせぎ石をむ假の枕とし夜寒をしのびて臥給ふに相随ふ二三の御弟子此御姿を見奉るも御いたはしさ云ん方なく涙とともに介抱となし参らせけるに聖人少しも憂給ふけしきなく夫弥陀因位の御修行に肉の山を築血の海をなせし無数恒寒の苦悩を凌ぎ兆載永劫身命を惜み給はざりさつ無量の徳行を積植し給ふ御艱難をおもひめぐらせば今此軒端の仮寝は物の数かは元より樹下石上は我釈氏の教へなれば何しにこまらぬ

厭んや光ヰ付ても唯仰ぐべきハ弥陀の御恩徳なれバ弥勒附属の称名を
鈔ぶべしと念仏の御教えいと殊勝ヰ既ヰ其夜も更ヰなり扨も元清門も
若に聖人を追出しまつり弥陀に入て休らひけるが子の一ツぞうりと忍びき
此一人の化僧枕上ヰ立ていふ元清門你元まの何さましき若に汝が
門ヰ来迎ましませし御僧こそ則西方の教主覚王阿弥陀如来にておは
しましけるが誇るや百福荘厳のある像を衆生済度のためにあらはれ法師
の姿と化へ結縁のためヰ塵ヰまじはり給ふ事すらさもありけるく云聖言
雖有懸気ヰかれねるるの愚さよされども汝が宿執善根の所ヰよりねまれば
本ヰ化石へうつり給ひし衫端をむりに宿として石ヰ枕しみ給へバとうく
屈請中ふしせる恭敬るるれバ我ハこれ汝が多年頂礼せる若の救
世菩薩之と宣ふと見えて夢さめぬ元清門大ヰ驚き即示現ヰ随ひ密
ヰ戸外を伺ふヰ恰も日光の再ひてりせるがごとく光明倍とうてやし

其明きる白昼のごとし尼濤門心中に弥恐れ聖人の御側ちかく伺ひ
なかふよく熟睡し給ふ御息の下よりこそ其光赫然としていつゝあま
されば尼濤門は忽ち大地に身を抛せんぴを悔て泣まびつゝ我家に請じ
奉らせ観音大士の御霊夢を物語り改悔の心おこりしかば聖人大に
喜ばせ給ひ一樹の蔭一河の流れ皆これ他生の縁なれば今更心をくる
なかれと即絶頂隨類隨機の大悲をたれ機見機應の善巧をなして他
力教の奥旨凡夫直入の教法をいと念頃に示し給ひければ尼濤門
立所に信心発得し速に御弟子の列に従んことを願ひける
に聖人これを許して即釈道圓と法名を授け給ひけりし
より道圓房弥本願を信じ聖人を尊崇し奉りける他に
俗なり寝にも寝ひなく一宇を造立し更に聖人を請し奉り
されば心よく入御ならせ給ひ法聞のまゝこまやかなり道圓房に

くしるゆう聖人御化益御辛労の恩徳須弥もおろかとの
らそらば蒼海も浅きを譲まり是といへるぞ末世の衆生みな
まさらん然らば物に名つけて其意を後来に残れる如くと
即聖人の頼ひまう枕石とんて終に寺号とはなしにけれ
となん　後年いささかゆゑんみてく寺を今の地に　うつせり枕石村光清門が古跡は奥に出せれ　○宝物　枕石　上にあり　ゆゑんなり　高祖

御首入御影　御伝絵に見え後入定禅法橋に聖人の真影を写しめらる時定禅夢想に聖人当光寺本願の御坊に投宿しまれしと感得し御首斗を写しまゐらしと頂戴ありしは入西房とかやこれ即道円房のことなり聖人既に御帰洛の後道円房入西に来之く常随給仕せられしとえるがあ人に当寺に聖人御首の御影を授けられし又高田専修寺にも同様の御影あり何これ定禅の筆法なるや未其真偽を不知

開基入西房道円の画像筆也其外略す　これとつ予す

鳥喰山西光寺　東流　同国同郡谷河原にあり

無量光院と号し高祖聖人嫡弟二十四輩第二十四だん　同当国那珂郡鳥喰に就立ありて数代相続連綿　うりしが寛文元年丑年当所に再興せり

鳥喰唯円法師の芳蹟なり

本尊阿弥陀如来　御基菩薩の御作

鳥号真像の御影　聖人御真筆十字名号　其外に聖人四十四歳の御

鳥喰山
西光寺

本堂

墓所

門

影を写し給ふ　其外什宝器之

久米願入寺　東派　同国多河郡久米村にあり

当寺は高祖聖人御孫如信上人嘗て奥州大網に精舎を営築ましく弘法ありせ給ひしより第十二世如正に至りて当所へ遷移せし時の遺跡なり其後十五世如高の代府君喜捨の大功徳を典し給ひ当院を宮田巌船に移し給ひ諸堂巍々たる精舎とはなりたり

富谷山覚念寺　東派　同国同郡金沢村にあり

二十四輩第二十三富谷唯信法師の開基なり

唯信房と申は旧当国保内小瀬富谷の住人にて俗姓を富谷次郎信勝と云ふ当年高祖聖人康奥郡御化益の砌信勝聞法随喜して終に御弟子となり金剛無二の信者となり

久米願入寺
本堂
臺所
門

に至り此に於ひて故郷畑谷に一宇を起立し專ら弘法せしが

後世此地に再興せりと云

○石州濱田永勝寺も唯信房の遺跡なりとぞ傳に云御房畠谷郷に於ひて一宇を興立ありし後總州及び泉州へ轉移せしが終に郷里に歸りて石州にうつりしとぞ

大門枕石寺　淨土宗　同國久慈郡大門村にあり

河合枕石寺の舊地なり當寺は日野左衛門入道道圓房の墓あり

始めは同所枕石村の東なる山際に松のむら立る石塔婆ありしが其中に雜蓋してありしが中古祖師の百回御忌の節今の所へ移すと云

枕石村　同國同郡大門の内なり

其の昔聖人石を枕とし左衛門を化度し給ひし舊地之跡にして終に此村の名とせりと云

此村ちかき道におこしの坂あり其坂のかかりの口はむかし日野左衛門が宅地の跡なりとぞ

王跡山青蓮寺　西派　同國同郡東蓮寺村にあり

當院は二十四輩第八番稲館證性法師化益の遺跡なり

證性房の傳は陸奥

王跡山
青蓮寺
西行法師
本堂
墓所

青龍寺村
惣門

本堂

玉川山
常弘寺

石沢村

鎌倉蓮生寺の條下にあり

○本尊弥陀如来 春日の作

往昔何某の親王とかやし止ごとなき御方此地に隠遁ましましける其跡に一宇を建立して王跡山来迎寺と号せしと

りや我が宗祖聖人当国御教化の折から此寺の頽廃せるをいたく歎き給ひ即浄性房に命じ是を修補せしめ給ひしかば此に拠ひて浄性房当寺に住持し号を来迎寺と改め弘法寺らはして終に真宗の仏閣となりけり

玉川山常弘寺 西派 日国那珂郡石沢村にあり

宝寿山といふ堂も号せり当院は高祖上人の弟子村田慈善房の開基也慈善法師は二十四輩の内第二十番に配当と

或伝に昭の村田村に建立ありしを後年にいたく石沢といふ所にうつし大に栄なり村田石沢は村城お接せりもし此常弘寺の境地村田に属せりしと今は石沢より是を分せるなり慈善房造立よりこのかた既に六百年の星霜を経るといへども基趾は更に移らず流転せず法嗣世々相続して未血脈を改ざるの霊場也 ○本尊阿弥

陀如来 春日の作 其外霊宝ハ聖徳太子の像 御自作 開基慈善房像 自作 等なり

明法房墓 石沢より井口を経て東なる小川をわたり東理村の谷にあり

此所ハ明法房いまだ弁円といひし修験者たりし時の宅地なりとぞ今尚古塔石墻のごとき跡あり碑面に猶原明法房墓と記せり○右墓より又二丁ばかり北に小き庵に法専寺といふあり当院の末なれ上宮太子の御作にして明法房念持仏之弥陀当寺の開基稲原上宮寺の三世教正作の明法房の像を安置す

信照山寿命寺 西派 同国那珂郡大嶋にあり

蓮華基臺院と号ス二十四輩第十六番聖人の神足完澤入信法師の開基なり○本尊阿弥陀仏 春日の作 入信の像 自作 上宮太子の尊像 御自作 等を安置せり

大島
壽命寺

慈海に浴せし我れこれ西方の使なればゆめ〳〵疑ふ事なかれ
と告給ひ直に天邉に飛さり給ふと見えて夢さめぬ 時に建保七年
入信宴に打ひて大に歓び我年来の素願満足の時至れり
と急ぎ聖人の禅房に馳霊告のまゝに物語りし伏て教示
を願ひしかば聖人いと快くめでさせ給ひ即教化し給ふ様
は他力弘願の称名とは唯一筋に後世を助らんるにまかれ
不謂にあらバ助け給ふ事は佛智の不可思議なれば弥陀の
本願末代無智の衆生をもらさず助け救んとある御ちかひにあま
らせ露疑ふ心なく諸の雑行雑修をすてゝ御助け一定
往生は治定と一向一心に信じまゐらする外に別の子細なしかく
信じまゐらせし上はそれ報謝の称名懈怠なく寝ても寤ても
唱ふべし唱ふるの称名なれば幾万遍唱ふるも佛恩報謝の

爲と心得なば是ぞ誠に他力本願の念佛なりといと念ごろに
御勧化ありせ給ひしかば入信忽ち其意を發得し渉涙歓喜
斜ならざりしのあるは浅ましの凡夫心や是まで自力をたのみつるなりの
拙さよかく竊大善知識に値遇なしまつりしは今度の一大事すれ
遂まじきにありつり難なやとて聖人を三拜し御弟子の列に具
らんなりを願ひしかば聖人も其志の厚きに免じ終に御弟子給
ましませし遂に入信弥信心堅固にして日夜朝暮のまうちなく
佛恩報謝の称名をこそ喜びれたり時に貞應元年春二月
聖人の命によりて當寺を開闢し専ら他力本願の奥旨を
弘道ありしが建長三年三月二十五日不思議の大往生をぞ
遂られたり 入信始めは宍沢に住し次に野口に移轉し終に大高に不退轉の基址を開くとなん ○寶物六字名号畫
像の弥陀 皇太子の肖像共に聖人の真筆なり

本堂
太子堂
門

入信發菩提心の因縁をいふに俗姓は清和源氏の苗裔義景にて嫡孫四郎隆義の息佐竹冠者秀義の長男也其身武門に生れながら朝暮人間の不定を觀じ大に世の名利を厭ひ隠遁のおもひ切にして宍澤といへる僻地に菴居をむすひ深く菩提の心を欣求し自力の念佛專らにして西方の往生をぞ期しけり然る處に宿善發起の時いたりて或夜不思議の靈夢あり其様凡常ならざる法衣の人忽然として來現し汝西方の往生を求る事多年にして稱名念佛怠慢なしといへども自力の功德いたづらに更に億万劫を積とも其甲斐あるべからず去ながら汝が信心餘念なきをめで今其旨趣をさとさん先急ぎ小島の里に至て親鸞聖人に謁したてまつり弥陀の密教本願他力の御勸化を蒙り速に如来の

○寿命寺は中津川のほとりにて舩場あり此所より水戸の湊まで二十里
ゑうりありしかれども此辺御旧跡多かれば舟を雇ひ至らば足弱とても
あれば悔とも及ばじ

額光山善徳寺　西流　同州同郡鷲子村にあり

當寺は二十四輩第十二の正当久慈善念房の遺跡にして水戸
坂戸善住寺同事なり　○本尊安阿弥の作　高祖聖人御
真筆画像の弥陀十字名号等を安置せり

毘沙幢山照願寺　東流　右同所にあり

開基は二十四輩第十七番奥郡念信大徳とぞ聞えし
○本堂九間四面本尊弥陀仏　春日作
念信房旧俗の苗姓は源氏にして清和天皇四世の孫多田満仲
四代の後胤伊豫守頼義の三男新羅三郎義光の二男光長
より三葉頼氏までは四男高沢伊賀守氏信これなり代々弓箭

墓所
本堂

鶏の子(とりのこ)
善徳寺(ぜんとくじ)

毘沙幢山
照願寺
本堂
太子堂

金沢（かなざは）
願入寺（がんにうじ）
本堂
墓所
親鸞大師
山門

の家なるが就中氏信の性禀驍勇にして膂力人に絶し智謀兼備の武人なりしに宿縁のいたせるにや当国稲田の庵室に於て聖人に謁し奉り専修専念の法音を聴聞し忽ち他力本願の慈海に帰入し浄土の真門を発得にし是に依て貞応元壬午年永く火宅の門を出て遠く菩提の室に入り法名念信と賜り御弟子の列に加りしかば即毘沙幢村に一宇を創立し照願寺と号し専ら他力念仏の法流を遠近に弘通せしが終に寛元三乙巳年三月十六日寂を示しけると云　寺號に云念信房未俗たりし時ハ当寺の上方なる沢山に居城してありしが聖人の御弟子となり毘沙幢村に一宇を営築せしより是に遷りて猶わ此址を以て其子に伊賀守なる沢の城とお続してありしが是に老年に及びて其ハ子に居城を譲りとつかり剃髪して照願寺に隠居にとべてかくのごとくしたるが三代信光の時にるに至てなる沢の城郭を毀ちて佛場となし毘沙幢村より寺院を引て合立し是より今に退転せずといふ

○什宝　二河白道の文　聖人御筆真に六字名号　御自名紗年八十歳とあり　御絵傳四巻　康楽寺法眼の画勝法輪云

政右衛門忠公の御傳文外記奥書ともに存如上人七十又歳の御筆に上三尺とも

國君より荘厳の御寄附ありせらるゝと其結構云ばんかたなし

○鶴の子山に對して山王權現を祭るところの山あり絶頂より四方を眺むに眼界の山川目下に甚落して其風景ことに奇絶なり茶店などありて甚自然なり此所即常陸下野の國境なり

鹿崎山慈願寺 東流 下野國上那須郡烏山栗野にあり

當寺及び栗野山慈願寺ともに縁起の巡路なれば順を立てまゝ爰に擧るのみ縁起圖説にはまでは國分の例を立て下野國へ入とあるべし

栗野山慈願寺 西流 同州同郡馬頭武部郷にあり

太子堂願入寺 東流 常陸國久慈郡上金澤にあり

當院は如信上人の御廟所なり 是即御門弟乗善法師の遺跡にして上人御入寂の地之考くは岩船願入寺に詳し

岩船願入寺の御持高役寺二區あり ○什物 上宮太子御自作の尊像 圖略 御再點六 如信上人の御影 下野宰相御筆 等なり

○銀杏の大樹 上人御墓の標にあり來由未詳

親鸞聖人御舊蹟 二十四輩巡拜圖會後編卷之三終

二十四輩順拜圖會
後篇
陸奥 出羽 四
下野

四二三
一
一〇

# 親鸞聖人御舊跡二十四輩順拜圖會後篇巻之四

## 目録

○下野之部

那須野

粟野山慈願寺

神橋

稲木山観専寺

花見岡親鸞池

明星霊地を求る

殺生石

与市宗高の墓

高栄山法徳寺

藤九郎盛長墓

黒かみ山

華岳山安養寺

姫婦義烈して

後成佛の定来

宮村御舊蹟

以上

鹿崎山慈願寺

日光山　今宮八幡宮

右大将軍家の御廟

般若の瀧　霧降の瀧

うらみの瀧　かんまんが淵

室乃八嶋

高田専修寺

足利の学校

親鸞聖人御舊蹟二十四輩巡拜圖會後篇巻之四

河州專教寺 了貞 撰



## 陸奥國

昔ハ出羽をも兼て一ツの大國なりしを後わかちて二國とせらる按ずるに常陸ハ皇國の
正東にくひこみてとなりとする故に行ものとして常陸といひ陸奥ハ常陸より北の方なる
奥深く出張る國なれハ陸奥といひ又出張る所を出羽といへり今むつの國といへるハ陸と
奥との字を見誤りたる也又人皇の言に出羽ハ旧羽人國にして陸奥仙臺ハさんれい山川風土
の奇絶なる國にて産物の豊饒なる事又仙臺の鏡地東方第一の上國なり継体帝二十一
年奥州國司百済敬福始て黄金を献ぜしハ日本にて黄金を出しの始なり
萬葉集に大伴家持詔を祝して賀詠の長歌一首を擧ぐ其の短歌三首の内に
すめろきの御代栄へんとあつまなるみちのく山に金花さく

### 宝池山蓮生寺 東流 陸奥國白川郡棚倉にあり

当院ハ浄華堪臺院と号し二十四輩第八番證性法師の遺
基なり ○本尊阿弥陀佛 運慶の作
当寺開基證性法師の俗姓を尋るに桓武天皇の後胤鎮守府将

臺所

朝倉（あさくら）

蓮生寺（れんしやうじ）

軍上総介良兼に代の末孫右衛門尉致経の五男秩父六郎将恒より七代の嫡流 将恒より武基武綱重綱重弘重能重忠以上七代之 畠山次郎重忠の二男小次郎重秀の兄なり然るに又重忠及び舎兄重保讒言によりて誅伐せられたり

東鑑と按ずるに此時外戚北條氏威権つよく既に将家を軽居せしめ幼稚の実朝公をもて三代め将軍とし時政これに執権し天下の政をとりいますく執行の権擅にして宗室列侯誰あつて是が命に背く者なし爰に元久元年十一月四日坊門大納言信清卿の御娘を将軍家へ入輿あるよしにて兼て鎌倉よりも迎の武士をさし上されし其中に時政が妻の子左馬介政範京師におゐて病死し是に於て御下向延引に及びける間武蔵守朝政が六角東洞院の第に於て酒宴を催しける折に酒興のうへ主人朝政畠山六郎重保と諍論し朝政既に重保をとらえて席上に押ふせんとせしに重保ハもとより世にゆるす大力の勇者なれば其まゝ朝政が胸板を一足に蹴倒をなまはりけてやらるべき朝政即座に息たえんとありけるより大に騒ぎさまぐに痛わりしかば漸にして蘇生して息出けり実に怒ひて騒や角も打かひに及びいさかひ中せし酒宴も殺剥に押よびて立えく退出しけり然るに武蔵守ハ深く此事を遺恨に思ひいきどほりて是を報ぜんと内々心を苦しめける其後入輿のことも相ひ朝政も鎌倉に下向しけるが此朝政が妻ハ牧の方の娘にて執権時政の聟なれば時に畠山父子を陰謀の企あるよし讒訴して竊に稲毛三郎重成へ頼みて其讒くまぎれなきむねを語らしむ其上牧の方朝政の為に訴嘆しきんぐに云なされける程に時政大にいかりを発し要に江間泰時北条五郎時連に仰せて急ぎ畠山父子を誅戮すべきよし仰られけれハ泰時さらにそのまゝ子細を辞せしかば重忠が忠義に於る若自身にはしらざる者なり強ちに右幕下の御優遇にあつて恩寵絶ずそれがいかでか謀るのあるべき事も不審に存ずれば此てなり忠臣を国のためにうしなはれんが御憐にあらん猶々其実否

北條朝政
東門院の
前に挑ひて
畠山重
保と
諍論を
此乃
物ぐる
や静まる
これは何
物騒乱
と云へ
と

ほどく討死せしはし流布せしめ密に身を遁れて京師にのぼり栂尾明恵
上人の禅扉を叩き人間の不定芭蕉泡沫に等しく就中武門のならひ
多あしさを期とくりしさるまで今度我又重忠舎兄重保を始め一族郎
等まで助るとも非命の死をいたしたる我其子弟の身として存命をなすべきあらず
得て根株既に盡んてなれば誰か一人菩提を訪ものなく一朝の冤鬼となるがごとく
悪趣に堕落し修羅の妄執散ざるの期なし殊更我一人武を善
提の為にとて私を出離の為に志のび窃に法味をあまんじて是まで推参
せりと偏に上人の大慈大悲をたれ給ひ円融の道を示し給へと洞ふかこ
ちしが上人いと殊勝の事に思し給ひ即ち帰依のために華厳一乗の法と懇勤
に諭し給へば重秀歓喜踊躍にたえず剃髪染衣の身となり名を恵空と改め
上人に随従し菩提を勤るの志深切なり かくて年月を積しうちに聖人の
雑劇苟且に修しがたく円融の一乗容易悟得がたかりしが恵空ひそかに深く

らく人各長ずる所ありて身に負ふ所業を強てなさんとせば百年を經るとも
終に其甲斐みえざるべし況ることをいはんや人間わづか六十年今已に其半に及べり
于時年二十八 かぎりある乃年をもてかぎりなき乃行を修せんとは元より愚なるに
し我きく今東方に他力真宗とて易行直入の法盛んに行はるゝよしまう
に速に見まほしくとて乃 承元元年十二月二日まだき夜ふかに山を忍の
び出東路さしてゆけるが宿縁の淺からざるにや此時高祖鸞聖人常陸の
國小島郷に弘法ましましけれバ直に彼所へ立越聖人乃淨刹に參詣 時に建保二年 来
意をつぶさに物がたり仰ぎ願はくは菩提の要路に導き給へと渇仰のけ
しき淺からざりしかバ聖人奇特のおもひをなし給ひ夫今や末世濁乱の凡夫いかで
か聖道乃修行を成就することを得んまして自力の功徳をたのまんや他力本願
の如来にうちまかせ奉りて雑善餘行をふりすてゝ一向に報謝恩徳の名号を
唱誦し皆修皆念なる時は彼佛力不可思議の利益廣大にして自己の往

重保を栂尾に入て明恵上人の徒弟となる

澄性上人夢中に
一族成佛の
相を感徳
する
澄性

生は必定を證得し順次に神通方便をもつて有縁の衆生を済度せんと誓ひたま
何れの悪趣に在りとも親属も忽ち浄土九品門に導かん努々疑ひ有
べからず善哉恵空よとあまやといとこまやかに教導なし給ひしかば恵空は歓
喜の涙せきあへず立所に信心を受得し即本宗を改め当宗に帰依し奉り
なる縁に投て名も證性とあらため給ひ御弟子の列に加はりたり然しより以来
信心猶名意なるのみなく終に文永二年巳月廿五日稲田の房舎にして往生の素
懐をぞ遂られけり 時に八十四歳 其後真弟證光法師遺跡を再興しこれを蓮生寺
と号けしとかや

初めは下野國塩谷郡稲田に入る所に創立ありしが第十二世宗光代寛永元年にいたりて寺を
当所に引うつしたるよし又世俗にいふ證性房ある時夢むらく七宝の池に金色の蓮花五六十
根生しそのうち其一は蓮臺の上に上品妙色の菩薩端座し給ひ今此名経は即ち畠山の一族なり汝が他力信心の功
徳によりて実に値がたき弥陀の悲願にいふるれ悉皆浄土の生を受けりとまざまざしく感徳ありしかば
ふよりて證光房坊舎を修補して初めは華臺院と号けしが後に蓮生寺と改めむらる上来の縁起は悉く
大谷遺跡録によりてこれを記せり我が宝永の比享保の比にも證性房発心より入寂までの年代たゞ遺有
未だいづれか是なるやしらず
後学これを正さば幸甚ならん

○道のべの清水は柳倉より西南にあたりて下野と奥州の国堺芦野といふ所にあり傍に

遊行柳ハ西行法師東國行脚の古跡歌あり徃とに

〽道のべの清水ながるゝ柳かげしばしとてこそたちどまりつれ　西行法師

○白川の関これハ棚倉より西南奥州の口にあり白川とは又ど川にあるが山なり

此所ハ地堺にしていづれも山をこゆるに関所を立二本の関所と号け旧ハ孝徳天皇の

御宇諸國に関所を立給ふ要害の地なりとかや

拾遺 〽便りあらばいかで都へ告やらん今日白川の関をこえぬと　兼盛

後拾 〽都をばかすみとともに出しかど秋風ぞふく白川の関　能因

○阿武隈川ハ白川と根田この間を流るゝ川なり水源ハ大熊の瀧より流出東海に入る

此間に袖のわたりといふありまた此川筋ハ江戸より南國二本松本宮などの驛路なり

古今大歌所 〽あふくまに霧立わたり明ぬとも君をばやらじまてばすべなし

新後 〽みちのくの袖のわたりの涙川こゝろのうちにながれてぞすむ　[illegible]

# 福嶌康善寺　西流　旧國志のぶ郡福嶋にあり

当寺ハ聖人の真弟富田明教房の遺跡なり

○浅香山ハ棚倉より福嶋へ出る驛路の向ふ倉の宿より東にあり信夫山と相対す

山の麓字平村に山の井の水采女塚などあり続けて標今ハ枯てその跡なし此地ハ

そのむかし葛城の王下向ましませし折から國の司もてなしつけき事ひとりなれば

福島(ふくしま)
康善寺(かうぜんじ)
本堂

鐘楼
太子堂

采女山の井の什を置て王の怒りを解く
あさか山
かげさへ
みえぬ

まうけのみなどすろ阿によつかなりしかば王ふかくいかりせ給ひ既にうつこそ
妻ならんとせしに釆女なるものかしこくも御盃をさゝげ舞せ給て土器を
まちて王にすゝめまいらせしかば
あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは
とうたひしかば王の御心とけて凡波なくもとのひろとうん難波津の歌と
此あさか山のことば歌は歌の父母のやうにてならふ人のはじめに書るよし
貫之が古今の序にはいへり
○あさかの沼同しく福原の村にあり八雲御抄にあさかの沼に花かつみとよめ
るハひがごとなり彼國に菖蒲なしよりて花かつみを五日にふくといへり
うつくれ蓼なり
東今　みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人に恋やわたらん　よみ人しらず
○信夫山志のぶの里志のぶのうしろなる所なり
後拾　人志れぬるしきものハ志のぶ山下はふ葛の根なりけり　清輔
○[illegible]杉田の宿名産の温石あり二本松の宿西手の山に温泉
あり此所ハ畠山の城下にして甚繁花の地なり
○安達原ハ二本松の遠侍にあり黒塚とらく茶むかしれ中に栢の木すゝ茂る
今もな跡ものをとゞまし
拾遺　みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりと聞は誠か　兼盛

佐藤庄司が城跡（さとうせうじ しろあと）
丸山城跡

義経腰かけ松

○しのぶもぢ摺の石は福島の北にあたりて瀬の上のかたなる山あひの村中にあり其ころは此麦ふして拙俸苔むせり或人の云ゑ見てる此わたりより真のしのぶもぢ摺は此石とて見出しけりしに国司より命ありて今さらに是を見物やさんとて何とか繁閙ならんとて又埋しめられしとかや誠に其説なきこそしのぶの石のむかししのぶるところ

「みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに　河原左大臣

○佐藤庄司が丸山の古城は右瀬の上れ道より露上川より見えまつしる山之

○伊達の大木戸は瀬の上の小亀より坂の下にあり是即文治五年錦戸太郎泰衡討死の古跡なり

○かひもの関大木戸につゞきて古跡なり

詞花「あげまき結のなるけきを衣かぐり所そそべき下ひもの関　甲斐

○義経腰かけ松大木なり大木戸のかたはらの畑い田にあり或は奈慶図下向のおりに此所に休らひしともいへり

○甲冑堂大木戸の北斎川のかたはらにあり佐藤次信忠信二人の女房が甲冑を着せし木像を安置し

○白石名産の紙子ありまのゝ萱原も此わたりなり

新千載「みちのくのまのゝ萱原遠けれど俤にしてみゆといふものを　笠女郎

甲冑堂
貞操をまもる
のこゝろばへよく
其武を失はじと
ひとへの衣褶
女武者とは
これ勲とや
いふなるべし

蕉翁
東奥よ
行脚ハ

へたけくまの松は二木を都人いかがととはばみきとこたへん　　橘季通

へ武隈の松はこのたび跡もなし千とせを経てや我は来つらん　　能因法師

○芭蕉翁の碑は岩沼より一里ばかり西笠島といへる挑苑の名所ありて其中に一基建其文に云

笠島の里に入れば藤中将実方の塚はいづくのほどならんと人にとへば是より右にしたる山きはの里をみのわ笠島といふ道祖神の社かたみの薄今にありと教ゆけど此ごろの五月雨にいとあしく身つかれ侍れば余所ながら眺やりて過るに蓑輪笠島も五月雨の折にふれたりと

へ笠島はいづこ五月のぬかり道　　ばせを

○藤中将実方朝臣の塚は右にいへるごとく蓑輪の里笠島道祖神の社をうしろへ行所にあり其地を伏見山ともいふ又は唯那書とぞいへり是中将のまうでんとしるく家書と織り侍る所をといふにあかさの墓といふあり即塩出山の麓なり又中将の住給ひし跡とて塩出村の農民代々久しく清といふもの彼塚を守り祭祀等のことをつかさどれりその家に古く持伝ふる燈籠鏡なり此ものを始来れば是即中将の手馴給ひし調度なりといふ其伝の程はさだかならねど中々近世の物にはあらじ按に中将実方朝臣は一條院の朝にありて大納言行成卿と同時の人なり或時いさゝかの口論にて行成卿の冠を笏にて打落されしかば行成卿より

実方朝臣陸奥へ
左遷し紆吟して
誤つて嶽の
袮祟

温柔の人なれば其まゝ落たる冠をとりあげ髻かきはげてさはらぬ躰にも
てなされしを帝遙に叡覧ましまして行成の優美を賞し実方の疎忽を
悪ませ給ひ実方にそれ歌まくらみてまゐるべしとて陸奥守に任ぜらる東奥の
阿古やの松を訪ひ得ば其時昇殿許すべしと即時に勅命ありしかば中将心
ならずもみちのくに阿古やの松の木がくれさへたづねけれたより此地に到
さまよひ給ひしが此所の道祖神は物とがめし給ふ神なれば里人のどもよう
にどひそ下馬阿るべしとまうしあげしも元来武骨の殿なれば耳にもかけ給はず
因に乗給ふにやがて華表の前に至るや否石となる其の馬蹶ぎ倒れ
主は大地へどうと堕ち馬は其まゝ倒れ死す神罰の程ぞ恐ろしき斯て里
人ならぎまゐくに痛りかしづき奉りけるが三旬ばかり病悩にて終に長徳四年
十一月十二日御齢三十に歳にして玉發の汀よりうまれるにあまさる鄙路の露とぞ
消給ひ里人等悲しまれるままつりせ其跡にかざぞうりれ墓をたて塚と築きけるが即
今阿る所の古墳なりとぞ西行法師東国行脚のおりから墓所に額きて
「朽もせぬ其名ばかりをとゞめ置枯野すゝきかたみとぞ見る
○名取川大河なり往昔橋の長さ百三十五間ありしとぞ中ねの塚より五丁余
出熊野堂を経て東の方にありむかし此地に名取の老女といへる翁あり毎歳紀
伊の熊野に詣でけるが多年なりしが老て且やめるにより志願終にむなし
かりしかば此に於いて祠を立てこれを勧請し熊野堂といふ即今ある所の

堂これなりとて名取の祠ともいふ

「陸奥にありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり

右幕下頼朝錦戸泰衡を追伐の時に

「よりともがをふのいくさに名とり川

とありしかば梶原景時とりあへず

君もろともにかちわたりせん

○埋木は阿武隈川名取川よく合せぬまで其ものさだかに見ゆる事なし名取川の末

中田といへる地よりは今も埋木しばしば流れ出るをあり人たまたまこれを得れば

玉て琢磨し或は佩ものとなし或は香炭となしてこれを貴ぶ実に[illegible]

をなし木理あざやかにて其艶玉のごとし

「名とり川瀬々のうもれ木あらはれていかにせんとかあひ見初けん

此川より長町驛を廣瀬川へ出る水へまされバなるから仙臺府の口也

○高尾山仙臺城にあり巌壁巍然として削成がごとし是をるから往古神仙の岩

にして時々仙人松源に往来せしとぞや依て地名を仙臺とよぶとぞ

此地の繁花なる人家のにぎはしき実に帝都に等し

○芭蕉が辻又は六名の辻とも此所名高きれの辻也むかしは宮の出たる人家

の形に芭蕉を植つぎて其根漸ひろごり夏天には緑葉街衢にひろがり

甚奇観なりしとぞよつて其名をよびけるとぞ

源二経泰衡を
追伐して
名取川よ
京洲聯句をなると

仙臺芭蕉衢
大崎八まん

## 綾和稱念寺　西流　同国宮城郡仙臺府国分町にあり

二十四輩第十一番鸞聖人上足無為信大徳説法利生の古跡なり　無為子とも称し俗姓源氏の縁起あるは越後無為信寺の条下に記すが故略す　其後是心光円源海専空うんど相つゞいて法燈を挑け化益ありし所の霊場也　上来は全く大谷遺跡によりて是を記し給ふの当山縁起に云く当院は橘昌山本誓院と号して開基は無為信房といへる人王三十代敏達天皇の世の苗孫左大臣橘諸兄公正統の系譜因幡の城主橘民部少輔是なり常州稲田に於いて聖人の門弟子となり当国に化益し終に弘安二年三月十五日法臈八十一歳にて往生を遂げたまふと云　越後無為信寺の条下遺跡稲の條記すこれを據とするに俗姓の藤原入寂の年暦あるひは齟齬せり未何れか其是をしらず

○宮城野国分町より東の方鄭躅が岡をいふ釈迦堂より南へ国分寺のうしろを右へ出る所の廣野是なり此野の名物なりしあらき本萩といへるは今は其本枯れて跡だになし唯其種ばかり仙府の人家に培植して一二株ところのこなり○秋萩の古枝に咲る花とこれをよめる歌を或人難じけるはことさへく此萩は例の萩とはかはりて宮城野の本萩なり草萩にかはりてどれも継る本なり秋毎に梢にまさき枝を生じて其枝に花咲けばこれをこやぎのいはれあらき本萩とはいへるなりとぞ○むかしは殊に此萩を賞せらるゝにぞありける

為仲なる人奥州の任はてゝのぼりける時此萩を長櫃十二合に入て登りし
かば京に入ける日人々是を見んとて二条大路に集りけるほど車多く
立ならびしとなん さればにや此花の今はむかしのおもかげに一本もみえず廣野
小松ばかりありて秋をしらしむ
宮城野は元荒の木萩露重き風を待こと君をこそまて よみしに
是より塩竈にいたるに二石あり小鶴が池野田の玉川沖の石末の松山千引の
石などの名勝をさぐりて行を八幡通りと云甚迂回なり又原町と壺の石碑へ
出直に塩竈へいたるを捷径とす○小鶴が池は常に多く鶴むれ居て人を恐ず
甚奇観なり
○壺の石碑は原町より今市に出てろきの橋奥の細みちを経て行也此山より十町
の菅薦の古跡あり石甚すりかぐし石碑へ行にも路嶮岨多くして大にまよひがち
蓋近来大路の傍に南都の菅近古梅園なる者標石を立て人始めて石に迷はず
それ大路より右の方野径に入ば方九尺斗の瓦屋あり是即石碑なる長六尺
幅三尺厚さ壱尺五寸諸国への行程を記とゝろ云六丁並里の様り是を多賀
城の碑と云往昔神亀元年甲子に按察使鎮守府将軍大野朝臣東人この
城を築く其後天平宝字六年十二月東海東山節度使兼鎮守府将軍藤原
恵美朝獦彼城に修ひて碑石を建是旅人をしてみちに迷はざらしめんがためなり
と書り見雲真人の筆なりと云風土記に云田村将軍鎮守府として此国下向の時

仙臺稱念寺
本堂

撫ふる石の蘚苔を去て此碑面へ日本中央と云文字を彫給へりとかや按るにこれは
なる偽説なり将軍彫石の文字の碑は壺の郡七戸壺村にありしと後人地中
に埋蔵して祢にいふ石文明神といふ是なり此石いつしか鎮守府の庭に重
ねしく其壺の中にありける碑なるを以て壺の碑の名を失す然るに信家諸説
が古事も其石を壺といへるにあり又顕昭が袖中抄にもみちのくのおくにつぼ
のいしぶみあり日本のはてといへり但し田村将軍征夷の時弓のはずにて石面に
日本の中央のよしを書付たればいしぶみと云へりとみちのくは東のはてと
思へど蝦夷の地に掛くて千島までも陸地をさしたれば日本の中央ともいふ
こそ見ゆれ然ていふ所は多賀城の碑と壺の碑と混じて一物となしたるべし然ば壺の
字は昔本文音コン宮中にあるを壺と云り壺の字と同しからぬ然れども俗あ
やまりて来ることひさしければ今更改むべからず

新古 みちのくのいはでしのぶはえぞしらぬかきつくしてよ壺のいしぶみ　右大将頼朝

○塩竈明神は石碑より大路へ出比丘尼坂を経ていふる村の入口昆布を商ふ家
軒をつらねて錺し石の華表より少し向ひて石階道あり拝して当社の諸構ゐ
人かならず実に大国の無祠なり門の右手に文治年中泉三郎献ずる所の鉄の
燈籠あり祠の南なる市中に古釜四ツを安んじてこれ昔明神塩を煮た
給ふ釜なりとぞ按るに藤塩竈に田村将軍蝦夷征伐の時又一方八千人の兵粮を炊ぐ
石の釜なりと云釜中に在りて大旱にもかわらず眼病に奇験ありとぞ○都

社は正明神祭る所は塩土老翁なりて紀伊國懸里塩屋王子の神社と同一
体にして伊弉諾尊の御子なり始めて塩を焼ことをしへて名つけ玉ふ也
かん当社の東西は即紀路の浦にして續く鹽の塩釜にも云之これより
船をやとひて浦の景色を詠しのながめは籬が島より松島や雄しまが
崎の名あり此地の其は名區を發するに海上三里にして其間の奇嶼絶
景実に應接にいとまあらず其風色雅致は畫にも及ぶべからず縦に筆を
記することを得ず

古今　みちのくはいづくはあれど塩がまの浦こぐ舟の綱でかなしも

○松島はもと松生て名とせし其島々の岩石に根をさし海風のために
よふろいして屈曲偃蹇龍のごとく虎のごとく各趣ありて実に奇観
とし塩釜の瀬より望むる数々の島々各其形によりて名を設
け或は甲島猩々島烏帽子島のたぐひ其数かぎるべからず南は雄島に對し
東は福浦島又大黒岩に向へりて興をましたとへば假山数池に對するが
ごとし眺望の美盡し海内第一とす去むかしより此地に杖を曳く人多し
といへども其観るところ入てこゝにして景勝の形状模写の形容皆異之
先其風色の多きに迷ふがゆへなり是観の地もまた一ならずといへども富の
山の中腹大仰寺の門前にまされるはなし前の諸勝周市に碁置
く壮観ならびなし富山は田村将軍大同年中の建立にして洞水和尚の

末松山
八幡村
みやぎの
玉川寺
多賀城碑
塩竈大明神
南宮村

# 松島全圖　其一

其二
其一
鳥嶋
弁天嶋
小松嶋
女郎山

毘沙門
代崎
清水濱
東宮濱
大平崎

其三
唐嶋
沖ノ子嶋
大舟嶋
や形嶋
蟾蜍嶋

馬放島
日月島
盃島
放火島
釣島
内裏島
釜渕
釜島
亀島
赤島
須賀江
須濱

# 其四

野々島
明ヶ浦
小人島
馬背島
雀島
大島
いせ島
小町島
貝島
大沢
腕島
雁島

其五
宮戸浦
月浦
都浦
戸倉浦
毘沙門浦
小浦
天神浦
小松浦
屏風浦

般若浦
月見浦
竹浦

其六
金華山
赤濱
長濱
白濱
旭濱
翁濱
五大堂

冨山
手樽
高城駅
磯崎
陽徳院
瑞巌寺

開基なり

〽秋ぎりのまぎれが鶴の声さへもれくる入ぬらみれ塩釜　重呈

新古今
〽たち帰りみ又も来てみん松嶋や雄嶋の苫屋波にあらすな　俊成

○瑞岩寺は松嶋寺と号す当寺乃開祖法身和尚といへるは常州真壁氏乃臣平四郎といへる武士なりしが身の不遇を感激し出家遁世して終に入宋し径山の宝窟に苦行する事十一年帰朝の後最明寺入道時頼に帰依せられて当山を開基となるといふ其偈に云

遠登径山分風月。還披図裏大道場。法身遂得無一物。本是真壁平四郎。

方丈庫裏の結構障子の画は皆時の名工をきそひ金殿楼閣きらびやうに十三の塔頭豊かにして荘厳いはん方なし○法身窟は惣門の前なる民家の後にあり是れ昔最明寺入道諸国行脚の折から庵を避給ひし所なり其後夢想国師此窟中において天台止観を講じたまふといふ○雄嶋は御嶋ともいひ日本武尊船をよせ給ふ所にてかくいふとぞ嶋上妙覚庵は見仏上人の開基なり頼賢和尚の碑あり文及び書とも元僧寧一山の作なり○松吟庵は雄嶋にあり芭蕉の碑を立其石面に

〽朝よさを誰まつしまぞ片ごゝろ　はせを

○西行もどりの松 塩竈より仙台へ入る口にあり又西行坂ともいふ其説俗に近ければ畧す

○藤澤の碑仙臺と松嶋の間にあり其文字省畧多く讀難稀なり。
傳へ云弘安元年夏元人我國に寇せしに神風忽ち起りて十万の軍兵の
ことごとく西海に沈没せしかば其法輝化の僧鎌倉圓覺寺の開基佛光
禪師我父母の國なるをもてこれをいたく憐みて來年秋彼岸の日此碑を
立て元卒の靈を弔らはれたるなれど我朝にありては其事をあ
らはにせん文字を省畧して人にさとらしめざるとや
○金華山は松嶋の東にあたりて海陸とほくはなれ難所の
く山に金花さくとよみしは此御山のことなれば小鞭驛より矢本驛を經
て石巻にいたる此地奥海の一都會なりて是より阿に渡りて綿繋に
いたり絶に桐川の山鳥と云所に至る此所金華山へまゐるの海口なり渡
海の舟唯一艘にかぎる山上に小屋一軒ありて是を司る先まうでんと
する時は嶺上の鐘を鳴らし相圖をなせば即彼所よりも舟いだせ鐘
を撞く其後船を出れむ女人を禁じ舊はつより渡海を絶れ山は陸
地より纔二百丁ばかり海上に寮元として金堂の峯まで卯に登へより
其形全く亀の背に蓬莱を負たるが如く實に神仙のすみかとも云
高さ凡十八丁周三十六里八十八谷三百八十凡の洞穴あり頂上の天龍宮か
東南の方猿渉といふ難所をめぐりて八角の氷晶石あり高サ周ま凡
十三尋ほどぞ當山第一の奇觀なり捌又此海底の産物金海鼠金珠を

に穿ち或は古人の家居せし趾を耕しなどするに鏃や兵器なりしが矢の石と

といへりしをほり出しまでありけり

石森山本誓寺　東派浄家　同國岩手郡南部　森岡の城下にあり

霊顔院と號す二十四輩第十番是信大徳の開基なり○本堂十二間四

方本尊阿弥陀如来　恵心作　郡の地　諸臣坊あり

当山の開基是信房と申せしは旧吉田大納言信明卿とて藤原氏の親族なり

事に坐せしまで暫く議の常州にさすらへれ身となり坐しけるが既て勅免

にあひて帰洛すべきよしつたへし風を心に感ずる事ありてさらに世を穢土娑婆の塵囂

のいとひさま老若貴賤の差別なく曾て常ある事なし我今たとひ勅免を蒙り

ふたゝび雲の上に登り栄花に身をほこるとも無常の風は夕朝を待べく

あやされば今日は歓楽の法筵につらなるも明日は阿鼻の大城にむかふ実に一期

の大事今此時なれば永く人間のまじはりをたち深く菩提のみちを窮んと

信明霊告を感じて暗に聖人の御在所を知る

即得往生をとゞまりてあけ合ふ知識の値遇をうけらる或夜暁に及んで不
思議の霊夢ありき夜の童子枕上に立ちて唯何となく
「抑々善信の聖世に出て常州に法の花さく
とくりかへし〳〵三度まで吟じつゝいづくともなくうせにけり信明
忽ち驚き寤てたく〳〵と歎の心を案じらふをしへよれまでの聖
とは真名になをして善信聖とよみときはこれ常陸国を云なり
善信聖人とゆふ大知識ましまして末世の衆生を教導し給ふといふ
霊告なるべしと感涙そゞろにそでをぬらしまだ夜ふかきに立出て常陸
こそ赴きけり是即信明が高田発達の時なるかや霊告にまかせて彼
地にいたり尋ね訪ふに里人ども答へるは其善信と申は即親鸞聖人の
御事にて今程は近き此小島の郷にましまして専ら弘法勧化をなし
給ひ誠にあり難き知識にて人皆如来の御再誕とこそ申せといふ

森岡
本誓寺

其二

其二
此寺内一面唐木なり
寺中

本堂
臺所
門

信明いよ〳〵奇異のおもひをなし直に小路の里にいたり聖人に謁し奉
り何の大誓の悲願にて我等ごときの凡愚をも出離のみちにいさなひ
給ひ門下の末席にもさし加へ給はしと渇仰の涙をながしてよろこび
なるに聖人も渠が発心一朝のことにあらざる事をかんじ給ひ則本願他力
の要法専念称名の正業をのべ末法五濁の悪世にいたつては貴賤凡下の差
別なく善悪邪正の隔もなし生死の患難を助らんとすれは自力聖道の
善根にては永劫を経るとも及ぶ事なし爰に弥陀本願の他力にいふ末世
凡愚の衆生をして浄土にむかへ給はんと万機普益のちかひなれは唯一筋
に阿弥陀仏の本願力に帰命しまつりしうへは更に疑ふなかるべく仏恩報謝の
称名怠らずとなへなは浄土に往生せんことは大地を打てあつるもはづさざるがごとし
とねんごろに教導有らせ給へば信明随喜の涙にむせび有難や忝や
悪業煩悩の此身をすぐに一向に帰依し他力にまかせ奉れば此まゝ助けたまふ

なる御本願いかでかたのしみ参らせざらんと即信心獲得せしかば御
弟子の列に加へられ法名をも是信房とぞ賜りける我望しより以来
旦夕聞法の利益を蒙りあるに聖人に随ひて御給仕怠らざりしが聖
人はとくく是が信心の厚きと才の勝れ凡ならざることをさとり給ひ
我附是信に宣ひけるは奥州の地なるや元来大國にして東北の隅に蝦
夷に接し誠に我日本の東陲なり其人物質朴にして禮譲なく專ら
自己の力をたのみて悍猾の行ひをえらび氣稟をのぼらし偏なり此をもつて
て昔は王化をもそむひの後ちもされば蜂起せり其邊鄙の村里に至つては
佛名をも知るものなく五戒を犯し五逆を行ひ自業自得の罪に沈む
も絶えこれをさとるのみならじと何しが廣大無邊の佛願にも洩ぬべし
我汝が器をえらむに即其人を急ぎ彼地に至り誠真宗念佛の功徳を弘
通せば我本懐を満るに足りとあるに是信房は今さら師に別き

なり聞法の遠ざかるを深く歎きさま〴〵固辞せられけれども聖人強て命じ給へば今は師命のがれがたく竟に別れを告て奥州にこそ赴きけりかくて当国斯波郡石が森といふ地に弘法の梵字を用ひて本誓寺と号し専ら教導をなさるが易行直入の法門なれば忽ち遠近の道俗日夜に群集し是信大徳の化益を蒙る者其数をしらざりければ一時に芳名高く縁に随ひて他邦に屈請せられ教化ひろまり中にも信州にはとりわけ真宗有縁の者多ければ即彼地に赴ひても一宇を創立し弘法院と号せり是より松代本誓寺之聖人御真筆本誓寺の額はこの松代に将来せり然るに文永三丙寅十月上旬比より是信房御違例にましませしが同中旬第七日頭北面西右脇にして念仏の声もろともに大往生をぞ遂給ひき門弟等打よりて恋慕涕泣の余り荼毘の後遺骨を拾ひて本松といふ地に是を納とかく嗣子相続して第十二世賢勝房寺務の時に至りて天正十八年

冠蓮の尊像

石が森林より移遷して今の森岡に造立し給ふ○什宝宗祖聖人御自作の肖像 此真像は聖人七十三歳の御姿にて是信房へ御記念のため自ら彫刻し給ふ所なり去る享保中当寺回禄のときことごとく焼亡せしが其時此尊像は（さ）せ給はざりしかばこの火に焼失し給ひけるよと諸人歎きかなしみけるに日数を歴て後いづくともなく境内にこそ讀経称名の声きこえければ寺僧人々奇異のおもひをなし其声を慕ひ行けるに即寺内蓮池の底よりぞ聞へけり これぞいかなる事やと各々彼蓮池を探りもとむるに汚泥の中より尊像をぞかづきあげ奉り さては此ところに聞へし讀経称名の御声は此尊像のいまし給ひける所ぞやと皆々渇仰感涙し再び元の如く安置をむかふる心地して歓びあへるぞ殊勝なり此奇特なる像の御影蓮根一茎ぬきてありしが其痕自然と御ひざのあたりに顕れしとて世に蓮かぶりの尊像とこそ称しけれ○聖人真筆画像の阿弥陀仏 光明本十字八字泥筆の御名号 此[illegible]へ 是信房当国へ下向の砌聖人御自筆に授けられし遺与し給ふ所となん

## 彦部光照寺 東派

本誓寺の塔頭にて聖人の徒弟信国房の遺跡なり

信国房は旧名吉田大納言信明卿の家臣多原長左衛門尉忠之信明卿さる人のおりふしに家臣橋本儀内といふ随従して配所に至り供給しもありしが其後信明常州小路に住ひて聖人の御弟子となり給ひし

爰に（これを是信房といふ　お控ゆるの弟子に参し）長光清門もとより御弟子と成りて法名を信円と號し上人
にかしづきね信者すそみなる犯るに是信房師命によつて奥州下向ありし
爰に信円及び彼内のちも附そひてゆりしが信円は斯波郡彦部に住ひて
文永二年三月廿五日終に入寂し其後彼内も同じく身まかりけるがその
子孫今に彦部村に連綿すりとぞ其余三ヶの墳跡ある荒縁ありて何迄も
什物等傳来せりとぞ

○里ぞ山岩手の関といふての森むかしは此所関所ありしとぞ関できに里あり今も本ぶら
き森と人まうりね

へ人どこのいはでの関の岩つじいはざるおそかの我こ待もまつ　為家

へちちのくのいはてのもりれいはでのこひとはるゝ人も行らん　よゝ全され

へくらぼしの入そうかげにもみぢいるその山はさぞ時雨ふりけん　為家

○盛岡擁火毎年七月十六日より十八日まで三夜が間當城下はむかひて富るも貧しきも家
ごとに檜のひは松みじかく割て擁のはなをたてこれをまきあるさ又ひとへだちりに関り
三尺ばかりの續松とし構へ大なる家には二ツ或は三ツ小家には一ツ軒端につゞけ續く並べ立ハツ
時より火を燃じ者を松園に關白を始め諸士の面々もひく死やうに出さて立並

盛岡樺火之図（もりをかかばひのづ）

きくゝれがくろも川 をそのかくろびさけとろえ ・鯨・石花・熊皮 此皮多く大なるあり世に珍しき物なり ・尾駮駒 牧より出る

馬の尾・岩城雲丹・信夫摺・会津漆・同蠟燭・同膳椀・南部水晶・

津軽瑪瑙 世に云合利也 ・琥珀・薫陸・津軽丹土・をかちれ硯石 三月三日の大汐干に海水まて至る之 ・

南部縞 八丈嶋よりも遙に佳なり ○松前産物・鷹・真羽・塩鶴・干鮭・鮸・鯑

炙鯨・昆布 世に所謂屋根みそちへ大昆布を出せり ・猟虎・水豹・熊皮麋皮・胡獱・海

ぷ・あもえつへい・膃肭臍・干獨活・干豆腐・礪石等之

## 出羽國

風土記に曰和銅五年始めて陸奥の二郡を割てこれを置 國乃名義陸奥乃條にみえたり

### 吉水山菩證寺 西派

出羽國秋田郡六郷にあり

寛喜院と号ス是信房乃遺跡にして縁起は盛岡本誓寺に同じ

二十四輩第十番の席を持てり○本堂九間四面本尊阿弥陀如来 恵心の御作

○当山の寺説に云是信房は源三位頼政乃曾孫常陸介宗房の御子なり

稲田におひて聖人の御弟子となり当国に教化し一宇を建立し本浄寺と

本堂
臺所

六郷善證寺
同　真光寺
真光寺

號せしが蓮如上人これを改めて善證寺と號し給へりと云云盛岡及び松代本誓寺
の縁記とは大に齟齬せり委しくこれを挙て後の知識を待つ

## 眞光寺　東派　　同國同所にあり

寶珠山と號す縁起詳ならず○本堂九間に面本尊阿弥陀如来 聖人御作
二十四輩第二十一番の席を持てり

○山伏峠又あぶ坂ともいふ盛岡より二戸郷へ出る奥羽の國堺にある峠之夏日ては甚険多し
て他郡の者往来になやむ所也此地の女老若にかぎらず山かせぎして世をわたる夏日
には奥山より去年の深雪をとりおろし馬におほせてうりあるく是を出せば城下
矣屋ども即実とりて矣と被雪につつみて商ふも実に國のみならむしぞかし此
峠につづく白山峠といふあり一山ことごとく水晶なる産にて奇観なり

○象潟　飽海郡に属し入海の眺望の絶景松嶋におとらず大町の湊より舩を雇
嶋廻りの使頃は夘月美景を求めては見に艦をとどめ一杯一覧実に壮観なり
其松嶋象潟の二浦は我日本の勝景れ又無のものにあり汐越の浦は小海の
あてなき絶えぎりる海山はこのうち　の隈々ようろうひく弥高しるその志う
橋有谷并谷の関も遠からずして衣紋きを能因が嶋西行が櫻のむかしまで
おもひ出る心地して春秋にゆかぬおもむき此浦の景色なりれやまさのごとく人も家にまかせ

てハ筆紙も捨ねをし

後撰
〽よの中ハかくてもへけれ象潟のあま乃苫家を我宿にして　能因

○飛嶋　汐越より沖中へ十里余も離れてある嶋ゆゑとび嶋といふ

○うやむやの関ハむやく〳〵の関とも汐越の南にあり或説に云奥羽の堺にありといふ
山なかハ木など茂りてゆきてもたやすからねバ柴折してたどり行をもて
歌にもうやく〳〵通りぬとよめり又おやく〳〵うちのむやく〳〵の関ともいひけん
いづれか是なるやわかちがたし

〽もの〳〵ふの出さ入さに志をりせしとや〳〵とりのむや〳〵乃関

○鳥海山ハ象潟の東南に行く事天に聳へて突兀たるものこれなり奥羽第
一の高山にして山中鶴巻鳥海の二湖あり絶頂に大物忌ノ神別当感就院真言
宗なり山中とうがんに往々古木を出し是を神代杉といふ

○最上川むやく〳〵の関の南なる吹浦川にとまる坂田川上をいふや此川ハ出羽第一
の急流なり昔より此川によせくいるふねを歌によみ合せる水をはやく舩を
引のぼるにいなとかぶりふるがごとくなれバなり

古今東歌
もがみ川のぼればくだるいなふねのいなにはあらず此月斗

○坂田川の海口当地の湊にして繁昌の所なり此浦より眺望をことぶ絶景
袖の浦の古名ハ此南をいふなり

○羽黒山月山湯殿山ハもがみ川の南に向て三山相つらなりて聳て神変

象潟（きさかた）
大市村

鳥海山
天女嶋

其二
白山

其三

不思議の御山なり

〽涼風やほの三日月の羽黒山　　　　翁

〽雲の峯いくつくづれて月の山

〽語られぬ湯殿にぬらす袂かな

○大吹明神村上郡葡萄村の山中にあり八幡太郎義家陣営の地なりとぞ此山中に葡萄多くして夏の頃は里にもち出これを商ふ旅人もとめて愛すものなりとぞ此邊諸木多く豆旅香膳のならべて圓爐をもやし焚火をもてあそぶ事曾てなし

○當國の名産・最上紅花・月ぜんまい　海内の美味にして其外最上の産なり・青苧　奈良布に用る也・温石・蠟・漆・油紙・秋田紫根・月蕗　世に稀なる大蕗也其さま太さ五寸余りながさ一尺にすぎ及ぶ小口に切て手皿を覆ひ葉はひろくして傘にえても揃つべし・白鳥織　白鳥の毛を以て織る霍鸞ともいふべし・蕨織　わらびをつむぎて織るものなり・狸織　たぬきの毛を以て織るもの也・干蕨・奥楨・霰餅・森皮・干もの　鮎にて作る・錫・紅・銀・串鮑・夷海鼠　田部かなる・昆布名なり

凡右の物ハ上野國にもあるなり

## 下野國

○那須野　當國奥州との堺なる芦野の西北にあたれる地なる茫々たるなどと此地の名物とれむかしハこゝを御狩場にてありし所なり

葡萄村
万金丹

まくらとふきゝみと詠て術将のやさけびよのがれぬ狐の知らぞゆう　信実

○那須郡与市宗高の石塔は当所延命寺にあり

○殺生石　那須郡にあり是むかし三国伝来九尾の霊狐三浦上総の両介が矢のために死したりしに其執心尚さりやらずして毒石と化し人を害しける歟そこらひし世演劇の説に委しそれがこれを畧す按するに摂州有馬にあるの地獄と云ありて其上をとぶ虫鳥のたぐひかゝる死にしとなん是等すべて殺生石と同物にして硫石の毒なるべし○国に云当国諸楼安穏寺に往昔玄翁和尚彼殺生石を化導ありし時の袈裟并に水晶の珠数などを伝来せり袈裟はおはじ焦てありとぞん

## 鹿崎山慈願寺　東派　上那須郡烏山粟野にあり

二十四輩第十三番粟野信願房の遺跡なり○本堂阿弥陀如来を安置す法界次第の本尊と号して聖人の御作側に聖徳太子の本像あり伝に云聖人此所の郷御勧化の折から太田村寿命寺に止り給ふ当山にて毎夜光をはなつものあり聖人これを怪しみ光をもとめて影を御尋ありて皇太子の本像唯御首のことはしくも此奇瑞ありと給ひてなんありしを爰に抑ひて聖人御手づから継ぎ給ひて彼御首に接ぎ給ひ当寺に附与し給へといふ

信願房と申しは俗姓清和天皇の後胤鎮守府将軍源義家五代の

烏山（からすやま）
慈願寺（じぐわんじ）

烏山
中川

孫彰田右即義俊の息なり其比上ハ下を虐げ下ハ上を凌ぐの風俗久しくらびして世は乱をとゞめんゝを察し隠遁のおもひ頻にして即常州那珂郡為啗村に避居し後八郎信親と号せしが終に嘉元元年の秋行年二十九歳にして高祖聖人の御徒弟となり信願房と名く始め師命によつて河内國にいたり一宇を営築して真宗を弘通し（即河州若江郡八尾慈願寺これなり）後に當國上郡[illegible]粟野地蘆崎に堂宇を建立し専當國より弘法せり是即當寺の根元なり聖人既に御帰洛の日にいたつて信願則これを供奉し相州御滝留の内日々昵近給仕せられたるが相州の道俗聖人の御徳をしたひ奉り御輿をさへぎり御發駕殆ど延引に及びしとさまざまに諭し給ひ御上洛の後信願房に命ぜられき相州を教導するさしめ給ふ此に於ひて信願鎌倉に一宇を造営し稲荷山浄妙寺と号し勤化弘法さらに怠慢なかりけり（浄妙寺後に參州赤渋に移轉今の本郷浄妙寺是之）信願房かたのごとく

不しる基趾を開き専ら当流の功労をかさね終に法臘七十八歳にして文永五年戊辰三月十五日大往生をぞ遂られける其後数代を経て延宝八辛酉年不縁ありて当院を今の烏山にうつしとゞむ

○中川ハ烏山の城下より東少しに当れり水源ハこれが下より流れ出諸流合して常州水戸の海へ出川甚急流の大川なり烏山より眺望すれバ凡十八の瀬次第なまなれるて奇観なり古人の所謂大なのハなかりしバ観るとこ入るものハこれなり

粟野山慈願寺　西派　同郡馬頭武部にあり

当寺も右信願房の開基にして烏山武部両慈願寺何れも根元を流するのありしバ或説ニ云信願房数慈大徳嘗て粟野康隆に一宇を造営し慈願寺と号れ後不縁ありて天正年中当地に寺をうつして宇都宮ニ別院を営築しこれを観専寺と号れとかや　○本尊阿弥陀如来　聖人御作

高宗山法得寺　西派　同国都賀郡小山荘佐河野村にあり

当院ハ四天王宗にして医王寺と号せり往昔聖人の上足性信大徳諸国化導の砌にしも仁治三年弥生なるの頃此寛当所に紀行ありて

村

武部(たけぶ)慈願寺(じがんじ)

給ひ不意に此寺に投宿ありしが時の住僧（当寺第三世といふ）澶空なるものおのが受ふ所の一乗円頓の法威を立て性信大徳を詰りしに性信徐くに我他力本願の玄旨不可思議の妙意を以て郷音の答に應ぜらるゝ其機をえらばず遍く普同普益なりしが澶空忽我慢の角を折き他力念佛の安心を諦得し終に性信の門侶となりこれによりて性信中興の開基とし即醫王寺を改めて上宮院法得寺と號し二世とせし間当寺に淹留して専ら弘法し給ひしなり ○本尊 登佛如来（聖人御作にて性信房へ附属給ひしものなりとぞ）霊宝 略之

○日光山河内郡に属し祭る所の御神一坐大己貴の命（おほあなむちのみこと）所に都味歯八重事代主の命（つみはやへことしろぬし）神ともや稱徳天皇神護景雲元年に出現ましく当山に而鎮座ませしといふ当国一の宮と仰ぎ奉る本宮兄弟寺其外中禅寺自余の諸伽藍ハ勝道上人の開基にして初めハ二荒山と號せしを弘法大師登山の後日光山と改むといふ其後八百歳の星霜を經て元和年中慈眼大師中興開山として再営ありけるくも御霊をいはひ鎮めたてまつり御宮他の結構全を盡め玉ひ彫刻荘厳またたぐひなし就中神威を仰ぐ奉献日本六十余州の大小名はもとより外藩に列る朝鮮琉球遠く

なる紅毛の景よりもたひくの燈籠ハ光をはなちてかゞやかし本宮新宮諸坊
舎をはじめ町家の軒のはし／＼迄日夜の差別なく繊素のまじはり絶ず神と
つゝ拝くるぞたふとけれ

○今宮八幡宮の御社ハ尾又美麗云ん方なし
○東照宮の御廟ハ相輪塔のうしろにあり
○神橋ハ御山の入口にあり 欄干擬宝珠あるく朱塗なり此橋ハむかし山菅の
橋といふ開山勝道上人基跡をひらき給ふ砌此所に稲生川といへる大川ありて
渡るべき方なくて上人さりかれバ即星の宮を勧請し三年の護摩を修し
給ひしに或時河伯雌雄の大蛇来り波を蹴たてゝ何かしれず出来り手にとゞ
食あれせ忽一條の虹梁となりきたり宮にあひて上人此渡りに着るに命して
山菅てふ草を刈出させ彼大蛇の脊に覆ひかけさせて安く此大河を渡り給ふ
所願を遂げ給ひしかバ即彼大蛇を権現といはひ給ふ此ことよりぞ此橋をか
くも名付たり権現の宮守を長ら隠るハ彼附草を刈出せし者の子孫とぞ
○安達藤九郎盛長が石塔長坂浄土院にあり
○黒髪山中禅寺のまうづる山之一に補陀落山ともいふ富士浅間にもまさ
るきを争へり山中をすべて三ツの湖水に十八の勝ありて英景人の目をおどろかし風情之
「うらみのけんへく三代朝誠ハ木の下露にぬまにおちるに 人丸
○寂光の瀧源遠く密樹生茂り生て凡つゞく唯数丈の白布を中天にかけたるが

世に食物を強ふるを日光責といへる当山御別所などの饗応にせめ
豆腐しく椎子切麦かけ麦き諸国の代参客衆への馳走として飯と
麦強ふるなり是古例としてまた地下の在家までも従者などある家には必ず
来客へ此法をもて来たるをもてなす昔より家々もてなす所にして地元雑煮あり当地の
名産なる素麺をも不断あり此を強せられてよく出まうけも吐きし程なり
さて其地にて今も素麺谷といふ所やいづれぞあらばしるべしや

稲本山観専寺　西派　同国河内郡宇都宮にあり

二十四輩第十三番に属す同国上那須郡両慈願寺同派の寺也縁起
由来とも両寺の中に委しく記をのせて爰に略す

花岳山安養寺　西派　同国同所にあり

二十四輩第四番相岡乗念房の坐をおもてる寺なりといふ花見の図
寺記に云く聖人花見岡の草房を御弟子順信房へ附属し玉ひ安養寺と号したまふや未
親鸞池の御旧跡は当寺の相承なり
いかなる是かなりやおぼつかし後来の識者これをただせよ

室の八嶋　同国都賀郡にあり

宇都宮安養寺
同 勅專寺
宇都宮社

安養寺

室の八しま
拝殿
本社
末社
阿弥陀堂

室(むろ)の八嶋(やしま)

社家

社家

惣社村

当国惣社大明神　当所惣社村林の内にあり　社人十二人別当神宮寺　祭る所の御神一坐大山祇尊とかや

又富士浅間権現の御親神なりとぞ申しまゐらせ　俗傳に云当社の御神浅間権現の御母なりとも　鎌くらの奥を神道退りして焼給ひし旧跡に

して今に其所の草木も生ゑず此ゆへに烟り立のぼりけるにぞ擬るに室の八嶋の名ありて歌よみの題にも書て

其けしきの趣をよみつらぬるを覚とるのくるなり且それ人の親を神道退りしく茶毘をなすは元真寺の旧跡

法師よりはじまりて拙古より我東方に火葬のなすあて臣

はじめして神代のなりおやをはふるくた人なる説あれば此義のあるにや

高祖聖人当国御旅行のおりから所縁ありて御寄拝ましましけるとぞ

○室の八嶋といふは当社の前に小嶋のごとくなるもの八ツあり其めぐりは卑くして池のごとし今はかれて嶋の大きさ方二間ばかりもあり杉松などまじはりたちくさむらしげし其義きあり昔は此所に地気立のぼりて烟のごとくに見へしとぞ古歌などにもおほくよみ合せたりこれ今は只陸の木さへ茂繁して室の八嶋のごとく地中の水気これがたくみよりのなるらし法性寺内大臣の歌合せに摂津がへ見えじてくむろの八嶋とつげけりしを雑ぜしとかんこれ

まてしれるゆかしゞきみが哀なり

実方
いかでかはおもひありとも志られべき室の八嶋の烟ならでは

花見ヶ岡観鷺池　惣社村を経て思ひ川を越えたる村の飯内丸山より見即花見が岡なり

乾坤が岡のむかしを訪ふにまづこれ宗祖聖人御一代利生方便殺度
なる中にも殊にとぐまて著明きものとやいはん偶も聖人時に御年四十二歳常州
小島の郷御教化の砌しも当国都賀郡總社村室の八島の神官大沢
掃部友宗なるもの仄に法徳をきゝ入きて来り謁して申すやう
我等が在所室の八島なる近隣に一ツの源淵ありむかしより邪神棲
て人民を悩ますこと大方ならず家に押ひて命の害ども損ずもの計
く渠が暴悪を宥めん為毎歳春秋の二時牲を以て

牲とは猪鹿牛馬の類をそなへて生贄にするをいふ
神は明幽冥のものにして無形の気なり此をもてこれを祭るに秋散をもてするものは其は鮮血の
腥気に相感じて納受し給ふといへども天子へ天神地祇を祭り給ふ禅
にあて給ふが故之中古欽明の御宇我仏法東方にきたりてより生物の命をとらずを禁りたりより
此等の祭りはとりもなほさず春日のまつりけるにいる神事は此遺風なり尚我仏法香花燈供をもて不浄を払
ふのこうりしぞ其気をもて
幽冥に通ぜしめんがためなり

これを祭る日しも一時もそむくる事あれば忽ち祟りを
なして人を死なしめ或は毒気をもて疫病を発せしめ今に至るまで人民
の歎きいふばかりなし我きくならく師慈願の御誓には善く衆生を済度

兎見が岡
蛇の池
日光街道
きぬ川

小山判官城址

妬婦生ながら
毒蛇となりて
其夫及び
妾を嚙
殺し

しけるとかや然るに其徳行をもて彼邪神を降伏し諸人の災害を除き給ひて誠に広大の恩徳なるらんと深く敬ひ参らせければ聖人心に悦び給ひ我今我本願念仏を弘通するの時なれば是又衆生結縁の一助也と即外掌ましくして梵鄰が案内にて彼淵に至り給ひと順覧なし給ひ我よく降魔の法を修せざれば元来邪神を伏するのいきほひなしといへども多年弘むる弥陀の本願他力念仏不可思議の妙徳をもて徐に渠を教化なさむものならばいかでか其甲斐空しからん且また毒蛇悪龍なりとも一円神と崇めらるゝ人は罪なき人を徒に害するのいはれ更になしいかさま奇怪ありさまなりとて即淵に臨て彼の辺をさへられせ自ら是に坐をしめ給ひ三部の妙典を読誦し不可思議の名号を唱へつゝ其いとまには水中にむかひて恰も人に対するごとく宣ふやう汝此水中の怪をなしこれ何等の神なれば里民を悩ますの深きや

もし魑魅魍魎のたぐひにあらざれば我は是冤纏蓬魂毒龍悪蛇の
和なきなる猛をころやくに其骸を取し我にまよへて段職悔られなしれ我に
汝が為に抜苦与楽の佛果を得さんとおもひしてなほも貪瞋暴
悪を恣にし人民を害するものならば邪はまされて邪ふして神明
佛陀のゆるさせたまはず億万劫を経るともいつか悪趣を脱れべきと更
に佛法広大の利益を説きまうに御教化ましく
して三月三夜を過し弥ひたるに第四日の曉辛に水面波たちて逆まく
なみうちより忽然として一人の女あらはれ来り聖人を礼拝していひ
けるは妾は旧此里の者なるが生得嫉妬の思ひ深く仮にも慳貪邪
見ふかくいかり罵るを常なりしかば夫なる者これを厭ひ元来家富く
何ひとつかけねばされば竊に妾をぞ出さしめねど此妾容貌うるはしきのころ
らんと心さま温やさしかりければ夫の鍾愛太方ならざれ日くに初通の縁に

さなきだに胸の火もえきゆるひまなかりし我なるにかゝるむつごとを見もしば心
もしうらみかこてるかむしれ煩悩起るまゝ忘るべくもあるのぼどとゞめ
よかくにして物ぐるはしきさまなるか妻はいよく跡をもて妾を見るより
佻欲のごとくなればよしこれともかの女ゆへなれば私に餌を毒殺
せんと謀もはかなき女の智恵なれば妻はこれをさとり妾をきびしく
いましめて鬼よ蛇よとのゝしりてさまぐ打擲せらるゝしかしも我は
また妾なれども此折檻にたぢろひく再び妻にまみえんも面ぶせくさ
れども生質のおろかさとさらばとやせんかくやと心ひとつにせまりきて
忽ち狂乱し今は人目も恥をもわすれ唯一念の怒気凝て鬼とも成
蛇ともなれいかにもして彼女をとりころし胸の焦燎をやとめんと直に側
室にまゐりて彼女を見るよりも鬼一口に喰んとせしを妻はかくえに在
何れせこれを支へてとめんとし人のつきもいかまでぞ狂ひあらせまい

らせんと其まゝ妻の咽に喰付てふぐる女をおたをしゐひのまゝみ
なひ裂しかば日じまなりにまゝ女も死したるありさま也し心も乱
だ也りうせしうりしが餓に熱有り内ながらく大焦熱の苦を逼猶頻
悶して渋しんなりも忘せしと覚しがおりし姿に引かへて忽ち蛇形の
よそおひと成り我身なながらも抑そ詫しくもちがはしくこゝ
なる九重無底の淵にとび入再び人にまみえじとちかひしも蛇
身の業火三熱れ日夜にさへがたく心狂じて人を忘らく又
鮮血咽をうるおせばふしぎや漸々の苦悩をまぬがれに似たる
だつともむなひもまとれたて是まで数多の人民を悩ましつゝみ
罪をかさねつうかむ瀬もなき我身なるに此日尊き聖人の読経
称名微妙の御教水面にひゞき清涼として我に我身の焦熱をさ
まし苦悩を忘と身心全く安きがごとし志うのゝなうに聞法の利

益淺かりし貪欲の心忽ちに飜て菩提を求る身と更に切なり是を
宿因の善根とし仰がれ聖人大慈悲を垂れ給ひ今より更に
三月の間梵音を唱へさせ給ひけるにぞ其功徳をもて即蛇身を解脱し
生を轉ずるふしあるべしと涙とともに申されければ三拜九拜なとゝせしが
其まゝ水中に飛入ぬ聖人いと奇特におぼしめされつゝ三日三夜が
間誦經念佛怠りなく修し給ひ稱も本願他力不思議の利益を
説せ給ひ其娑婆流轉の間三悪に墮を出ずして極重悪罪の者なりとも
我他力の悲願にはもるゝことなし況てや汝懺悔の功力あらば
只一向一心に佛にすがり參らせ御助けに一定往生は治定と思ひとり
さらば其うへは報謝の稱名を唱ふるのみにて聊自力を雑ふな
かりし偏に他力にまかせ易行本願ゆゑなく聞かせるよしといと
念ごろに御慈訓有せ給ひしが第七日の滿朝なりきや水中に

縁ありて今度大知識の御教化によりて尊き御佛の悲願をきいて念佛の利益広大なる事を信じ奉り南無阿弥陀佛と称ふる内忽ちに来の苦悩を忘れ終に今日蛇身を解脱し忝くも天上の果を受けりいざや結縁の為に得脱の姿を諸人にまみえんと爰に現じけれバ隣の里人伝へきいて我も〳〵とつどひ来て大に群集なしけるが午の刻と覚しき比涼風飄然として水面をはらへバ透る潭心より一片の白雲立のぼり其中に彼女ありて虚空にのぼると見るまゝにやがて菩薩の荘厳をなし宝冠をいたゞけ聖人に礼拝し終に上天なしにけり此時虚空に天花のふりくだり異香四方に薫じ又地より落来れバ則甘露と化しけるにぞ見る人奇異の思ひをなし聖人の法徳真宗の他力を驚嘆せざるはなし中にも掃部は大に歓び聖人の大徳に屈伏し佛法不思議の殊妙なる事を感じ信仰のあ

毒蛇聖人の化益によりて悪報を解脱して向日上天する図

まり其身神官なりといへども密に聖人を頂礼し弥陀の本願に帰命して更に二心なかりける明星なる後に群集せし人々これに見及びし遠近の者も皆聖人の徳行をきゝまゐらせ終に本をすてひたすら御教化を蒙り他力真宗門を為事とする者挙て数多なりにされば東方辺鄙の国なりとばこれを邪見悪法の族多かりしも今までの下りて蛇身天上の果を受再び生の縁をまたく邪神の冥宮にとまるをまぬがれしかば深く念仏に帰依しけるら後世の一大事を心がけるぞ殊勝なれ其この丸山は其時諸人群集して天花を見たる所なればとて花見が岡と名づく又淵と親鸞池といふとぞ共に旧記に見へたり 傍に大蛇堀あり 即宇都宮安養寺の境内にして碑銘あり

高田専修寺 同国芳賀郡大内の庄にあり

当院は阿弥陀寺又は無量寿寺ともいふ 宗祖親鸞聖人開基御建立の霊場也 勢州一身田

御門跡の御旧院にして今ハ御兼帯所となれり○本堂十二間四面開山聖人御肖像を安置す○金堂 阿弥陀堂なり 本尊善光寺同一体の如来当山の開闢其由来を尋るに当初元仁二年正月八日高祖鸞聖人 時に御年五十三歳 当国大内の荘柳島といへる所に行暮給ひしが紅日既に西にかたふき蒼靄孤村をこめてくらかり也何処に宿を求むべき方さへなかれば蕭然とし彷徨給ふに大なる石 般舟宝石とて東西二尺七寸南北弐尺七寸今になせり のありしかば旅のならはしとて即石上に座をしめ静に念仏して坐しましける夜もやゝ更まさり長庚の明星漸に東にのぼらんとする頃ひ一人の天童忽然として出来りて聖人へこれを見給ふに一尺あまりの柳の枝に白紙の包を添て手に携へ東西に盤桓して云く白鷺の池のみぎりには一夜の柳枝を挿し般舟の磐石の南には仏生国の種生ぬと朗に詠ずる事数回

高田専修寺
客殿
上人柳
茶所
臺所
門

本堂
舎利塔
山門

明星天子本経
を授け霊地を
示し給ふ

みして山に向ふて去んとし聖人急ぎこれをとゞめ童子にいはく何國の人ぞと問せ給ひしかば即答てまうさく我はこれ明星天子本地虚空藏菩薩なり師に伽藍の霊地を示さんためにこそ來りまゐらすれなりとて南方の水田を指さしこれ此柳嶋の地は往昔釈迦牟尼世尊説法ありし霊場にて則如意輪観世音菩薩佛勅を受て方便利生を結給ふの梵區なり聖人はやく此地に伽藍を建立し此二樹を植給へこれこそ天竺白鷺池の柳に包まれ正覚山の菩提子なりとてかの二種を聖人に授與給へば聖人かしこみてのこまりて此地を閲るに蕪穢沼田にして水溢まりいかんがしてか伽藍の地となし給ふんやと向せたまふに童子は頭を抗として暫くして水中に入ぞと見えしが終に其行方を志らず聖人いと奇特のおもひをなし給ひて徐に彼柳條を水田に挿み菩提子を座石の南方に種置給ひさらに石上にのぼりて念佛して擲通しまの

なるが夜もすがらくと明けたるに不思議や先に種ゑおきたる松乃二種の霊木忽ち根芽を生じたるが中に二本は餘りたる大樹となり枝葉上下茂り緑陰四方に布て枢又彼水田の今まで溢れし潴水何くにか流れ去て中央凸然として小高き丘となれり（これよりして此地を高田と名く）しかば遠近の道俗これを見て愛じ一も驚嘆して聖人を敬信せざるはなかりしかくて此等の隣国までもかくれなく人々渇仰のけしきをあらはしたる下野の国司真岡の城主大内国行を始めとし久下田太郎秀国小栗の城主尚家真壁の郡司寿国相馬の城主高貞平塚の荘司重連笠間の城主基員なんど附に名を得し豪家の面々我劣らじと聖人に帰伏し奉り其尊重礼敬するさま恰も如来世尊のごとく殿廊砂石を運び竹木を引て伽藍造立の荘飾をいそぐが役に老若貴賤の分ちなく集り来る人々は雲霞のごとくいつの間よりは木石の山となしたるのごとし

ば常総二州の諸弟子奥羽両国の門徒の輩雲と凌ぎ霧と分ちて
群集し既に日あらざりして精舎造立ありしかば我に聖人宮村の草菴に
まして不思議の霊告を得給へり然しも其年の正月十五日の夜に
刻ばかりに一人の聖僧来てのたまはく当師の親鸞今既に満足せり
此上は速に信濃国善光寺に来り給ひて我身を分ちて師に授くべし
伽藍落成の日に至てこれを安置し末世の衆生を引導し給ふべし
と告おはりて西に向ふて去り給ひしが高田の地にて消うせたまふを
見て夢さめぬ聖人歓喜斜ならず即御弟子性信順信の両大徳と
俱に急ぎ善光寺に詣で給ふ爰に十九日の明がた善光寺の僧徒等
本堂に会合して相ともに語て曰昨夜奇特の御告を蒙り御本
尊阿弥陀如来梵音を挙て曰く明なば我法弟善信法師 聖人の御事 なり
来の登山あるべし兼て我軀をまうちこつふるの約あれば汝等謹で迎

を接くべしとましく貴へさせ給ひしと異口同音の奏楽なりこれ
そも不思議の霊告なると檀上を拝しまするに同一躰の三尊ね垂ん
て立せ給へば一列十有五人の僧衆ゐる佛勅のかしこさなるに感涙膽り
給ひし今は猶ならぬ本尊の霊験を各讃歎白しけるかしも聖人は夜に日に及
継で急がせ給ふ程に此時既に御光ならせ給ひしかば衆僧所て迎へ奉
り佛勅の教き法ぶさに物かたり檀上にましまれ一光三尊の黄金佛
を奉し来り聖人に献じければ聖人歓喜の涙をながし即袈裟につゝ
とり笈のうちにおさめまいらせて自これを負せ給ひ暇を告て立出給へば順信
性信の両法師かはるがはる助負まいらせ同廿六日宮村にこそ下向ましまして
なり　善光寺南門新池院宅阿房にて此事つぶさに記されけり誠に此三尊一光の尊像は三国無双の
霊詳開帳の檀上の聖容にして生身の如くなりとかや其霊験のいちじるしきこと殊く殊妙にして言語
一の佛像なり今現に当院今堂に安置して本尊と拝し奉る霊像これなり　寳に押ひて聖人
御わけまし代々の帝天拝ありせ給ふにより称して天一の名像と号くとかや
志願悉皆満足し給ひせ給へば同廿八日より御堂造立の釿始めを

尊び給ふに他力の門徒等結まうけたるゆゑにはからずして期
したる飛騨信濃の番匠等に命じ日頃の精力十倍して
さながら結構したる大御堂翌年四月上旬に至て金堂経
堂をはじめ四門築地のうへまで悉く成就せしかば彼柳及び
菩提樹を汀の左右に植させ（二樹とも今に繁栄せり）伽藍成就の御供養ありてめでたく
後號ならせ給ふ迄に權化不可思議の霊場なり其後聖人
御年六十歳貞永元年正月十五日当院の御住職を真佛
上人（上人の俗姓法説下の巻に委く出る）に譲り給ふ真佛寂に及びて第二代の法
脉相承ありて終に正嘉二年三月八日法臈五十歳にして当
院に於ひて寂し給ふ（此時上人御年八十六歳）これによつて同年十二月真佛
の法友聖人の御直弟顕智上人附法相承して第三代の
住持職を授り給ふ其後七世を経て第十代真恵上人の御

勢州一身田へうつり給ひ當寺の古院は今に舊殿として存在
給ふとぞ ○御霊宝 聖人の御真像 皇太子の尊像 真佛上
人像 以上三体とも聖人の御自作なりこれは真佛上人の肖像は真佛滅後に高田の
顕智称名寺の信徒とせしにこれをかへしその信徒は御首を見得て惣体を造補し
御首真佛と称し称名寺に安ず顕智は御身体を見て是に
御首を造り添し惣体真佛と号し当院に傳持せり 顕智上人の像 自作
般舟石 本堂の北林の中にあり 柳樹 并 菩提樹 庭前にあり 高田九世の御墓 境内松林中に石塔あり
明星の社 ゐる田の入口にあり 柳樹の森社といふ

○当院第二代真佛上人と申すは当国下野の国司真岡の城主大内国行の
舎弟真壁国春の嫡男椎尾弥三郎春時是なり實父は国行より
桓武天皇の苗裔鎮守府将軍平国香卿の末孫にして世々続ける
家系なれども東国 に於ひて肩を並ぶるものもなかりしかど
に付するにや齢ころおへ一子なかりしかばうき世のつねをさとる
まつ舎弟国春に国司を譲り自ら宮村の地に菴室を営みて
隠居して住しけるが聖人当国に於ひて種々奇特のみちを弘通し
太子聖人の法徳をきく信じ渇仰のあまり宮村の隠居へ屈請し
奉り聞法随喜のあまり終に剃髪して御弟子となりゐる田入道

殿とぞ申けり此時坂東の郡司荘司我も〳〵と聖人を扶掖し
剃髪法衣の身となりまゐらせしかば國行の舎弟真壁國春兄
も同じく道に入んと深く心をとゞめられしかど舎兄の國司讓りうけ
當職の身なればそのまゝ任せし處に押ひかく嘉禄元年嫡子椎尾
弥三郎春時をして聖人常随の御弟子となしまゐらせ即真佛
上人の御事也○世にいふ人の御事を平太郎真佛房と申人なりと
云人あれども是は名異人にしてゆかりなし混じべからず○享保の
記には上人の俗姓は平氏にして桓武天皇の後胤平経盛が子なり
童名は保童丸とて幼稚の時より法然上人の御弟子となり
佛真と学し博識多才の大徳なりしが室師没し給ひしのち
ゐる祖に隨従し名は真佛と改め建保年中結城称名寺を開
基し正嘉二年三月八日に十三歳にして寂すと云く真佛生涯
開く所の霊區とて三ヶ所称名寺剣建の後一男信證に附与し
又下野國高田専修寺を起立し又智に一女を配嫁して是を讓り
又武州渋谷真正寺を造立らるれども真佛の俗姓は平氏千葉より
不諦実にして又佛光寺専修寺の二山は真佛の開基に
あしく高祖聖人御造建の霊場なるを掌まつらしむ享保の記
何よりつくいかく偽託せる甚しいぶかし○或人の云真佛上人は実に敦盛

御の一子なり平家滅亡の後は世の害へと憚りて大内家と伯親と
し出家ありしとかや是又其理あるに似たれども年代不合の説なれ
ば大に信用しがたし○真佛一男一女の子享保の記既に如くの
ごとし既に遺跡孫子は称名寺の旧系は真佛の後裔西宮信胜
房に附属せりといづれか是なるや去りし宝永の記享保の記尤
に紕て誤謬多し力なる者を捨せざんばあるべからず

## 宮村御旧跡

聖人御草庵の古跡なりける田より一里ばかり山の腰にあり此宮村と
いふ所に聖人の御弟子真空上人いふ人の子孫今にありとぞ

○天明当国御領主の近藤氏これを信じ茶釜を贈られし事也今に蔵す
それのある人天明釜といふ大に賞せり

○足利の学校は仁明天皇の御宇
小野篁開基せり聖堂には先聖の肖像顔曽思孟に配の神主
を安じ篋籩簋豆の祭器を列ね又書室と称しき小房に書
籍書数の具を設く傍に稲荷の神主を安しこれを祭り結
て云当所の徒昔童の学問所にして其後まで続く荘厳なる学
校なりしを足利義兼これを営築し理真上人と招請
して師としせしめ密宗の修行読経をなし世に足利の学校と云
とかん又云当所は昔童の開基なるを以て今に其神主を安して祭る

て学校建立のよしハ上杉憲實が企る所にして鎌倉圓覺寺の僧侶を呼でこれが
師範たらしむとかやまた云仁明の朝篁大臣唐より帰朝し自ら博学多才の長として
てあまねく六十餘州に学校を設け人々を教へられしかども國漸く衰へて文化
辺鄙に衰微しけるを纔に間遠せし所ありしかども久しからずして絶無せり獨當
國の学校のみ篁の勅により存するを以て唐朝傳來の先聖及び十哲の畫像祭器楽器
の圖式等を則し尚古書儒典を聚めて是を蔵し退轉せざらしむ按るに此說を
もちふべきは後年度々乃兵火に學校の基趾傳来の書画等焼失せしを後人
又其志を継で今の学校を建るなるべしされども彼画像等多くして
今に傳へたれば實に天下の至宝といふべきにも猶讀むべくよろこばしむべし其餘唐
以前の古書等今人の知らざる希なるものも多かるべし既に近來清朝にて翻刻
せる七經孟子考文といへる書も彼國に今ハ絶てなきが此學校の秘庫にありしを以
て異國までも是を傳へ得て我東方君子國の文德を仰ぎ奉めること
豈いふべくも紀なり傳ふる功ならずや中にも三要といへる僧當學校を
續しるが京師に出る所多く書籍を持去て今ハ昔のごとく蔵書ハ
多からずとなりされば當時ハ代々鎌倉建長寺の僧徒の中より續出して専ら
儒書を講じけるとぞ

○當國の名産・大方紙 那須より出其外那須八寸などとて名紙なり江戸へ出せり ・漆・絹・宇都宮笠・團扇
宇都宮より出る・穀の粉・餅米・稲荼牛房・銅 あしを山より出る 等なり

新居山稱名寺　西派　下総國結城にあり

以下二ケ寺とも順拜の路程のことを記し縁起傳説にいたりては國分の
例に倣て其部に出せり

高棠山法得寺　西派　同國佐河野にあり

野田院宗願寺　西派　同國古河にあり

鷲高山勝願寺　東派　同國礒邊にあり

高柳山光了寺　東派　同國中田にあり

親鸞聖人御舊蹟二十四輩巡拜圖會後篇巻之四終

二十四輩順拜圖會
後篇
相摸甲斐駿河
遠江叄河尾張
美濃伊勢
五

# 二十四輩順拝圖會巻之五

目録

妙安寺

妙義山

明智坊旧跡

新田足利

新橋

以上

## 信濃國

越後より信濃へ至るに関川と號るものあるに國界の川あり
右の方に見ゆる飯綱戸隠山乃遥拝所へてつ西

○戸隠山ハ越後に隣りて黒姫山に並びある御神ハ手力雄命なり日の神天石窟に籠らせ給ひし時常夜の國となりしがよろづの神達磐戸の前に集り神樂を奏し常夜のさかりなき難儀をうれへ給ひけれバ日の神磐戸を細く明給ひ其神樂をとゞろきに見し召れを待ちて戸隠にかくれましますを手力雄の神磐戸を引放ちて寶さかさまに投かひ日の神乃御手を取りて引出しまつる其投給へる磐戸此山に落止りしと即ち戸隠山といへるとぞ此山頂に洞穴あり内に九頭龍権現在して此山を護り給ふ至孝せる者ハ必ず此洞中へ梨の實を捧げまつれバ忽ち靈驗あらし祈念こゝろのまゝ患ひ痛みをとゞめ給へとて口中のいたみ齒の痛ミに苦しむ者ハ遠き國より隔して一生涯梨子を斷物として此戸隠山九頭龍権現を念じまつれバ靈驗ありといふべし誠に奇靈乃御神之

○野尻の里に湖水あり其流れ越後國へ落るなり今町の濱辺にて海に入なり此川を関川といへり此湖水も當國諏訪湖と同じく氷の張つめける其上を馬車も心よく往来せり諏訪の湖ハ冬中に氷れども此湖水ハそれほどは寒氣の嚴寒の時ならでハかたく凍ることなくして氷結びはべるまでありてはじめて氷とける湖中に於る紋じ数を構造せり

# 戸隠山

戸隠山は諸堂ともに
南面より登山し
大門二王門とあれば
奇石騰岩苔むして
らなりて松杉の太き
樹左右に生ひ繁り日の
蔭をもらさず此所々の
衛人家あり諸坊みなて屋上を
蓋へり山の北面には盛夏の時といへど
も雪深く樵夫も疎く登るものまれなれど
此山の北に後岸あり阿弥陀が峯と称し
山中すべて梅の木多く繁茂せり
高祖聖人爰に登山ましまし中の院
勧修坊に留り給ひ三尊の
弥陀仏を感得ましまし即筆を
染られ其尊影を写しおい
今も当山の什物たり

又聖人戸隠山より
出かゝる月のさし
のぼりたるを御覧じ
詠じ給ふ
御歌あり
戸がくしの
移ろふ月の
うつしゑは
心の玉が
もかげ
とぞ
みへ
小さ汞

本社

其二
中堂
坊中
三王門

明光山

野尻の湖水
戸隠山
黒姫山

○妙高山ハ野尻より西の方越後の国界にありて此国のうしろに積雪白妙
に猿を極るざるさまきよしぎの此雲の粋るさる山のさまを眺めせる佳還
乃猿ハ眺めく殊に奇とせり

## 柏原山明専寺　東派　水内郡柏原にあり

本尊阿彌陀如来 御長ケ二尺八寸 源信和尚御作 本堂九間四面○此寺往昔三州加茂郡月原といふ所にありて天台宗なりしが高祖聖人関東より御帰洛の時三河国矢矧の宿柳堂にて御教化ありせ給ふ御聖人に帰依し聞法随喜して本宗を改め真宗の佛閣となり其後御弟子真佛上人も当寺に来りて化益し給ひ古院なり高祖聖人九字の名号三幅を染筆ありしを一幅は此明専寺に授与し一幅は当地の又郎まに授り一幅は摂州富橋安楽寺に授け給ふとかや○当寺は其後真宗念佛の道場として代々相続しよりのち天正年中に織田

明高山

かしハ原

月原山
洞李寺
阿弥陀堂

信長公石山の御本坊を責て合戦に及び顕如上人大坂御籠城の時三州に真宗の門徒数多ありしが国司たる信長公へ対し操を持ての旨ありて宗門御停廢の命ありしかれども志の深切なる者は国司の命を遠背して改宗せざりしによりて了西禅門なと首を刎られぬ其時明当寺とかの又郎大夫は国中退去仰渡され当国に立帰へ賂は善光寺村に開住しのちに又当所に移住し寺跡相続をとけ侍りし○霊宝九字名号十字名号聖人之御真筆六字名号

蓮如上人御筆 其外数品これを略す

顕石山願法寺 水内郡新安村にあり

本尊阿弥陀如来 善光寺如来の御聖徳太子御感得之 ○祖師聖人枕石御本尊御首

は御自作ふして是を持は如信上人の御作なり 其外霊宝略す

○柏原より一里余新井ヵ二里平出村といふ里に[illegible]といふ在家あり是三州の住人又郎寛が末孫にして専明寺と同時に信州に流浪當所に住し聖人御真筆九字名号を傳来して安置せり

○此辺りに吉田といへる所に覚如上人の御弟子善教坊の開基なる善教寺といへる寺なり

## 善光寺　天台宗

伽藍凡十六区○本堂高サ十丈乃二重作り表十五間二十九間三尺柱数百三十六柱凡方凡門の号東ハ定額山善光寺西ハ不捨山浄土寺南ハ南命山無量寿寺北ハ小室山雲上寺とあり正南ハ破風作りにして他の堂舎に異也内陣ハ前帳を限り左の間に善光善佐弥生前の像を安置し右の間の御戸帳の内御本尊御正躰座し給ふ是又

彼の堂塔に本尊を安置せる跡と露しかれバ往昔善光の屋造りに準じたる堂造りなりとかや又如来善光に佛勅して子を汝と同座せんと述給ふ所なる内陣を左右に安置せしとぞ○山門 高さ十六丈六尺七寸 桁行十一間一丈三寸 梁間八間

二尺五寸 二王門 高サ三丈九尺二寸 桁行六間 梁間三間 二尺二寸 ○經蔵 高サ四丈六寸二分 六間三尺二分四方

本尊ハ一光三尊の閻浮檀金正身の阿弥陀如来にて此如来の日本へ渡らせ給ふハ人皇三十代欽明天皇十三年壬申十月十三日本堂建立ハ人皇三十六代皇極帝の勅願也開基ハ本多善光朝臣なり

○釈尊東天竺毘舎利城に在して法論を説じ給ふ砌月蓋長者佛勅によつて西方阿弥陀佛を祈念せしが忽ち長者の西の楼門に正身の阿弥陀如来影向し給ふ其時釈尊目連尊者に命じて龍宮城より閻浮檀金を召来らせ給ひ高臺にのせて阿弥陀佛に向ひしめ給ふに如来金色の光を放ちて彼金を照し給へハ黄金其儘一光三尊の佛体を現じ影向の三尊と左右に並び何れを何れと分難く釈尊給ひ漸みて一佛梵音を発し一佛に告て曰汝ハ此

善光寺中の街

善光寺(ぜんくわうじ)
本堂

山門
経藏
寺中

大勧進

其二
二王門
堂照坊
寺中

大本願

其三
寺中町

娑婆界に留り未来世の衆生を渡さんと記別して光明ともう
西乃空へ飛去給ひぬ今一佛は月蓋長者の家に留り種々の奇瑞
無量の利益を施し給ひたり月蓋代々生れ来りて此尊像を敬し
奉りたりが本願を起して生を轉じ百済国聖明太王と生れしとき
如来も同じく百済国に飛来りて大極殿に入給ひ聖明王深く尊
敬し給仕し給ひ又生を改め帰敬奉りたるに如来異乃方便に依て
聖明王の後身此日本に化して信濃国に生れ伊奈郡麻績の里
に本田善光と号く然るに此如来善光に強縁を結ばせ給ふ
より人皇三十代欽明天皇の御宇に百済ゟ日本に渡らせたまふ
天皇深く尊敬ありて曽我大臣に命じて豊浦の里向原寺に安座
なし給ひたるに守屋大連悪逆無道にして向原寺を焼亡し如来を
豊浦難波の淵に沈め奉りたり其後人皇三十三代推古天皇の御宇
大和国豊浦の宮警固の為信州本田善光在番にて三年の任満て本
国へ帰るさに彼難波の池の辺りを通りたるに如来忽ち水底より飛
出善光の肩背に移り給ひ汝が過去の前身は天竺にては月蓋百

海そハ聖明王より我ハ是阿弥陀の三尊なりしも汝ニ深き縁あ
りて日本に来り年久しく汝と待居より速に汝が本国に到り
未来世の衆生を済度せんと明らかに告給ふ善光欽然の後に
むせびて遂に本国信濃に身帰り妻弥生一子善佐とも尊
重恭敬乃誠心を尽し給ふ而后人皇三十六代皇極天皇御宇
て悪瘵に罹せんとし給ひしを如来これを救ハせ給ひしより宸に
叶ひて天皇廣大深重の恩徳を思召し勅命ありて大伽藍を
建立し正身の仏体を宸に鎮座在し給ふとぞ 委しくハ如来縁起にみえたり 其外境内諸堂図画のごとし

○高祖親鸞聖人此霊場に度々参詣したまひける処中元仁
二年聖人五十三歳ノ正月十九日此御正体一光三尊の真仏を一体
分身として感得し給ふ即野州高田山専修寺の為像天拜乃如
来是也 縁起ハ高田山専修寺の本に記とうがごとし

親鸞松 本堂右の方内陣本堂前楽想乃人の結界の内に大机あり其上に大なる花瓶に松一本建らるより

善光寺朝參りの圖

本田義光
難波の池に
如来を得る

傳に曰聖人當寺へ御參詣ありて此塔中の僧坊觀證院に止宿在りし間日毎に山にのぼらせ給ひ若木の松一本を栽て佛前に供じ給へりそれより以来數百年の今にいたるまで一日もおこたらず日々松を供ずる當光寺の法例とは成れり抑卅三尊佛は方便法身の御姿より現じ給ふ光明中に出現し給ふ尊像なれば是正真の阿彌陀如来なり親鸞聖人は是正く彌陀應化の聖者なれば内證同体なりといへども暫く能所の形を分し善巧方便の益を施し給ふとなれば所謂松は諸木の因として十八本と稱されば即彌陀の十八本願に表したりといへり伏惟は能所同体の中に松一本のこし給ふの由謂信ずるに感ずる故に親鸞松と稱し来るとかや

堂照坊　善光寺塔中に十八坊あり内十五坊は妻帯して如来を守護し百濟國より如来に随ひ来て常に給仕し奉りし傍達の子孫とかや總じて如来に附給ふ根本の妻帯の姓をつらぬく

如来に給仕なさしめんがため素常して勤仕なさしむとなん寺中坊号ハ右十又院の内其一坊なり　○善光寺南門堂照坊親鸞院ハ往昔祖親鸞聖人御参詣の宿坊なり御止宿乃間に於て並給ふ御遺宝二種傳来ス所謂聖人又十三歳巳月十九日善光寺如来一躰分身の金像を感得し給ひける時も此坊に止宿し給ふとぞ又元祖法然上人も寓を宿坊として一七日参籠し給ひける舊跡之○什宝笹巻の名号 聖人御真筆うりくま笹の葉に霊を深ふこれを並べそして六字の名号と書し給ふ世に無類の名号なり　○御歯一枚 聖人の御歯之御止宿のみぎり落させ給ふ所也　○紺紙金泥の弥陀経 光如上人御筆

○善光寺の東の方に犀川筑摩川二ツの大川あり筑摩川ハ其源甲州より出て浅間が嶽の麓をめぐり流来る犀川ハ当国 飛騨の谷より出て長沼の辺りにて両川合流し越後へながれてハ信濃川と号し新潟の湊より北海に入る此川国中の長流なり此犀川と落合ふ千曲川の川中島といふ其西を丹波島といふ此所ハ治承の昔木曾義仲と越後乃住人城四郎資長合戦ありし古戦場なり東の方に上杉入道謙信が陣をとりまへる西条山なり都て此辺りの島と合戦場とよぶなり

○川中島ハ永禄年中甲斐の武田入道信玄越後の入道謙信と対戦し双方智

堂照坊碁乃名号

川中嶋（かわなかしま）
松しろ

田ごとの月

姨捨山
田毎乃月

有明山

千曲川

姥捨山

勇の武臣ら討死を遂し大合戦の所なれバ其名世に高く諸書に委しくのべ
記しぬれバ其くわしきハ爰に云ず

○姨捨山ハ更科郡田代の宿より戸倉へ行間千隈川の向ふにある鏡台山の南冠山
にしてなり其ふもとに更科川の流あり新勅撰に此川を

今更にさらしなる川のながれても浮藻とせん身のなげくなり

姨もそ山長楽寺ハ観音を安置せり庵の方に姨石といへる大石あり此所に下りて
姨を捨たるよしとかや大和物語に更科の里に住る男姨をやしなひて親の
ごとくかしづきしに其妻のつらくあたりて云合せ深き山の奥
へ送りさせけりとぞへり後更科郷の里名おばすて山は昔姪をすかして年来養ひけ
るが姨乃年老くも月か出しければ八月十五日月のくまなきに此所をさとしの逢
せ捨置てかげて帰りたるとかや云々

我こゝろ慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て

今よりハ秋なれば捨の山勝月と花とのありけのこゝろ

○田毎の月ハ更科姨捨山の山田にうつる月かげの田面くまなく見
ゆる故此名の風景とせり

## 布野長命寺　西流　善光寺より一里　南堀にあり

当寺ハ高祖聖人の直弟西念坊の旧跡にして西派二十四輩

第七番也本堂十二間に西經堂一區坊舎三坊本尊阿弥陀如来 開基ハ西念坊 百歳ニして化 西念御坊乃俗姓ハ人皇五十六代清和天皇の苗裔八幡太郎義家の孫對馬守満實といへるハ 對馬守義親の子也 信州なる井上の城に住して井上次郎満實と号す其子井上又郎盛長乃息子井三郎源貞親といへる人なり六歳の時文治五年父盛長戦場に於て討死せりそれより母に相具せられて同国水内郡駒澤に移住し廿六歳にして母をも失ひぬれバ貞親発心乃志頻におこし て越後国に智の如来へ参籠し明師に値遇せんことを祈る七日満ずる夜夢ともなくうつゝともなくして又佛現とて告て曰汝有為轉變乃娑婆界を厭ふて菩提の門に入んことを願ふ誠に奇特の志なるかな今宴に真の知識あり其ハ名を善信坊親鸞といふ彼師に随従して教化を蒙るべしと彰なる霊告

寺中

二十四輩第七
布野長命寺
ぬの ちやうめいじ
本堂
墓所
経堂

を奉歎急ぎ聖人の草庵に至り発心の志如来の霊告を
語り給ひて御教化を願ひまゐらせければ聖人即ち彼がために他力本願
の不可思議を讃じ凡夫往生の安心をいとねんごろに示し
給ひければ貞親随喜の涙にむせび立所に信心獲得して
御弟子とならんことを願ふ聖人これを免し給ひ西念と名
を給はりたる宿縁のほどぞ有難き是よりして西念日夜に
祖聖人に常随し称名念仏怠らざりしが後に武州
足立郡野田といへる所に一宇の寺を営み専ら弘願一実
の宗風を継ぎ祖師聖人御入寂の後といへども弥教化
壮んなりしが正慶三年に御本廟第三世覚如上人
関東御経廻の砌西念いまだ存命して百七才なり覚如上
人に謁しまつりしが覚如上人大に歓び給ひ西念に対し祖師

御相傳の安心を得給ひしより西念坊敬て高祖聖人よりま
口授相傳ありし所の安心記抄御消息あまねく演説せしゆゑ
覚如上人感じ欽ぜ給ひ御坊の年齢百に七とせを積り極
衰老の耄言忘失の語もあるべきに其言語はさやうに聖人
の口授少しも違忘なく高祖の直説を聞に異ならず况実に讃
稱せるに余りなり是全く命齢の長なる徳なれば自今已
後此寺を長命寺と号すべしと命じ給ひて附西念御坊
其後翌年百八歳を命終とし三月十五日さする悩ともなく
端座合掌し観彼如来本願力の文を誦し念佛数百篇
唱へつゝとりに息絶往生を遂ね第二世の住覚念坊も
聖人の直弟又長命にして延慶二年に九十八歳にて
寂を示し第三世西誓坊の時建武の乱に寺を破却せられき

成田山
西巖寺
本堂
臺所

信州駒澤ハ開基西念坊の故郷なれバ爰ニ長命寺を再
興し前後又代を経るが第七世信貞坊の時堂舎を
同郡布施ニ移し享保年中ニ又此南堀ニ引移て万代ニ
不易ならしむ○霊宝十字名号 聖人御直筆 ○九字名号 聖人御真筆 ○
篆の名号 聖人御細工の六字 ○紺板六字名号 善導大師御筆 ○六字名号 蓮如上人御筆
西念坊乃像

成田山西巌寺 东流 南堀より三十丁長沼ニあり

本尊阿弥如来 恵心僧都御作 本堂九間 蓮師堂ニハ蓮如上人御自画
の真像を安す○当寺開基釈空信其俗姓ハ武蔵国忍の城
主成田平山の三男成田下総守といふ者これなりける 祖聖人関
東御経廻の御砌縁ありて親しく御教化を蒙り御附弟となり爰ニ
一宇を建立して真宗を弘通し西巌寺と号ス○十字名号 六筋

○十高僧 聖人御筆 ○繪像の阿弥陀如来三幅 一幅ハ台 孝子太郎 の光明本に六体の化佛 あり聖人の御真筆 御筆三幅ハ恵信僧都御筆 今一幅ハ実如上人の御筆 ○大般若經切 弁慶の筆 ○亀井六郎への消息 弁慶の筆

阿弥陀の梵字 中将姫の剃髪して織給ふ不地縮ハ蓮の系 開基成田下総守室清不粘を

平林山本誓寺 東派 長沼より又里半 松代にあり

本誓寺は新田院護法堂と号す本堂十間に西塔中十二坊

本尊阿弥陀如来 主踏の阿弥陀と称す 縁起ハ奥にしるす 開基是信大徳東派二十四

輩第十番に属す是信大徳ハ俗姓藤原氏吉田大納言信

明卿なり高祖聖人上足の真弟なり師命を承つて奥州に

赴き名所を開いて一寺を建立しこれを本誓寺と名づけ

住して弘法をし又法縁あるによりて此信州に来りて教導専

らなりしかも遂に一宇を造立しこれ又本誓寺と号せり

是信大徳の縁起は開基のれは委しくは 奥州南部本誓寺の条にしるす 當寺第四世宗信坊といへるは新

田辺中将義貞の息男なりし徳寿の備なりき○淵踏の阿弥陀如来佛之なり ハ聖人一尺八寸の像を刻て胎中に一寸八分の金像を納め置き給ふ此尊像を筏の中に安置し鏡ノ川と誠給ひしにありきわに此川洪水にて渡るべきやうなかりし聖人川岸にたたずみ在しけるに童子一人忽然と顕れ出来り申ければ我此川の淵踏として参らせんと其侭川中に入案内せり聖人後に従ひて渡り給ふに陸地を歩行がごとく心安く向ふの岸に着給ひ其時彼童子を看給ふに又空然として見へ給はざれば聖人奇異の思ひをなし若や筏の中の尊像の霊験に給ふものかと御懐を披き見給へば安置の阿弥陀の尊像水中に入給ひごとく御肌ぬれさせ在しけるにぞ弥々感涙ある故今に至るまで淵ふみの如来と称し奉る

松しろ
門
寺中

二十四輩第十
平林山
本誓寺
本堂
太子堂
寺中

瀬ぶミ阿弥陀如来の由来

聖徳太子乃真像（高祖聖人之御真筆）此ハ落涙の太子と号く開基是信御坊奥州本誓寺に座しける時弘長二年十一月朔日是信夢の中に聖徳太子告て曰くいふ是信都乃聖人此界の化縁乃尽て本土に帰らせ給ふなり我是をかなしく思ふて忍びたえず故に来て汝に告るなり早く上洛せよとの霊夢に驚き覚めて尊像を拝しければ遍身に汗を流し連眼より御涙を流させ給ふ是信感涙し急ぎ上洛して尋ぬれば聖人御入寂ありせ給へり不思議の霊像とて尊しける故に落涙の太子と称す今に拝む尊像の連眼に落涙の痕在しけるなり

○聖人御真像（御自作之実如上人文亀三年の御讃）○同御自画乃真影○寺号の額（聖人の御真筆）○十字九字名号十字名号（顕如上人乃御添状あり）以上八品の霊宝高祖より是信へ附属なり○尼祥連座の御影（是如上人御筆）○年越名号

蓮如上人御在世の時除夜の日此名号を書し仰せけるハ今日を年越之ごとく祝言せよし歌連哥などを詠じ遊びたまひ我も此名号を写して弥陀乃本願と諸人にしめし此名号を書せたまふとなり ○法然上人の御影 実如上人当寺に御止宿の砌筆に見給ひ書し給ひし之 ○蓮如上人の御影 実如上人乃御畫

○越後より入て信州御旧跡の順拝の巡行一筋ならば当寺より犀川を渡り芝村の阿弥陀堂を拝して千曲川を越へ松代乃城下に出るより塩崎稲荷山をすぎ青柳、会田、ゐやまり、刈田を経て松本の城下に至り再び越後の高田へ帰るもあり又関東より巡る方は木曽路に分く是より桔梗が原、塩尻、下すハ、和田峠を越て、芦田、望月、塩名田、尚行くて浅間嶽の麓、沓掛、軽井沢、碓氷峠など信州上野の国界之其外の事ハ別に記を

○越後より小諸在を経て関東に至るは若光寺より犀川を渡り丹波島へ千曲川を越へ屋代、戸倉、坂木、上田、田中と行く此所までの中山の名所あり即小縣郡にて此原のはゝきぎといふ名木あり遠きよりのぞまるれバ其形ありとみえて近く行けれバそれと知がたきものなれとて新古今集に坂上是則の哥に

〽その原やふせやに生ふるはゝき木のありとは見えて逢ぬ君かな

伏屋におふるといへるこのせやは小諸の山煙にちかく田舎の宿なり右の
川向ひに布引山あり左は浅間山嶽の麓にして此嶽は信州上州の境にあり
焼嶽中天に聳へ燃る烟の立のぼりたえず其煙は駿河の富士山に競べき
よしいふへよりもいひ伝へね伊勢物語に
〽信濃なる浅間が嶽にたつ煙をちこち人の見やはとがめぬ
去ル天明三年のころ此山の絶頂より火焔をとばし土砂を散し大石
を飛し湯の湯のごとく涌出し麓の人民死するもの数多人とぞ数を
まじへ上野、武蔵、甲斐の国まで其は鳴音冷じく焼ける砂灰に積る
事或は一二尺或は二三尺にいたり希代の珍事なり宝永の頃富士の焼て根も
焼崩れて土砂の吹出かる其噴しく不二の形ちを出し残して一つの
瘤のごとき山の形をなして宝永山といへりとなんくるる山の如き
燃出るく烟のゆるくたち昇るぞ只今に山の形勢にて此麓の川と溜り川
より入川の流れ出て溜りて遠く見えし是なん浅間の山の地獄谷の道より流れ出るよと
土俗のいひ伝へし又実をもて東海小諸両方の追分あり是より沓掛、軽井沢、笛吹峠に
まゐる也此所に熊野三社の権現を遷座なし奉る

松代より東五里芝村にあり

## 芝阿弥陀

阿弥陀堂 六間と十一間 正中西に向る十字名号 親鸞上人御直筆 此阿弥陀堂は往還にして

此土の民神と崇めるむ社人を吉池牧馬といふ十字の名号ハ御厨子に安置しまり曽て啓拝の縁日とし月に三度の縁日ゟて近村の男女群集し或ハ一七日断食して諸病を祈るに甚か験あるよしといふなりて霊異あるゆへ誠に如来の善巧異の方便なりとし○本ゟ十字名号ハ往昔親鸞聖人鎌倉御化導の時吉池某といへる武士あり武運長久の本なると授け給へと願ひまゐりけるに聖人是非を論せバ此名号を書てくあたへ給ひけり数代の後永禄の比と吉池家名相續して此名号をお傳安置せり然るに武士熊井孫又郎といへる武士此名号の奇特あるをきゝて深く所望して是ハ即先祖お傳の什宝ことなり武運長久の本なるものを我一命にも代がたしとて与へざりしかバ彼士孫態置し理不盡に奪んとしけるにより是ハ即名号を守護して下総国破部勝願寺へ逃入りけるに彼侍追ひ来りけれども不逞し止ざりけれバ是非なく勝

淺間ヶ嶽

本社
神主

芝阿弥陀堂

名号乃奇特災を免る圖

郡寺を出て信濃国へ走りけるに此侍猟心深く程過たけ来るを見て即今
いかにを隠さんとすべき方なくて柴茨の茂りたる野林の中へ逃て居けるに
侍ども鞭つて若や此柴茨の中にかくれやせんとて猶芝茨の四方を取囲み火を
て焼立けるに折節風烈しく火焔地に充満て黒煙空に覆ひたしま廣さ二三示
を暗闇の中に焼塞し今は遁ありとも火の中を遁出んすよしなくし
久敷き眼を瞠しつゝと欽びありぬるに彦三郎が蹲り居る辺りの芝
は又聞ざりけれ共りに残り今はもや焼死なんとせし程なるに不思議や俄に
村雨の一しきり降来て猛火悉く消しかば彦三郎辛き命を助かりし
もひとへに名号の御利益なりけれとていよいよ信仰肝に徹し今眼下の
急難をさへ救ひ給ふすましてや後の世三悪道の業火を消滅し安養
に迎へ給ひんすは何の疑ひかあるべきと宗門の外なりし即此所に草庵を結
び剃髪し法名を彩西と号し静寂として念仏して居たりける干時永禄に

追分の茶屋

右ハ大坂街道
左ハ江戸街道

年の夕とりや武田入道信玄大軍を引て出陣し東の方を望ミ見れバ山之
の中より紀十八石乃光明たなびき見へけり信玄怪く思ひ彼光明ある家
を尋ん給ふに於西か庵の内より出てる光明之庵の内を伺ひ見れバ於西
独りくるしく稱名念佛してゐたりける壁に掛たる名号より彼光明耀きう
信玄奇異のおもひを追庵主に向ひてかの掛を尋ねれバ庵主於西此年
月見しかども物語即此名号ハ武運長久の守りにて親鸞聖人の御筆也
と委しくかたりけるにぞ信玄殊に欽仰ひて我今戦場に向ふに武運長
久の瑞に逢ふ今日の合戦に勝利を得んこと疑ひなしとて名号に向ひ合掌
祈誓し軍陣に移して保し其日ハ十分乃勝利を得しかば弥名号乃
加護力なりとて其後の陣所に於て堂を建立し於西に預け光照阿弥
陀乃来迎也其外阿弥陀乃画像薬師如来の画像宿禱の跡に 阿弥陀
薬師降臨之地と記せり 宝永の比享保の比ともに縁起下総国猿部勝願寺の縁起
又越後国高田并波国境宗永寺より此等阿弥陀を支配せり

未詳

白鳥山康楽寺　西派院末　紫村より二里半塩崎にあり

報恩院と号す本堂十三間に面南す阿弥陀如来坊舎十三区○開基西佛法師（法然上人の弟子なりしが帰依によりて親鸞聖人へ附属の御弟子なり）西佛法師の俗姓は清和天皇第六の皇子滋野親王より九代の後胤海野小太郎源幸親（信濃守と号す）の子なり始めは禁廷に仕へして勧学院の文章博士進士蔵人通広と号せしが出家し西乗坊信救と号し南都興福寺の学侶より後に叡岳に登山し慈鎮和尚の門下に連なり浄寛と改号せり（本名は義仲の御内に博学広才なれば能書の聞へある陣中祐筆なり兼て義仲が願書を書きて八幡宮へ納めたりし大夫坊覚明といへるは）此時高祖聖人は範宴少納言の公と号していまだ御幼稚なりしかども聡明博識にして一聞千悟の器芝蘭の匂ひ一山に薫じけるによりて和尚の鍾愛衆に超え人なりしかるの砌

鐘撞堂
角間村
寺内

白鳥山
康楽寺
本堂
臺所
玄関
宝蔵
手水
門

浄寛
夢に
聖人乃
佛衣を
現じ給ふ
と見れ

び給ふ浄覚ハ此君の変じて佛菩薩の化現して渡らせたまふと出なく敬ひまつりくるに此所なる霊夢を両度まで感じたり一たびハ観音ニ佛身を現じ給ふと看る今一たびハ観自在菩薩現じ給ふを拝礼し忽観音の二と化し給ふとみてく覚れ兆ね兄よりいく浄覚ある重せらる日来に増さり干時高祖聖人二十九歳にして法然上人の禅室にまいり念佛の真門に入り給ひし時浄覚も潜に伴ひ給に室師乃會下に連りて御弟子となり室師より法名を西佛と賜りたる然ども西佛ハ本より高祖に随従し信仰深固のなによりいく吉水の門下に伴せ給ふなれバ法然上人是を知らせ給ひ西佛にして聖人と是乃弟子となし給ひたり西佛坊ハ聖人より年齢十六歳長さり高祖聖人識後へ左遷の時も供奉しまつり北陸関東路も給仕せり聖人

身代呈
名号の
由来

御像（ぞう）先は大師上人の荼毘（だび）を火葬し奉り御弟子達御身骨の灰を墨に添（うつし）て
練り合せ彩色（さいしき）し給へる御像也○傳に云比叡山の衆徒此像を破却（はきやく）せんとせし
を恐（おそ）れ御弟子達より西佛へ預けられ直し玉ふとぞ○御傳（でん）繪（ゑ）巳巻 御傳ハ覚如上人の御筆絵ハ康楽寺二代目淨賀法眼筆○紺紙（こんし）
金泥（こんでい）三名號 法然上人乃御筆○三禅蓮（えいれん）座（ざ）ノ御影（みえい） 聖人西佛淨賀畫寺 三世宗祖の筆なり○
西佛法師の像（ぞう） 宗祖乃作○六字御名號正信偈文（しやうしんげのもん）蓮如上人筆○聖人
御真骨（しんこつ）○大經御延書 聖人御筆○中将姫手織御珠数（じゆず）并香炉 天八
扇子（せんす） 高田正昭聖人西佛へ御譲りの品なり○身代（みがはり）名號 十字名號なり元祖聖人御真筆にて身代り
の名號と唱へまするは蓮如上人石山御籠城
の砌（みぎり）参州一國真宗の門徒停止仰付られたる是は信長の御欲する真宗によりて
宗より西とらへたる念佛者あり深く当宗を帰依（きえ）し奉り國主の厳命（げんめい）ありといへども改宗
せざるゆゑ遂に捕へられ禁獄（きんごく）せられ遂に死罪に行はるべきに極りたるに折ふし
いふある瓢しきに聖人御真筆の名號を膚（はだへ）に納めて居りて念佛して頓首の
座（ざ）に着（つき）けれバ太刀取（たちとり）後（うしろ）より正しく首を討（うつ）とすれども不思議（ふしぎ）にも斬（きれ）ず太刀の刃ことごとく
これかれと二度三度に及ぶといへども唯（ただ）はじめのごとし依て此よし國主へ申すに命を
うけて更（さら）に奉行衆大いにおどろき皆これ名號の不思議（ふしぎ）なりとて國主へかくと訴へければ國主の命を
助け國中をさまよひ歩くべき者なりとて西ハ追放（つゐはう）せられし信州に赴きしがいかなる
我が悲紀の刑を逃れしものは聖人の膚中（はだへ）の名號なりとて生涯（しやうがい）の不思議を感じ
名號帰命盡十方無㝵光如来と書せ給ひ十字名號帰命の二字地縮みにて斬
より西鉄森の流れにむかひて当寺内に黄金紙経帰命寺と號し念佛三昧して
ひとへに往生を遂げしとぞ是によりて身がはり名號とは申しならはせりといふ

斷絶し淨命寺も退轉し　○其外什寶數品略之
其後ハ當寺の什寶となる

太寶山正行寺　宗派御坊所　圖田 此より十二里　府中松本よりあり
塩濱より 稲荷山　ここを東部 金田 一ケ条

高祖聖人直弟了智法師の開基也了智法師とハ其
俗姓宇多天皇の後胤近江源氏佐々木四郎高綱といひし
武士之源頼朝伊豆國に義兵を揚げ驕る平氏を討んと
し相州石橋山の合戰に敗北し僅に主從七騎に討なされ土肥
の椙山まで逃のびたるに平家の勇臣大庭三郎大軍を率ゐて追進
より時頼朝既に危かりしに此佐々木高綱一人鎗を以て敵の
中に走て入り寄來る大軍を追まくりく七度まで血戰し
終に頼朝を救ひ得たりされば此度の勲功抜群之とて頼朝感
賞のあまり高綱を近く招き語ひ我若天運に叶ひ平家を
亡し天下統掌握する者ならば日本半國を割て汝に與へんと

本堂
客殿
佗木塔

大宝山
正行寺
御城
松本

佐々木高綱
石橋山高名

門系図なりける綱開基の寺二ツに分れもありといへども何も根拠

をしらず

木曽山長称寺　東派　門跡門下寺

開基は義延坊念信（俗姓木曽太郎義基）覚如蓮如の両上人教化の霊

場也中古越後国より爰に移住れりと云々　○義延坊念信

は高祖聖人の真弟也ともいふ又真佛上人の門弟にして

祖師の孫弟子なりともいひ伝ふ何れも是なるを

しらず

宮川神社八幡宮の社　松本より三里半　中条村にあり

社説に曰祖師聖人の真弟諏訪部丹後守源季政

法名宮川淨喜坊住所なりとぞ○什宝九字十字の

名号○三方正面如来○聖人に十歳御木像○後光六

此は聖人より附属し給ふ教如上人
准如上人御免書ありしと云云

字名号○浄土和讃○日乃丸名号

○美濃国より信濃に入東国にいたる路木曽街道といふ先美濃の落
合より馬込にいたる此あいだに石橋あり是美濃信濃の境なり坂の下馬込宿
といふ是より山路にかかり木曽のみさか妻籠山。三戸野。野尻なんど険阻
なる山坂多し
一出る峠に入る此鳥居のちかくに木曽路は月の影をなかめける
須原あげ松のちかくに今井村あり是は木曽義仲の家臣今井四郎兼平が
古郷也上松の上福島の下は木曽川御岳川合流のあたりにて名ところ木
曽の棧道は此所の断巌にかかれり
一生きてたつ谷の梢を踏ならしぬとふむ木曽のかけはし
宮腰に義仲の古跡あり是よりやぶ原。奈良井。贄川。本山
洗馬。塩尻。諏訪にいたる是より笛吹峠までの街道は昆布
○上諏訪に詣り在る御神は建御名方命と申奉る下諏訪
まつる御神は下照姫と申奉る諸社一覧に旧事紀を引て曰天孫降臨ま
しくるの時建御名方命 御事に逆へて服ひ給はず経津主の神 旅神
をして是を退けしむ建御名方命逃て信州諏訪にいたりて降ひて給ふべ
かさく此諏訪の郡を住て我に帰らしば謹で天孫の命に従ひ給ひし経津

蓮け岩

寝覚の床

つゞら岩
とこ岩
弁天
床山
浦嶋社

諏訪湖

主の神天孫に告て則竟し給ふて此諏訪明神と見へたり

○諏訪の湖並びなき名湖にて西は飛弾山に続る嶺ならび立東は駿河なる不二の高根を遥に望む湖の眺め三里とはいへども北山重畳の間にみなぎりて風景殊に勝れてまことに画にも及ばぬ程なりて冬は湖上一面に厚氷ありて諸の人馬皆氷の上を往来し諏訪の上下を往還になる近きを以て数里去人もいとく便利とせり霜月の始より湖上氷を結び其中旬神渡りといふ事あり此神渡り在して後は人皆恐るゝ事なく馬を馳車を牽て湖上を越なれども其しるしへ今より立て氷破るゝ人馬湖なかに落入しことなし例年もの及ぶ先は諏訪の御神春渡の神旅命してそはじめて渡りを数へたまふよし去年以来二月の末再び神旅氷を渡る先に明神の人馬の往来をとめ給ふとそ湖上を渡る

若はし堀川百首顕仲乃哥り

諏訪の湖の氷のうへのかよひ路は神のわたりて解るなりけり

又顕昭が袖中抄には信濃の諏訪の明神の一宮とや女神の許へ跡是の時日の夜毎ひ給ふ折ひとよ諏訪の湖氷りて諸人も歩行渡りし給ふ時日の夜ましりし給ふまたしの氷のまたにてまた三月且に解ぬともいへり又一説に氷のうへに廉の足跡みつ神の渡り給ふまるしえと里人も見より渡り初るよしなり

# 上野國

信州碓井沢より笛吹峠を越へて上野國坂本にいたる夫より横川
又北村などを経て松井田の宿あり此驛より東の方十六七丁に本山の
其の麓に小倉山智明坊の旧跡あり

## 小倉山智明房旧跡

信州松本より上野松井田迄行程二十七里余
松井田より十七丁西の方小倉山にあり

智明房は法然上人の御弟子にて智行兼備の知識なり
小倉に隠遁なされ凡十年（元久二年より宝治元年迄）居住し給ふといへり
高祖聖人越後に五年の間御座まし建暦元年勅免
を蒙り給ふより其翌年の春上洛の思召ありといへども北國
は雪深く北陸道の往来難く東海道より上洛し
給はんとて信濃路にさしかゝり善光寺へ御参詣ましまし笛
吹峠を越へ松井田に至り給ふに小倉山といふ所に智明坊
在しを聞召石給ひ其所へ入らせられ京都のことどもを御
聞なさるゝに法然上人は正月二十五日御遷化なさせ給ふを聞

聖人御帰洛

へまんだうも貴人の屋跡なるハ名の所なりとあんないあり

# 一谷山妙安寺

東流浪家　赤木山より安中へ二里　安中よりこれ
本山名跡　三里　是より又三里　厩橋よりこれ

高祖聖人親鸞乃御弟子二十四輩第十六ハ一谷成然御坊の遺跡なる
阿弥陀仏ハ恵心僧都乃御作　高祖聖人信釈の名像也　成然坊俗姓ハ
九条家の臣属中村中務行実卿といへる人之讒者の為に罪せられ下総
国猿島郡一ツ谷といふ所へ配流せられ給ふ此時高祖聖人常陸国稲
田に在して御化益ましませ給ふ事を聞て急ぎ稲田へ参向し聖人ハ遠流
志給ふ先より聖人御親属乃御由縁といひ無実の罪に配流せられしまた
まふ事をいとほしと思召し殊に御ふびんを加給ひける故に聖人の禅室
へ参りし御教化を蒙り給ひしより本願他力乃妙法ハ如来出世乃
本懐元来直入乃要路なる事を会得し信心獲得し深く聖人
真乃御弟子となり剃髪染衣の姿となり名を成然坊と授給ふ

妙義山

一谷山
妙安寺
城下町口

本堂
墓所
門
ろう

嘉久八三年ころ是より隆寛して本願を信ずるの専ら深くして二心なき
つまき浄光坊一谷に一宇を造立なしけれども聖人の命う
より旧国三村に堂宇を移し寺号を妙安寺と号け給ふ
聖人御帰洛の後も浄光坊寺に住してましく御宗
法嗣續なるが弘長の秋の比御弥御年齢長じさせたま
ひねまれが頻く本土へ帰らせ給ふなりやと東国の門葉等
申合せ上洛して今一度聖容をも拝さまほしと協議し
けれども老たる呟老たる姿の所なるなる都に登らん
こともかなひがたく即浄光坊に付て願ひけるは我いかる我
過去の善縁ふや聖人の御化益に預り御門葉の数に連
なりぬれどもなにとぞ聖人御自御真像を御記念に下し賜り
さむらひ生前死後の歓び御滅後までの御化益且なまる

世の御對面とも仰奉るべしとて感涙をながし頻に請ひ奉りけれ
ば性信房殊勝に思ひ御門葉惣代として弘長二年上洛
なく良久しく給ふる聖人え拜顔申上られしが聖人何
るよりも關東の門葉またなく御教化を信じ念佛の
信心篤かりけるを時々せらるゝこそ殊に御悦喜なし給ふ
平塚性信房にかく關東の道俗御真像を請ひ奉るに
と言上申されければ聖人御慈哀の余り御染筆ありて御
老躰の御苦悩とも御厭ひなく自ら斧刀を申して御寿像
を彫刻し給ひ是弟子が心根を察さる故なれば末世に至
まで此彫像を以て化益せしむべきものとて性信に授与し給ふ
性信房歓喜渇仰し是を頂戴し御供申下総に下りて三村
の自坊に安置し門葉の輩に拝せしめ給ひければ御門葉

門前の道俗聖人の尊像を拝見

の道俗競ひ集りて御真影を拝し欽慕讃仰たへざるに寔
に御在国の昔に勝まさり是より妙安寺に相伝し安置為
敬し奉る
上来記ともに安永八年の記大谷遺跡録にまたつぎに寛永享
保の二記ともに此御真像は聖人関東より御帰洛のおり
成然坊御在所を拝し奉せ給ふによりて御帰洛の御記念として
御自作にて成然坊へ御附属ありせ給ふ御真像也とぞ云　其頃関宿の領守
より寺領を寄附せられ菩提所となし給ふ志ありしがそのゝち
此郡守武州川越を領し移封ありける給人が妙安寺も
ともに随従して川越に移住せり　其もと三村の旧地にも相続し
寺号を称正寺と改め今に本寺あり
なれども真宗寺中古来の寺号に復し妙安寺と称し別寺と
なりてあれが三村まへなりしの両妙安寺とも同姓同系の寺なり　高祖
聖人御自作の御真像を川越移住の妙安寺に安置し奉
ありしにさまざま雑き細のありて此真像を東本願
寺に譲したてまつり今東の御本廟にかゞやかせる御像を
さるいち是なり其後再び上野厩橋へ寺を引うつしたまへ一とも

鏡堂乃縁起にかゝる古びたるもの有りとよ記を一覧ある承
乃記享保の記大谷遺跡録に准じ記するもの也
霊宝器目 ○高祖聖人等身御影 蓮如上人の御筆 叡如上人より御真像御代乃御叡として免許あり實如上人御添状あり ○泥筆十字名号 ○八字九字十字六字名号 共に小幅なり ○聖徳太子御影 ○唯信鈔 親鸞聖人御真筆 ○成就法師自画像 成就法師とも 親鸞聖人御筆 右宝物等乃表具表紙文庫筥等悉皆世にたぐひなき重器なれば世上門葉の随喜渇仰しまつることなり比類なき寺宝なりとぞ

○厩橋の城は天正年中織田信長乃家臣滝川左近将監一益が居城也上野と武蔵との界にかんな川といへる川あり滝川一益相州小田原乃城主北條氏政と対戦に及し所也又下野の界に渡瀬川あり川の近辺に太田矢木のあと新田といへり義貞居城の跡も新田の金山といふ山に馬場の跡ともあまり川の向ふ下野の地に足利といふ所あり是は足利尊氏出生の地也いにしへの武士多く地名を以て氏とせられし其の

佐野乃舩橋

ことごとく此時代にはなくなりけり

○厩橋より武蔵国江戸へ巡拜するもあり或は下野に至き日光にまうで回向院巡拜するもあり下総へ赴る順路に佐野を経て須賀の舩橋の渡あり萬葉集に

〽上野のさのゝ舩橋とりはなし親はさくれとわはさかるかへ

又後撰集に

〽東路の佐野ゝふなはしかけてのみおもひわたるをしる人のなき

定家卿の駒とめて袖打拂ふ影もなしさのゝわたりの雪の夕ぐれと詠ぜしは此歌によりて大和なる佐野ゝ渡り之森の謡曲にもみえたりよしれ大和路や三輪が崎なるとかくまうしけり

○風土記に云上毛野下毛野ともに上野下野両国の内にありて佐野笠懸郡にもあり此の中に川あり渡瀬と名つく又佐野の中川とわたり其渡瀬より内を両国の境として川の西を上毛野といひ川の東を下毛野といふ

○抜鉾大明神の社は甘羅郡にあり上野国の一の宮なり祭る神は經津主命安閑天皇の御宇に現じ給ふ

○宮城山に明神の社あり神前に懸る鰐口の大さ徑六尺に余れり何の代よりか掛けけりしや世にめづらしき鰐口なり

○玉村名和司馬乃かくりにたるるに山あり此山中にいかほの沼あり
「いかほのやいかほの沼のいかにして恋しき人を今ひとめみん
又山下にいかほの湯ありよろづ山も此にちかし
「うば玉の黒髪山をけさこえて木の下露に濡にけるかな
○刀根川は此辺りの大川なり新勅撰に
「逢までの袖こそぬるれとね川の石は踏ともいさかはらまし
○赤城明神の社は勢田郡にあり本地覚満大菩薩允恭天皇の御代にまつる
「上野のそのたかきのかみ母ろやまとふいろの流を露さん

二十四輩順拝圖會巻之五終

浪華春泉齋竹原清秀畫

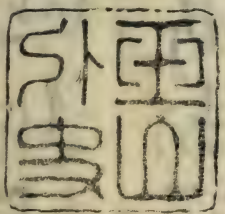
跋

書肆某等。齋二十四輩巡拜圖會者而到。謁請其是正也予乃謝曰。吾固不知文辭。况於瞿曇氏之道乎。且性多病。足未嘗出都門之外。則所圖會之靈地勝境。亦未見之也。以其一所不

吾之與所不見。而憶斷之。猶聾者論文章。聾者辨鐘鼓。吾豈敢。吾豈敢。固辭再三。某嘗請而已。乃繙其書而閲之。只行文燁焉。模圖優哉。謂之二絶。豈所好乎。而綴緝緣起故吏者。河田之子貞師也。姑舍而不論焉。若夫

摸圖其靈地勝境者我所願生
平生往年提挈三友而遊北越
東關見人之所未見聞人之所未聞
而煥發其蘊奧者結構之思意
亦周矣於是乎摸圖一切奪化
工可以知焉乎縱令彼靈地勝
境之神而夜哭亦何怪焉以

某等懇求之切。而不得已。遂出斯之于卷尾。以塞其責云。于時享和癸亥春三月

法橋玉山識

# 二十四輩巡拜圖會後篇　全部五冊

僧了貞著　竹原春泉齋画

此篇に載る所ハ江戸浅草乃御堂築地御坊よりはじめ上野常陸陸奥出羽下野下総相摸甲斐駿河遠江参河尾張美濃摂津河内大和備後に至るまでの御舊跡を前編に同じく真景の繪圖を加へ里數名所等を集め記し前後の篇と合せ視るときハ安坐して御舊跡を順拜せしむるの書なり

京　井上治兵衛
〃　樋口源兵衛
〃　市田次郎兵衛
〃　池田長右衛門

彫刀氏

享和三年癸亥春新刻

京都書林　菱屋孫兵衛

江戸書林　松本平助

大阪書林　小刀屋六兵衛

海部屋勘兵衛

勝尾屋六兵衛

河内屋太助